

福岡市早良区

藤崎遺跡

III

第7・9次発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集

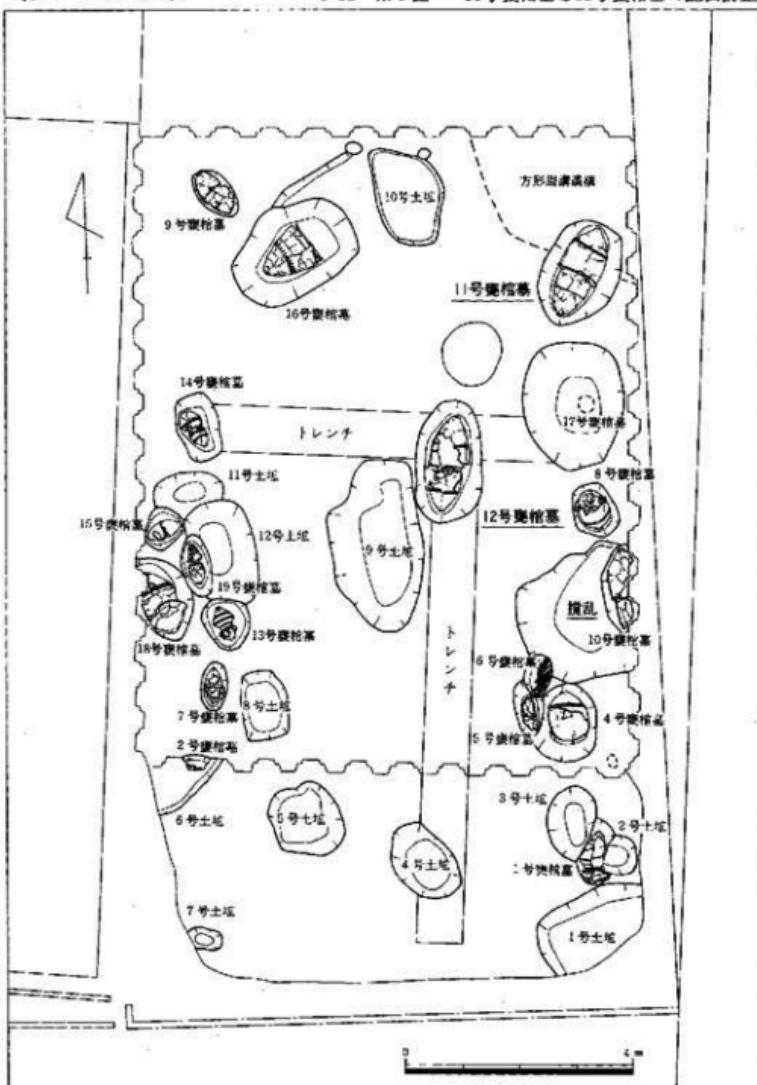
1986

福岡市教育委員会

頁	行	題	正
本文目次	I	IV號 第7回調査 12 1. 調査範囲の概要 12. 2. 調査名録 12. V號 第8回調査 47 1. 調査範囲の概要 47 2. 調査名録 47 11 11 11 46 46 46 46
回収目次	IV V	第40回 1号・4号・5号土器群 標本6 (3) 11号埋蔵品 (4) 11号埋蔵品人骨出土 状況	2号・4号・5号土器群 (3) 12号埋蔵品 (4) 12号埋蔵品.....
本文	2 4 10 13 24 14 3 17 2 4 13 4 9	回収7 (1) 12号埋蔵品 (2) 12号埋蔵品人骨出土 状況	(1) 11号埋蔵品 (2) 11号埋蔵品.....
	5	回収22 (1) 39号土器 (2) 39号土器群 出土状況	(1) 44号土器 (北から) (2) 40号土器 (北から)
	19	(3) 40号土器 (4) 44号土器	(3) 39号土器土器群出土状況 (4) 39号土器 (北から)
	5	回収23 (1) 2号古、及び3号房 土器群 (3) 3号土器群	(2) 2号古 (方形窓跡有) 土器群 (3) 2号古、及び3号土器群
	11	金子山洞子	金子山洞子
	11	藍川川の東側に	藍川川の東側に
	13	福岡市庄内地区が	福岡市庄内地区が
	21	主船方方位は-15°-Eを	主船方方位は-5°-S 30°-Eを
	21	主船方方位は-21°-Fを	主船方方位は-21°-Fを
	1	主船方方位は-24°-Fを (第7回、回収6)
	3	主船方方位は-3°-Eを	主船方方位は-5°-Eを
	2	12号埋蔵品 (標示、回収7) (第8回、回収6)
	4	主船方方位は-3°-Fを	生能方方位は-3°-E
	13	主船方方位は-36°-Eを	主船方方位は-3°-E
	4	主船方方位は-37°-Eを	主船方方位は-3°-E
	9	主船方方位は-20°-Eを	主船方方位は-3°-E
		主船方方位は-17°-Eを	主船方方位は-3°-E
	51	第2版	
	10	R2 (179) N-15°-E	N-21°-E
	25	R3 (180) N-54°-30'-E	N-54°-E
	41	R11 (182) S-24°-E	S-24°-E
	42	R12 (183) N-3°-E	N-3°-E
	9	R16 (187) S-63°-E	S-62°-E
		R18 (189) S-13°-E	S-13°-E
	51	平面形は横円形を	平面形は横円形を
	55	下1...近畿内面に近畿内面に
	41	斜 (34, 35) 口絶縫を34は口絶縫を
	42	山形突起を	山形突起を
	9	11号・12号土器24	11号・12号土器が
		波状の縫合を	波状の縫合を
		3号柱頭部 (第30回、回収21)、 (第30回、回収21)
		22)	
	51	西安東支那がある。	西安東支那がある。
	63	方形周縁状に	方形周縁状に
	65	西安東支那	西安東支那
	77	22号柱頭部出土石器	22号柱頭部出土石器
	78	方形周縁状出土石器	方形周縁状出土石器
	79	(42) 異の剖面と	番 (42) 剖面と
	15	円底には	円底には
	90	70-P109	70-P129
	82	(27) M1: 土器物 (第48~50回、回収38)
	1	(第48回、回収38)	
	84	東 (102~107)	東 (102~105, 107)
	108	107は表土、	107は表土、
	56	底泥との	底泥との
	25	境 (122, 126)	境 (121, 126)
	55	回旋りの	回旋りの
	90	土器 (169~174, 180, 181)	土器 (169~181)
	91	178~199	178~P116
		179~性全器	179~3号土器
	93	第7回3号器
	95	176号土器点一器全器	発生時代後期の奥高に
	96	発生時代後期の年に	周囲としての
	7	周囲としての	周側に位置し
	16	周囲に位置し	下部は14号塗装
		13号塗装	下部は13号塗装
		14号塗装	丹波塗装され、
			(1) 9号土器 (北から)
			(2) 9号土器 (南から)
	105	主船方方位はN-44°-Eを	主船方方位はN-54°-Eを
	106	周囲区の中央部で	周囲区の北側面で
本文目次	回収11		
本文	13	29	
	17	3	

〔訂正挿図〕

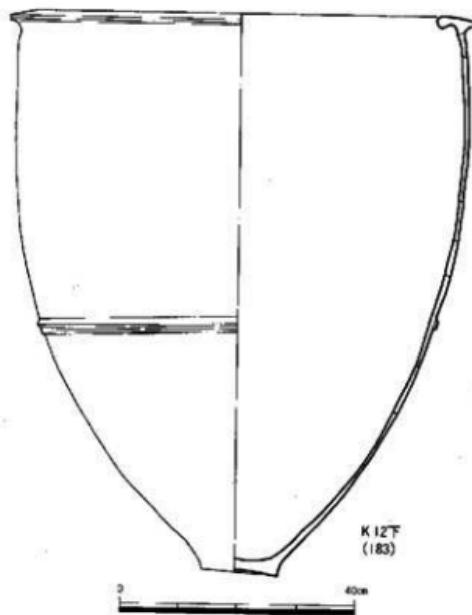
P 12 第5図 11号墓と12号墓の配置訂正



第5図 第7次調査道構配図(縮尺1/100)

〔訂正挿図〕

P30 第18図 K12下妻の図面訂正



第18図 11号・12号腰棺 (縮尺 1/10)

福岡市早良区

藤崎遺跡

III

第7・9次発掘調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

序 文

早良区役所周辺は、近年の開発に高層化が進んでいますが、この一帯は古砂丘上に形成され、藤崎遺跡が存在する地域でもあります。昭和56年に開業した福岡市営地下鉄に伴った発掘調査では、弥生時代の櫛棺墓群や古墳時代～奈良時代の住居跡が検出されました。又、バスター・ミナル建設に伴った発掘調査では方形周溝墓が検出され、三角縁神獸鏡が出土するといった貴重な成果をもたらしています。

今回報告する第7・9次調査では、櫛棺墓に加え藤崎遺跡では例の少ない中世の土壙群や古墳時代の住居跡が検出されました。藤崎遺跡の分布範囲や時代を考える貴重な資料です。

本書は、そうした調査の成果を記録したものですか、本書が広く活用されることを願うとともに、発掘調査から資料整理にいたるまでに多くの関係者からいただいた助言・指導・御協力に対し、深甚の敬意を表するものであります。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 喬郎

例　　言

- (1) 本書は福岡市早良区藤崎に於けるテナントビル及び住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和58年度に実施した緊急発掘調査報告書である。
- (2) 本書には第7次調査、第9次調査及び、付論を収録する。
- (3) 本書に収録した発掘調査は井沢洋一、松村道博が担当した。尚、人骨の取りあげについて
は九州大学医学部解剖学教室の田中良之氏にお願いした。
- (4) 本書掲載の写真撮影について、第7次調査・遺構－井沢、松村、谷沢仁、遺物－谷沢、第
9次調査・遺構－井沢、谷沢、遺物－谷沢が担当した。
- (5) 本書掲載の遺構、遺物の実測は以下のとおりである。

第7次調査 遺構実測－井沢、松村、谷沢、辻哲也

遺物実測－谷沢

第9次調査 遺構実測－井沢、松村、谷沢、清原エリ子

遺物実測－谷沢、中村昇平

- (6) 本書掲載の遺構、遺物の整図は第7次調査を深堀博子、第9次調査を深堀、池田洋子が行
った。
- (7) 本書の執筆は以下の通りである。

I・II章————井沢

III章(第7次調査)————谷沢、井沢

IV章(第9次調査)————井沢

付論1 九州大学考古学研究室——宮井善朗

付論2 九州大学医学部解剖学教室—中橋孝博

- (8) 本書の編集は第7次調査を谷沢が、第9次調査を井沢が各々行い、合本に際しては井沢が
行った。米倉秀紀、池田、深堀の多大な助言を得た。

本文目次

序文	本文頁
I 章はじめ	1
1. 調査に至る経過	1
2. 第7次調査の組織	1
3. 第9次調査の組織	2
II 章 遺跡の位置と環境	4
III 章 調査の記録	8
IV 章 第7次調査	12
1. 調査経過の概要	12
2. 造構各説	12
3. 遺物各説	24
4. 小結	43
V 章 第9次調査	47
1. 調査経過の概要	47
2. 造構各説	47
3. 遺物各説	67
4. 小結	94
付論1. 「九州大学文学部考古学研究室・九州大学教養部玉泉館収蔵の藤崎・西新町遺跡周辺の遺物」	100
付論2. 「福岡市藤崎遺跡第7・11次調査出土弥生時代人骨」	113

挿図目次

第1図 早良平野の遺跡分布図	(1/50,000)	3
第2図 藤崎遺跡周辺地形図(昭和初期頃)	(1/5,000)	5
第3図 藤崎遺跡周辺地形図	(1/5,000)	6
第4図 藤崎遺跡調査地区配置図	(1/4,000)	7
第5図 第7次調査造構配置図	(縮尺1/100)	11
第6図 1号～7号甕棺墓	(縮尺1/30)	14
第7図 8号～11号・13号甕棺墓	(縮尺1/30)	15

第8図	12号・14号～16号・19号甕棺墓	(縮尺1/30)	16
第9図	18号甕棺墓	(縮尺1/30)	17
第10図	1号～4号土壤	(縮尺1/30)	20
第11図	5号～8号土壤	(縮尺1/30)	21
第12図	9号～10号土壤	(縮尺1/30)	22
第13図	11号・12号土壤	(縮尺1/30)	23
第14図	1号・4号甕棺	(縮尺1/10)	24
第15図	2号・5号・6号甕棺	(縮尺1/6)	26
第16図	7号・9号甕棺	(縮尺1/6)	28
第17図	8号・10号甕棺	(縮尺1/10)	29
第18図	11号・12号甕棺	(縮尺1/10)	30
第19図	13号・14号甕棺	(縮尺1/6)	32
第20図	16号・18号甕棺	(縮尺1/10)	33
第21図	15号・17号・19号甕棺	(縮尺1/6)	35
第22図	包含層出土遺物	(縮尺1/3)	36
第23図	出土遺物(土縫)	(縮尺1/2)	38
第24図	搅乱出土遺物	(縮尺1/3)	39
第25図	搅乱出土遺物	(縮尺1/3)	40
第26図	搅乱出土遺物	(縮尺1/3)	42
第27図	第9次調査遺構配置図(歴史時代)	(縮尺1/100)	47
第28図	第9次調査遺構配置図(古墳時代以前)	(縮尺1/100)	48
第29図	1号・2号住居跡	(縮尺1/40)	50
第30図	3号住居跡	(縮尺1/40)	51
第31図	1号・2号・4号土壤	(縮尺1/30)	52
第32図	3号・5号・6号土壤	(縮尺1/30)	53
第33図	7号・8号・10号～13号土壤	(縮尺1/30)	55
第34図	14号～19号土壤	(縮尺1/30)	56
第35号	21号～25号土壤	(縮尺1/30)	57
第36図	26号土壤	(縮尺1/30)	58
第37図	27号・28号・32号・33号・35号土壤	(縮尺1/30)	59
第38図	36号～38号・44号・45号土壤	(縮尺1/30)	61
第39図	39号～41号・47号・52号土壤	(縮尺1/40, 1/30)	62
第40図	1号・4号・5号溝土層図	(縮尺1/30)	65

第41図	方形周溝遺構実測図	(縮尺1/100, 1/40)	66
第42図	1号～3号住居跡出土遺物	(縮尺1/3, 1/4)	68
第43図	土壤出土遺物	(縮尺1/3)	71
第44図	25号・35号・39号土壤出土遺物	(縮尺1/3, 1/4, 1/6)	72
第45図	1号～5号溝出土遺物	(縮尺1/3)	76
第46図	方形周溝遺構出土遺物	(縮尺1/4)	77
第47図	方形周溝遺構出土遺物	(縮尺1/4)	78
第48図	Pit出土遺物	(縮尺1/3)	80
第49図	Pit出土遺物	(縮尺1/3)	81
第50図	Pit及び包含層出土遺物	(縮尺1/3, 1/4)	83
第51図	表土、及び包含層出土遺物	(縮尺1/3)	85
第52図	表土、及び包含層出土遺物	(縮尺1/3)	87
第53図	包含層、遺構面出土遺物	(縮尺1/3)	89
第54図	出土遺物(土製品)	(縮尺1/2)	91
第55図	出土遺物(石器)	(縮尺1/3)	92
第56図	出土遺物(鉄器、近世陶器)	(縮尺1/2, 1/3)	93

図版目次

図版 1	藤崎遺跡周辺航空写真(昭和55年11月撮影, 1/50,000)		
図版 2	(1) 第7次調査区遠景(北から)	(2) 調査区全景(西から)	
図版 3	(1) 調査区南側全景(西から)	(2) 調査区東側甕棺墓出土状況(南から)	
図版 4	(1) 1号甕棺墓(北から)	(2) 3号甕棺墓(西から)	
	(3) 4号・5号・6号甕棺墓(西から)	(4) 6号甕棺墓(東から)	
図版 5	(1) 5号甕棺墓検出状態(東から)	(2) 5号甕棺墓完掘状態(東から)	
	(3) 7号甕棺墓(東から)	(4) 9号甕棺墓(北から)	
図版 6	(1) 8号・10号甕棺墓(西から)	(2) 8号甕棺墓人骨出土状況	
	(3) 11号甕棺墓(西から)	(4) 11号甕棺墓人骨出土状況	
図版 7	(1) 12号甕棺墓(東から)	(2) 12号甕棺墓人骨出土状況(東から)	
	(3) 13号甕棺墓(東から)	(4) 13号甕棺墓(東から)	
図版 8	(1) 14号甕棺墓(西から)	(2) 15号甕棺墓(北から)	
	(3) 16号甕棺墓(北から)	(4) 17号甕棺墓(北から)	

- 図版9 (1) 15号・18号・19号甕棺墓（東から） (2) 18号甕棺墓（東から）
(3) 19号甕棺墓（西から）
- 図版10 (1) 1号土壙（南から） (2) 3号土壙（東から）
(3) 4号土壙（北から） (4) 5号土壙（北から）
- 図版11 (1) 8号土壙（東から） (2) 9号土壙（東から） (3) 12号土壙（西から）
- 図版12 1号・2号・4号～6号甕棺
- 図版13 7号・8号・10号甕棺
- 図版14 9号・11号・13号甕棺
- 図版15 12号・14号・15号甕棺
- 図版16 16号～19号甕棺
- 図版17 包含層、攪乱出土遺物
- 図版18 攪乱出土遺物
- 図版19 (1) 第9次調査区第1面全景（北から） (2) 調査区東側（北から）
- 図版20 (1) 調査区第2面全景（北から） (2) 1号住居跡（東から）
- 図版21 (1) 2号住居跡（南から） (2) 3号住居跡（西から）
- 図版22 (1) 1号住居跡遺物出土状況（東から） (2) 2号住居跡遺物出土状況（北から）
(3) 1号土壙（北から） (4) 2号土壙（東から）
- 図版23 (1) 3号土壙（南から） (2) 3号土壙鉄釘出土状況（北から）
(3) 4号土壙（南西から） (4) 5号土壙（北東から）
- 図版24 (1) 7号土壙（南東から） (2) 8号土壙（南から）
(3) 9号土壙（東から） (4) 10号土壙（北から）
- 図版25 (1) 11号土壙（北西から） (2) 12号土壙（北から）
(3) 13号土壙（北から） (4) 14号土壙（北から）
- 図版26 (1) 15号土壙（南東から） (2) 17号土壙（東から）
(3) 17号土壙完掘状態（南から） (4) 17号土壙遺物出土状況
- 図版27 (1) 16号土壙（東から） (2) 18号土壙（南西から）
(3) 19号土壙（東から） (4) 21号土壙（東から）
- 図版28 (1) 22号土壙（東から） (2) 23号土壙（東から）
(3) 24号土壙（北から） (4) 25号土壙（東から）
- 図版29 (1) 26号土壙（東から） (2) 28号土壙（西から）
(3) 35号土壙（東から） (4) 35号土壙遺物出土状況
- 図版30 (1) 34号土壙（南東から） (2) 37号土壙（東から）
(3) 37号土壙縦羽口出土状況 (4) 37号土壙完掘状態（東から）

- | | | |
|------|-----------------------|---------------------|
| 図版31 | (1) 38号土壤 (南から) | (2) 38号土壤現出土状況 |
| | (3) 38号土壤十層状態 | (4) 38号土壤完掘状態 (南から) |
| 図版32 | (1) 39号土壤 (北から) | (2) 39号土壤十層皿出土状況 |
| | (3) 40号土壤 (北から) | (4) 44号土壤 (北から) |
| 図版33 | (1) 45号土壤 (北から) | (2) 46号土壤 (東から) |
| | (3) 47号土壤 (北西から) | (4) 47号土壤遺物出土状況 |
| 図版34 | (1) 52号土壤 (製鉄跡) (東から) | (2) P 20土師皿出土状況 |
| | (3) P 87天目碗出土状況 | (4) P 88土師皿出土状況 |
| 図版35 | (1) 1号溝 (北から) | (2) 2号溝、及び3号溝土層状態 |
| | (3) 3号溝土層状態 | (4) 2号溝出土状況 |
| 図版36 | 出土遺物 | |
| 図版37 | 出土遺物 | |
| 図版38 | 出土遺物 | |
| 図版39 | 出土遺物 | |
| 図版40 | 出土遺物 | |

表 目 次

第1表 藤崎遺跡調査地一覧表	9
第2表 第7次調査出土甕棺墓一覧表	18
第3表 第7次調査甕棺觀察表	25・27・31・32・34
第4表 第7次調査出土土錘計測表	37
第5表 第7次調査甕棺編年表	44
第6表 第9次調査土壤一覧表	64
第7表 第9次調査出土土錘計測表	93

I章 はじめに

1. 調査に至る経過

藤崎遺跡は明治45年（1912）、彷彿三角縁二神龍虎鏡と素環頭大刀を副葬した箱式石棺—いわゆる藤崎古墳の発見によって、広く知られるようになったが、本格的に発掘調査が行われるようになつた動機は福岡市高速鉄道（地下鉄）の工事に伴うものである。昭和52～53年（1977～78）の2ヶ月に亘った調査では槨棺墓、土墳墓、箱式石棺基などの弥生時代を中心とした墳墓群が確認された。更に、昭和55年（1980）には三角縁二神二車馬鏡を副葬した方形周溝墓群が発見されるに至っては、まさに、この遺跡が良平野の古墳時代首長層成立の過程を知る上で重要な遺跡であることが再確認された。これらの資料をもとに昭和53年に遺跡範囲を推定しているが、この分布範囲の中央を東西方向に202号線が貫通しているため、地下鉄開業と共に住宅や店舗の高層化、ビル化は著しく、遺跡の損失も年々高まっている。今回報告する発掘調査は第9次調査が個人経営による高層の賃貸住宅、第7次調査が病院建設に伴うものである。しかし、これらの調査は必ずしも綿密な開発チェックによって行われている訳ではなく、大部分が発掘調査を実施しないまま工事が着工される場合が多い。年々変貌しつつある西新・藤崎地区に於ける埋蔵文化財保護の早急な対応が迫られている。小規模な発掘調査に於いて、遺跡復元はパズルの組合せによる煩雑で時間を要するが、都市に於ける遺跡調査の宿命であり、都市型調査の在り方を模索する必要がある。

発掘調査地

第7次調査 福岡市早良区藤崎1丁目1番地 面積 200m²

調査期間 昭和58年7月25日～8月26日

第9次調査 福岡市早良区藤崎1丁目2-29 面積 244m²

調査期間 昭和58年12月26日～昭和59年2月8日

2. 第7次調査の組織

調査委託 西南学院

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

庶務担当 岡崎洋一

調査担当 井沢洋一、松村道博

調査補助 谷沢仁、辻哲也、赤司善彦

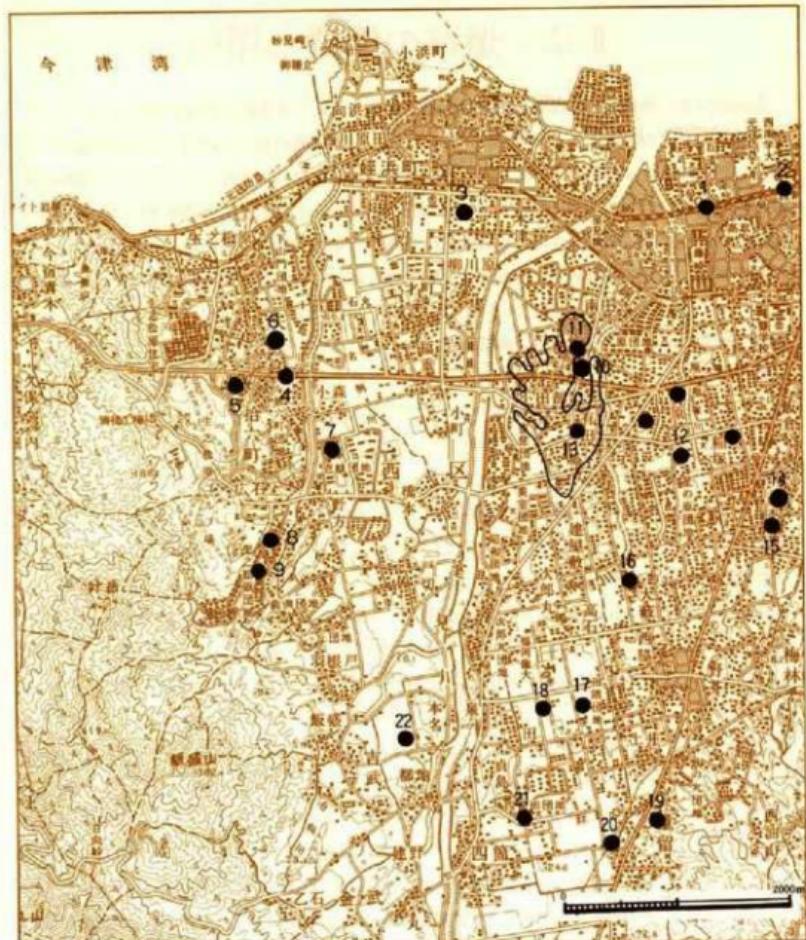
整理補助 池田洋子、深堀博子

調査・整理作業 高浜謙一、明野隆、井田智雄、木野雅雄、立石和人、有村達之、座親秀文、
塩坂剛英、萩原陽一郎、三石和浩、米満寛、柏谷迅、坂口フミ子、砥錦千江子、
松尾玲子、米島チズヨ、有富いつ子、落合弥生、清原ユリ子、柴田勝子、
柴田タツ子、庄野崎ヒデ子、中村千里、日野良子、平井和子、堀川ヒロ子、
緒方マサヨ、金子由利子、後藤ミサヲ、柴田春代

尚、人骨の取り上げについては九州大学医学部解剖学教室の田中良之氏にお願いした。

3. 第9次調査の組織

調査委託	村上雄次 株式会社高松組
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財2係（昭和58年当時）
庶務担当	岡崎洋一
調査担当	井沢洋一、松村道博
調査補助	谷沢仁
整理補助	池田洋子、深堀博子
調査・整理作業	下野敏夫、合屋龍介、大内士郎、海田龍正、明野隆、武田秀司、西原達也、 江口洋子、金子由理子、清原ユリ子、坂口フミ子、坂田まさ子、砥錦千江子、 緒方マサヨ、柴田勝子、中村千里、西尾たつよ、堀川ヒロ子、松尾玲子、吉 田祝子、後藤ミサヲ、庄野崎ヒデ子、平井和子、宮原邦江、内尾トミ子、永 井和子、仲前智江子



1. 鹿崎道路 2. 西新町道路 3. 五島山古墳 4. 周納道路 5. 宮の前道路 6. 紫六町ツイジ道路
 7. 幸多田道路 8. 野方中原道路 9. 野方塚原道路 10. 松浦殿塚古墳 11. 筑紫殿塚古墳
 12. 原道路 13. 有田・小田部道路 14. 飯倉原道路 15. 千櫻古墳 16. 鶴町道路 17. 高柳道路
 18. 田村道路 19. 重留箱式石棺墓 20. 拝塚古墳 21. 四箇道路 22. 橋渡古墳

第1図 早良平野の道路分布図(縮尺1:50,000)

Ⅱ章 遺跡の位置と環境

福岡市早良区藤崎は旧くは鳥飼神社の門前町として栄えた西新町の西端に位置する。この一帯は百道松原、袖の松原の白砂青松に恵まれ、又、この藤崎の地からは遠く糸島の小富士（可也山、標高365m）を望めるところから、富士見崎の地名が付いたともいわれている。藤崎遺跡は藤崎、高取、百道の地域に拡がり、長径約300mを測る弥生時代から古墳時代の大墓地群を形成している。藤崎遺跡の立地する古砂丘は標高5～6mを測り、博多湾の左転海流によって鳥飼、西新、藤崎の間にわたって砂洲状に形成されたものである。砂丘後背地はラグーン状を呈し、特に砂丘の西端では室見の旧河川となるが、かつては入江を形成し、「水口、湯、汐入、浜口」などの地名を残している。藤崎遺跡を中心とした砂丘の背後には龜原山、榮山といった洪積層の独立丘が控え、これらの丘陵から派生した小丘が藤崎遺跡の東南側をさえぎっている。現在の海岸汀線は国道202号線より北へ約470mである。

早良平野における弥生時代～古墳時代初頭の遺跡については第1図に示したが、同一砂丘に立地する西新町遺跡では、弥生時代中期の甕棺墓や弥生時代終末～古墳時代終末の住居跡が検出されている。弥生時代の甕棺墓は藤崎遺跡の分村的関係を有している。弥生時代の拠点的集落としては早良平野中央の独立中位段丘上に立地する有田・小田部遺跡が知られ、この遺跡では弥生時代初頭の環濠が検出され、又、古墳時代後期まで集落が継続する。近年、多紐細文鏡や青銅利器を多量に出土した吉武・高木遺跡・大石遺跡を含めた飯盛遺跡群は弥生時代～古墳時代の大拠点集落でもある。この時代には沖積地内に集落が進出し、弥生時代初頭の鶴町遺跡や原遺跡などが室見川の東側に所在し、集落と水田が営まれる。野方遺跡の北東には湯納遺跡^{註1}、拾六町ツイジ遺跡などの弥生時代～古墳時代の水田跡が存在する。^{註2}

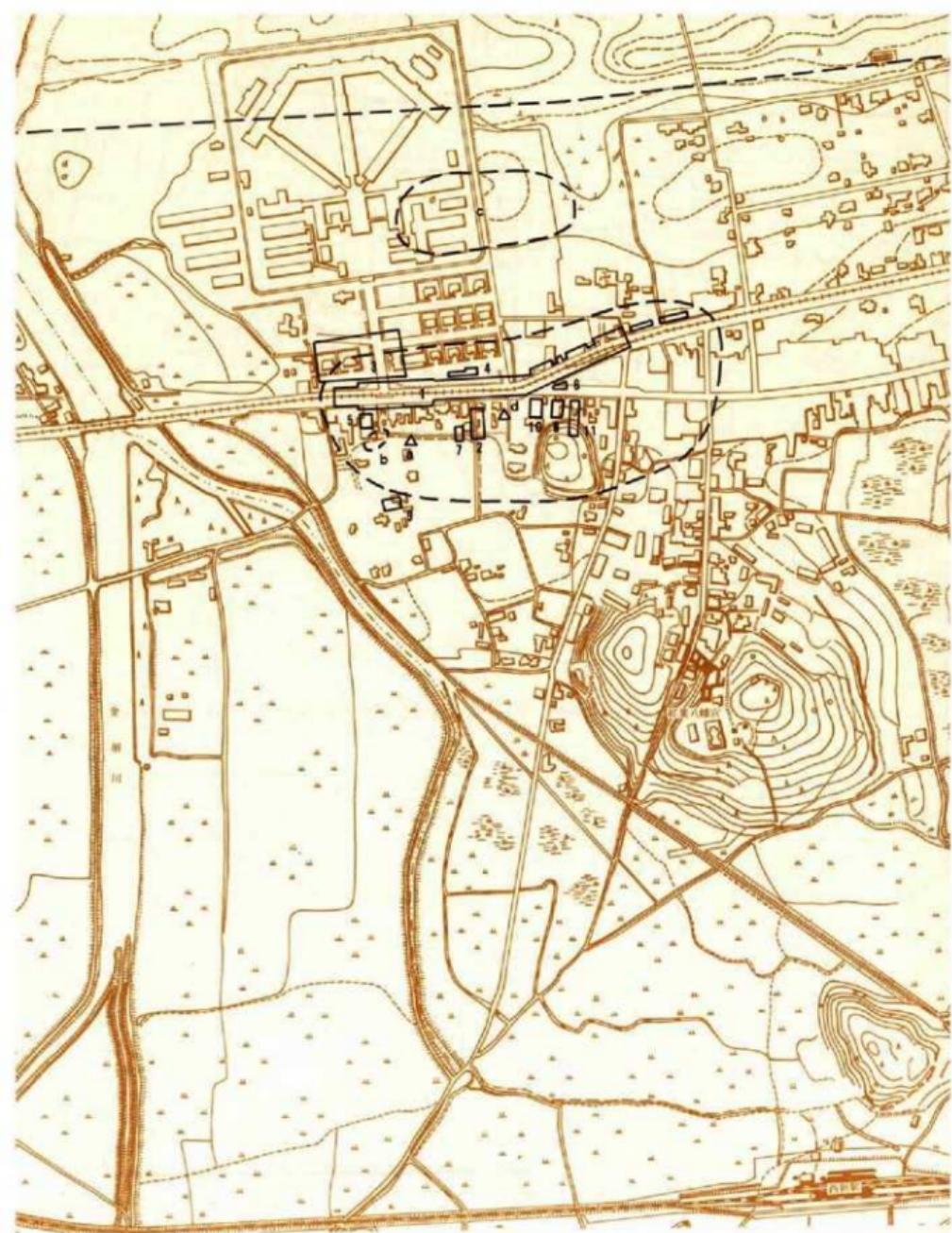
弥生時代～古墳時代初頭の盟主墓、又は首長墓の領域として幾つかの地域に分れることが推測できる。一つは藤崎遺跡の方形周溝墓群を中心とする。室見川の西には姪の浜の砂丘遺跡^{註3}が存在し、その背後には五島山古墳がある。箱式石棺から船載の二神二獣鏡2面、銅鏡9本、鉄劍、玉類が出土している。有田・小田部を中心としては松浦殿塚や筑紫殿塚がある。拾六町から野方周辺では、野方塚原の石棺墓群や宮の前遺跡の墳丘墓がある。早良平野の東側丘陵地帯では銅劍を出土した飯倉原に近接して干限古墳や、烏文鏡と管玉を出土した重留の箱式石棺墓、及び拌塚古墳がある。又、早良平野の奥では早良工基の系譜をもつ樋渡の前方後円墳や飯盛谷遺跡の方形周溝墓群がある。東に目を転すれば、樋井川流域には前方後方墳の京の限古墳が存在し、早良平野における盟主層の成長と首長層成立への過程を推測せしめしている。

註1 福岡市教育委員会「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 1976

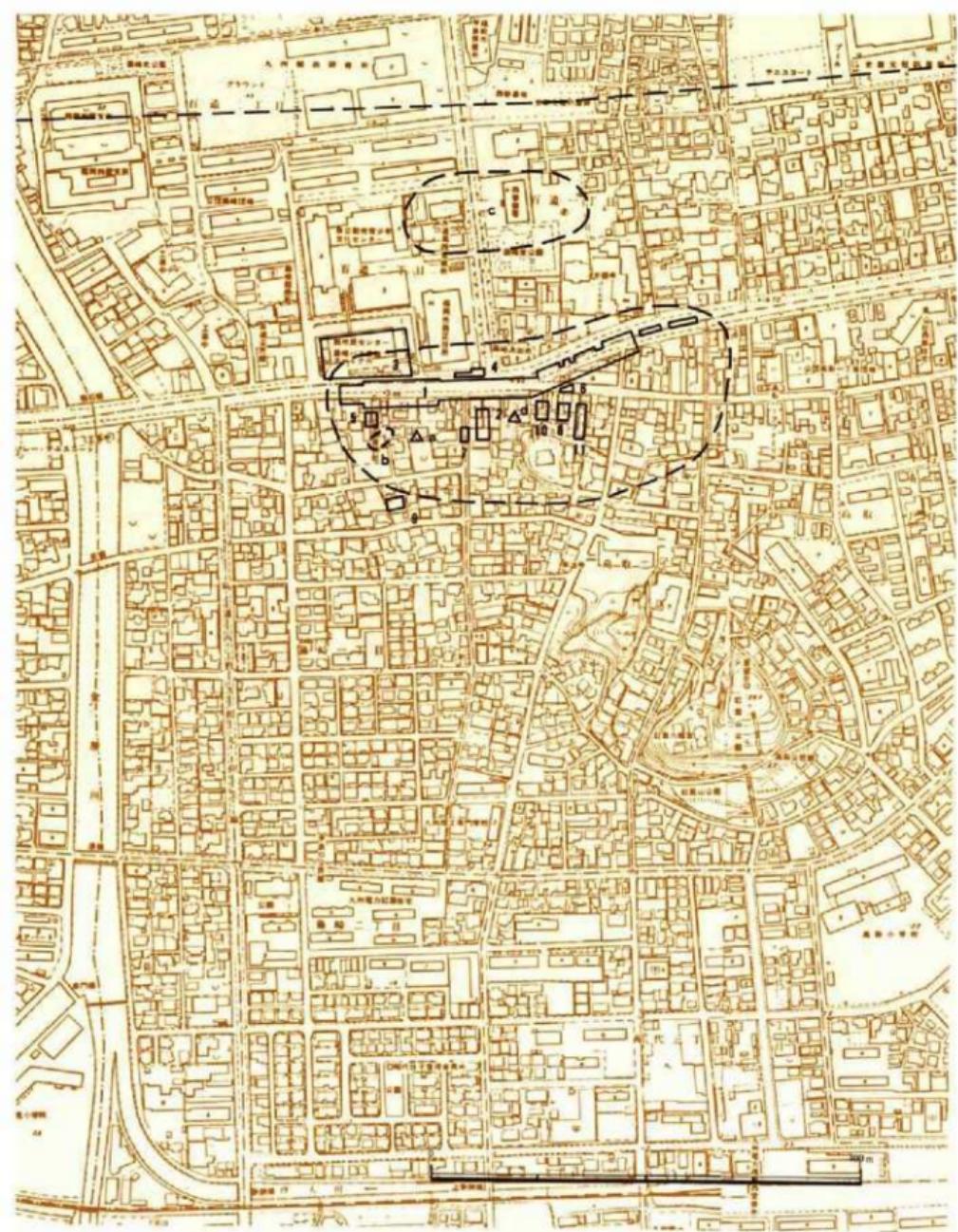
註2 福岡県教育委員会「今宿ハイバス関係埋蔵文化財調査報告書第4集」 1976

註3 福岡市教育委員会「拾六町ツイジ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1983

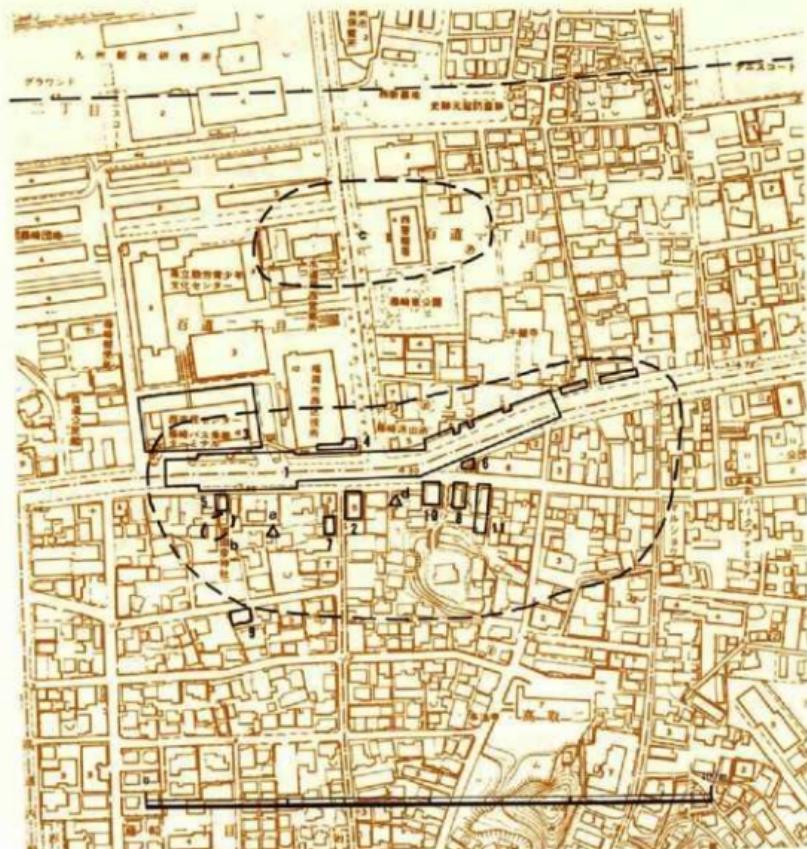
註4 福岡県早良郡役所「早良郷志 全」 1973



第2図 藤崎遺跡周辺地形図(昭和初期頃)(縮尺1/500)



第3図 藤崎遺跡周辺地形図 (縮尺 $1/600$)



a. 第1地点（明治45年 箱式石棺出土地）
 b. 第2地点（大正6年 昭和5年 箱式石棺・甕棺墓出土地）
 c. 第3地点（昭和33年 甕棺墓出土地・旧刑務所内跡）
 d. 第4地点（昭和50年代発見地）

1. 第1調査	7. 第7次調査
2. 第2次調査	8. 第8次調査
3. 第3次調査	9. 第9次調査
4. 第4次調査	10. 第10次調査
5. 第5次調査	11. 第11次調査
6. 第6次調査	

第4図 高崎遺跡調査地区配置図(縮尺1/2000)

Ⅲ章 調査の記録

各調査地点の概要

藤崎遺跡の発掘調査地点及び、明治時代以来の発見地については1982年の「藤崎遺跡」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集）『Ⅲ. 調査の記録』の中で詳細に整理されている通りである。その後、再開発による発掘調査の件数も増加しており、発見地及び発掘調査次数について整理することができたため、以下にまとめた。福岡市教育委員会並びにこれに同等又は準ずる組織の発掘調査には原則として次数を与え、発見地又は採集地については地点名を付与し、発掘調査地点と発見地点を区別することを断っておきたい。よって調査次数はもちろんのこと、発見地（採集地）の地点数も今後増加していくものである。

（発見地点）

第1地点 1912年（明治45年）発見、島田寅次郎報告

箱式石棺から三角縁二神龍虎鏡（径24.5cm）、素環頭大刀が出土。藤崎古墳と称された。^{註1}

第2地点 1917年（大正6年）発見、中山平次郎報告 箱式石棺より方格渦文鏡が出土

1930年（昭和5年）発見、永倉松男・鏡山猛報告 村上研究所内検出。^{註2}

弥生時代前期の甕棺墓、副葬小童、及び箱式石棺が出土。石棺は藤崎石棺群と称された。^{註3}

第3地点 昭和30年代発見、宮井善朗報告 藤崎刑務所内遺跡

工事中に弥生時代中期の甕棺群が出土。弥生終末の西新町式の標式とされる土器も出土。^{註4 註5 註6}

第4地点 昭和50年代発見

井戸掘り工事の際に、甕棺片と共に彩文土器が出土。※「藤崎遺跡IV」P48に掲載。

（発掘調査地点）

第1次調査 1977～78年（昭和52～53年）福岡市教育委員会が発掘調査。

福岡市高速鉄道（地下鉄）の工事に伴うもので、国道202号線の路線内の調査である。

遺構は弥生時代甕棺墓91基、石棺墓4基、土壙墓23基、特殊墓1基、弥生時代終末～古墳時代前期の住居跡12軒、溝状遺構、柱穴、近世竖穴である。甕棺墓は弥生時代前期から終末まで及んでいる。

第2次調査 1977年（昭和52年）福岡市教育委員会が発掘調査。

テナントビル建設に伴うものである。国道202号線沿線に沿っており、第1次調査の南側に位置する。すなわち、砂丘南斜面に相当する。

遺構は弥生時代の甕棺墓60基、石棺墓2基、土壙墓9基、方形周溝状遺構1条を検出した。

甕棺墓は弥生前期から後期に及ぶが、小児棺が大部分を占めている。前期の甕棺墓より管玉が出土している。

第3次調査 1980年（昭和55年）福岡市教育委員会が発掘調査

地下鉄と連絡するバスター・ミナル・西市民センター建設に伴う調査である。第1次調査の北西側に接している。

遺構は古墳時代前期の方形周溝墓9基、古墳時代～奈良時代の住居跡7軒、古墳時代～中世の土塙34基を検出した。方形周溝墓の周溝からは供獻土器が出土。7号方形周溝墓の溝からは珠文鏡、6号方形周溝墓の主体部からは三角縁二神二車馬鏡、刀子、鉈、素環頭大刀が出土。

第4次調査 1980年（昭和55年）福岡市教育委員会が発掘調査

地下鉄藤崎駅出入口建設に伴う調査である。早良（旧西）区役所のすぐ南に位置し、調査時点は藤崎出入口Aと呼称する。

遺構は古墳時代前期方形周溝墓1基、弥生時代甕棺墓2基を検出した。方形周溝墓は第1次調査に歸り、主体部から小型仿製鏡が出土した。

第5次調査 1980年（昭和55年）福岡市教育委員会が発掘調査

地下鉄藤崎駅出入口建設に伴う調査で、調査時には藤崎出入口Bと呼称した。第2地点の村上研究所内発見地の北側に位置している。

遺構は甕棺墓2基、石蓋土塙墓1基である。甕棺墓は弥生時代前期初頭から後半の時期である。

第1表 藤崎造跡調査地一覧表

地點名 調査次数	旧地名	所 在 地	面積	調査期間	事 業 名	時 代	遺 墓	備 考
第1地点 第1地点	福岡市早良区 藤崎1丁目14			昭和45年 3月10日	川庄着五郎氏宅	古墳時代	箱式石棺	三角縁二神二車馬鏡 瓦環頭大刀
第2地点 第2地点	福岡市早良区 藤崎1丁目38			延喜6年 昭和5年	村上研究所	弥生時代～ 古墳時代	箱式石棺・甕棺墓	方格溝文鏡
第3地点 第3地点	福岡市早良区 高取2丁目3			昭和40年代	旧飛鹿所	弥生時代	甕棺墓	
第4地点 ——	福岡市早良区 高取2丁目17			昭和50年	井戸開削	弥生時代	甕棺墓…1基	彩文土器(盛)
第1次 第4地点	福岡市早良区 高取(山崎後所前)	4.952m ²		昭和50年 4～ 6月	高速鉄道 (地下鉄)	弥生時代～ 中世	甕棺墓…1基 石棺墓…1基・土塙墓…2基	特徴墓…1基 住居跡…12軒
第2次 第5地点	福岡市早良区 高取2丁目17	439m ²		昭和50年 3月8日～3月11日	テナントビル	弥生時代～ 中世	方格溝文鏡…1基 甕棺墓…1基	
第3次 第6地点	福岡市早良区 高取2丁目2-807	2.700m ²		昭和50年 7月18日～7月31日	バスター・ミナル	古墳時代初期 弥生～中世	方形周溝墓…1基 上古～34基・住居跡…7軒	二角縁二神二車馬鏡 珠文鏡
第4次 第7地点	福岡市早良区 高取2丁目	約143m ²		昭和55年 5月28日	地下鉄出入口A	古墳時代初期	方形容器…1基 甕棺墓…2基	变形文鏡
第5次 第8地点	福岡市早良区 高取1丁目1	約101m ²		昭和55年 3月29日	地下鉄出入口B	弥生時代初期	甕棺墓…2基 石塚土塙墓…1基	
第6次 ——	福岡市早良区 高取2丁目18	約150m ²		昭和57年 12月	地下鉄出入口C	弥生時代	甕棺墓	
第7次 ——	福岡市早良区 藤崎1丁目1	200m ²		昭和58年 7月25日～8月26日	甕棺墓増築	弥生時代	甕棺墓…29基 土塙…13基	
第8次 ——	福岡市早良区 高取2丁目144-145	532m ²		昭和59年 1月28日～11月15日	テナントビル	弥生時代～ 中世	甕…3基・井戸…1基 甕棺墓…2基	
第9次 ——	福岡市早良区 藤崎1丁目29	244m ²		昭和60年 2月8日	賃貸住宅	弥生時代～ 中世	方形容器…1基・甕…4基 土塙…52基・住居跡…3軒	
第10次 ——	福岡市早良区 高取2丁目146他	1,963m ²		昭和60年 1月28日～2月14日	分譲住宅	弥生時代～ 中世	方形容器…1基・甕…1基 甕棺墓…5基・井戸…1基	
第11次 ——	福岡市早良区 高取2丁目46	443m ²		昭和60年 1月29日～2月11日	テナントビル	弥生時代～ 中世	甕棺墓 甕…3基	

第6次調査 1982年（昭和57年）福岡市教育委員会が発掘調査

地下鉄藤崎駅出入口建設に伴う調査で、調査時には藤崎出入口Cと呼称した。国道202号線と旧道入口に挟まれた三角地である。北側には第1次調査地と接している。

遺構は甕棺5基、顕型丹塗り土器。

第7次調査 1983年（昭和58年）福岡市狂育委員会が発掘調査

整骨医院の増築工事に伴う調査である。国道202号線の南側に接しており、東側には第2次調査地点が位置する。

遺構は弥生時代中期～後期の甕棺墓19基、土壙12基、方形周溝遺構を検出した。方形周溝遺構は第2次調査で検出した方形周溝遺構が跨っているもので、今回は周溝の一部であった。

第8次調査 1983年（昭和58年）福岡市教育委員会が発掘調査

テナントビル建設に伴う調査である。旧道入口付近に位置し、第6次調査地点が旧道を挟んで北側に在る。後背地には小丘が存在しており、甕棺墓の南限ラインを示すものと考える。

遺構は弥生時代の甕棺2基、溝1条、中世の溝1条、時期不詳の井戸1基がある。

第9次調査 1984年（昭和59年）福岡市教育委員会が発掘調査

共同住宅建設に伴う調査である。第2免見地点である村上研究所の南側に位置する。

遺構は弥生時代の方形周溝遺構1条、古墳時代住居跡3軒、中世の溝4条、土壙52基を検出した。中世の土壙3基から、鉄滓、櫛羽口などが出土し、銀治跡と考えられる。又、土壙墓が1基ある。

第10次調査 1986年（昭和60年）福岡市教育委員会が発掘調査

共同住宅建設に伴う調査である。藤崎旧道出入口に位置する。東側には第8次調査地点が接している。

遺構は弥生時代の甕棺墓6基、溝1条、弥生時代～古墳時代の土壙6基、古墳時代の方形周溝状遺構1条、中世の溝1条、時期不詳井戸1基を検出した。

第11次調査 1986年（昭和60年）福岡市教育委員会が発掘調査

テナントビル建設に伴う調査である。第8次調査地点の東側に接している。

遺構は弥生時代の甕棺墓4基、溝1条、古墳時代の溝1条、中世の溝1条を検出した。溝の内、弥生時代と古墳時代の溝は第8・10次調査で検出した溝に接続するものである。

註1 猪田寅次郎「藤崎の右館」「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書」第1輯 1925

註2 中山平次郎「古支那鐵鑄冶革」考古学雑誌第9巻第3号 1918

註3 水谷松男、鏡山猛「筑前国藤崎に於ける弥生式遺跡」考古学雑誌第2巻第1号 1931

註4 齋貞次郎教授の御教授による。「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書」「藤崎遺跡」 1982年所収

註5 浜石哲也編「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書」「藤崎遺跡」福岡市教育委員会 1981

註6 鏡山猛「甕棺墓考」史商 第55輯 1953

註7 浜石哲也編「藤崎遺跡」福岡市教育委員会 1982

IV章 第7次調査

1. 調査経過の概要

今回の調査は藤崎遺跡の南西端にあたり、標高3.5~4mを測る。地山層は黄白色粗砂層で、東北部から南西部へゆるやかな傾斜を示し、道路面から1~1.5m低くなる。

遺構は甕棺墓20基、土壙12基、溝1条である。擾乱により大部分が破壊されて、本来の姿を認められない甕棺墓もあり、必ずしも保存状態は良好ではない。甕棺墓は弥生時代中期から後期のもので、大型の成人棺11基、小型の小児棺が9基である。副葬品は認められなかったが、11・12号甕棺墓から頭蓋骨が良好な状態で出土した。4号・16号甕棺墓は成人用の单棺である。13号甕棺墓（小児）は小型の円錐壺に、鉢の蓋をし、さらに口縁部に別個体の甕の口縁部を当て補填している。他の甕棺は甕+鉢、あるいは甕+甕で特記すべき事柄はない。

土壙は不整形で小型のものが多いが、11・12号土壙は長方形のプランをもち壁面も垂直に近い。出土遺物は弥生式土器の小片が数個出土しているだけであるが、おそらく弥生時代の土壙墓と推定される。また調査区の東北隅には溝の一部と思われる部分が検出されたが、その大部分は調査区外へ抜がっており、第2次調査検出の方形周溝遺構の一部である。

以上、述べたように今回の調査は弥生時代中期の甕棺墓域の一画であることが明確になった。この甕棺群は地形の傾斜度合や甕棺の分布状況等から西へさらに拡がり、墓域南端は調査区内で終結するものと考えられる。

2. 遺構各説

(1) 甕棺墓

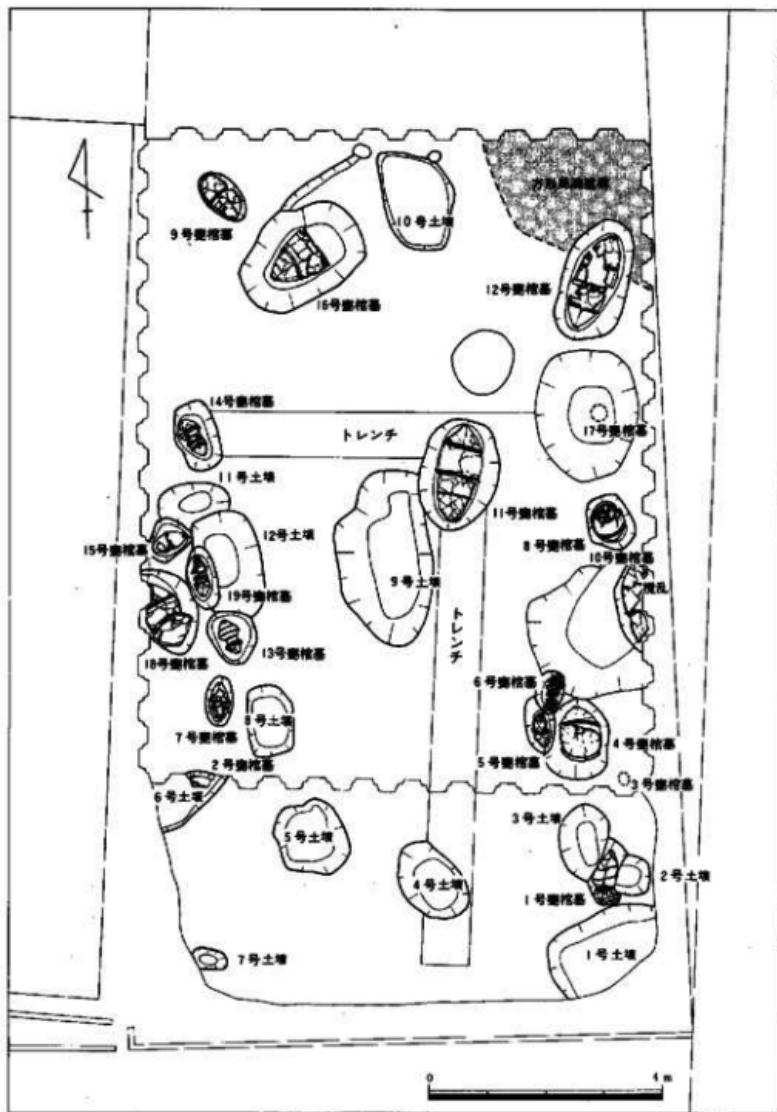
甕棺墓は総計19基を検出した。工事範囲の制約があり、又、矢板によって破壊を受けた甕棺墓を含めると25基前後は存在したものと思われる。東側の第2次調査では約60基検出している。総じて小児棺が多く、成人棺との比率は約2対3の割合である。

1号甕棺墓（第6図、図版4）

調査区の南東部で検出した成人用の甕棺墓である。甕棺墓は北側を3号土壙に、東側を2号土壙から切られている。上面は大きく削平されている為、残存状態は悪く、壙底に接した部分を残すのみである。上、下棺共に變形土器を用いている。接口式の甕棺墓で、埋置角度は25°、主軸方位はS-17°-Eである。

2号甕棺墓（第6図）

調査区の南西部で検出した。矢板と削平の為、破損は著しい。矢板北側で變形土器が、南側で圓形土器一個体分がくだけられた状態で確認された。小児用甕棺墓で、6号土壙墓を切っている。主軸方位、及び埋置角度は不明である。



第5図 第7次調査構造配置図（縮尺%）

3号壺棺墓（第6図、図版4）

3号土壙の北側で検出した。削平を受け破損していた。小児用の棺に用いたと思われる變形土器の胴部破片を検出した。

4号壺棺墓（第6図、図版4）

3号壺棺墓の西側で検出した。成人用の壺棺墓である。墓壙は上面が削平されているが、現状では不整橢円形を呈し、長軸1.4m、短軸1.0mを測る。棺の主軸方位はS-38°-Eを示し、埋置角度は33°である。単棺で、變形土器を用いている。

5号壺棺墓（第6図、図版4、5）

4号壺棺墓の西側を切って埋置された小児用の壺棺墓である。墓壙は上面を削平されているが、長軸1m、短軸0.6mの橢円形を呈する。覆口式で、上・下共に變形土器を用いている。主軸方位はS-15°-Eを示し、埋置角度は31°である。

6号壺棺墓（第6図、図版4）

5号壺棺墓の北側を切って埋置された小児用の壺棺墓である。4号・5号壺棺墓と接しており4号壺棺墓が新しい。上面を削平され、壺棺は壙底に接した部分のみが残っていた。墓壙は不整長橢円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.5mを測る。壺棺の主軸方位はS-22°-Eを示し、埋置角度は15°である。接口式の壺棺で、上・下共に變形土器を用いる。

7号壺棺墓（第6図、図版5）

2号壺棺墓の北側に位置する小児用の壺棺墓である。墓壙は不整長橢円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.5mを測る。壺棺の主軸方位はN-24°-Eを示し、埋置角度はほぼ水平である。接口式の壺棺で、上・下共に變形土器を用いる。

8号壺棺墓（第7図、図版6）

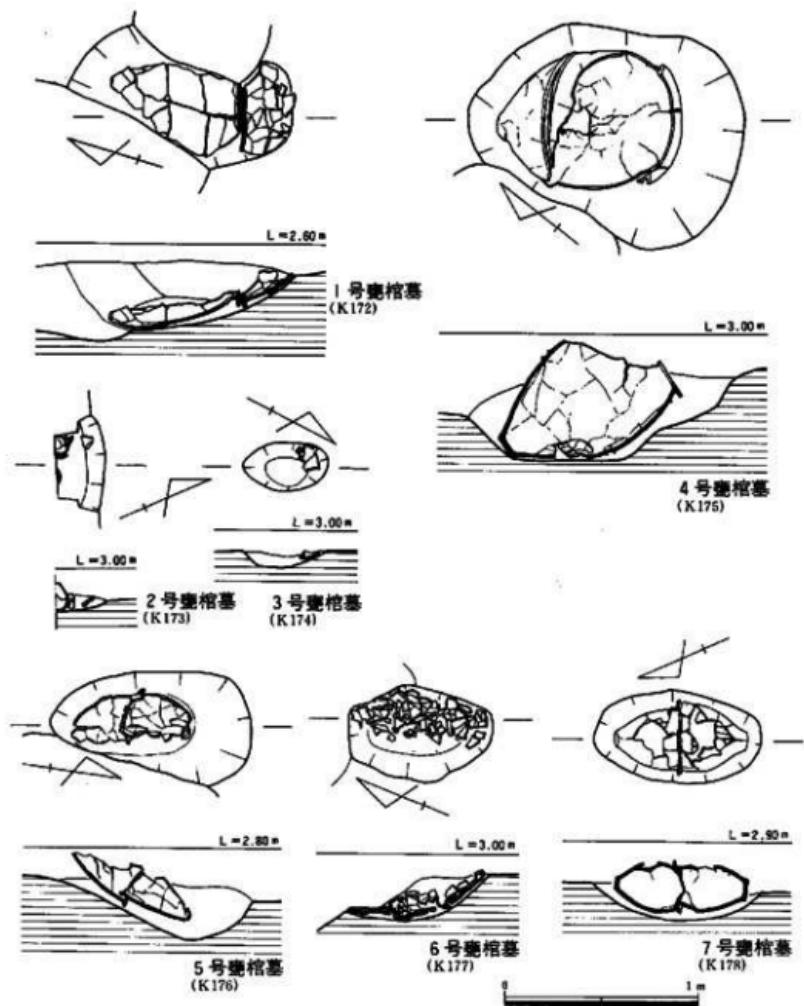
調査区の東側中央で検出した成人用の壺棺墓である。深く掘りくぼめられた墓壙の平面形は不整隅丸長形に近く、長軸1m、短軸0.8mを測る。覆口式の壺棺で、上壺に鉢形土器、下壺には中型の變形土器を用いる。主軸方位はN-21°-Eを示し、埋置角度は45°である。下壺内には大脛骨が遺存していた。

9号壺棺墓（第7図、図版5）

調査区の北西隅で検出した小児用の壺棺墓である。墓壙は上面が削平され、壺棺も上半部を欠失している。墓壙の平面形は橢円形を呈し、長軸1.0m、短軸0.6mを測る。棺は上・下共に變形土器を用いている。主軸方位はN-44°-Wを示し、ほぼ水平に埋置されている。

10号壺棺墓（第7図、図版6）

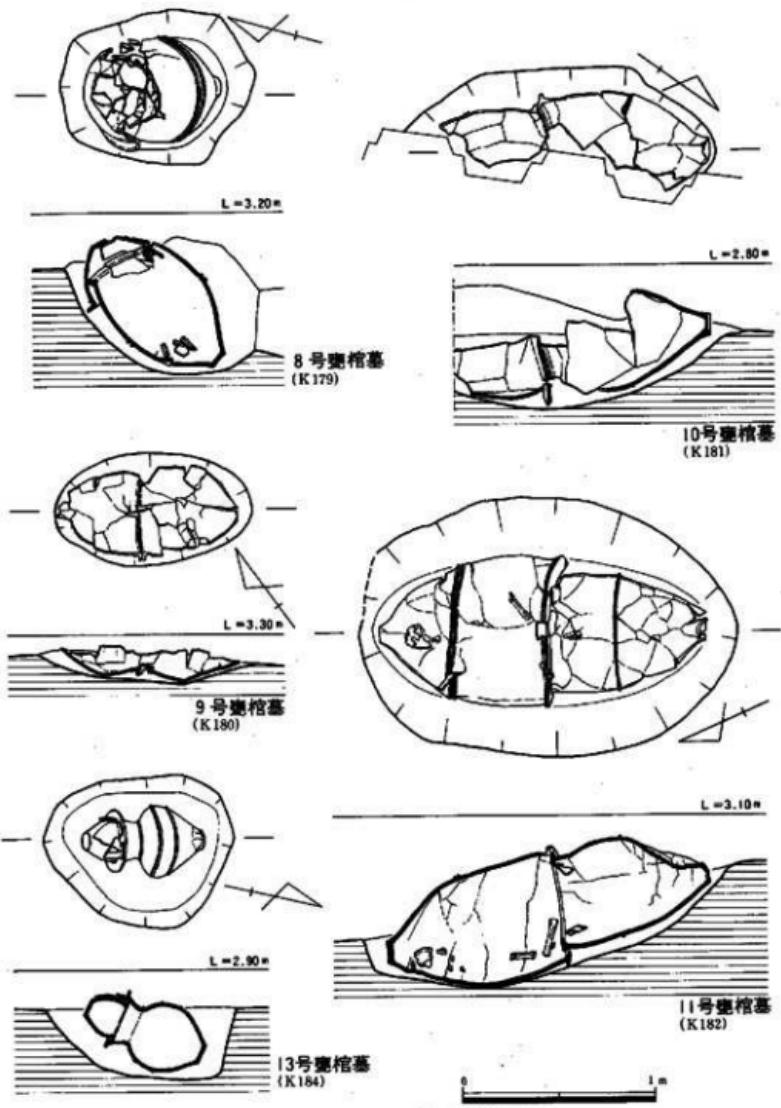
4号壺棺墓の北側にあって、西側の矢板沿いに検出した成人用の壺棺墓である。上面を擾乱に、東側を矢板に切られている。墓壙は不整橢円形を呈している。接口式で、上・下共に變形土器を用いている。主軸方位はN-45°-Wを示し、埋置角度は8°である。



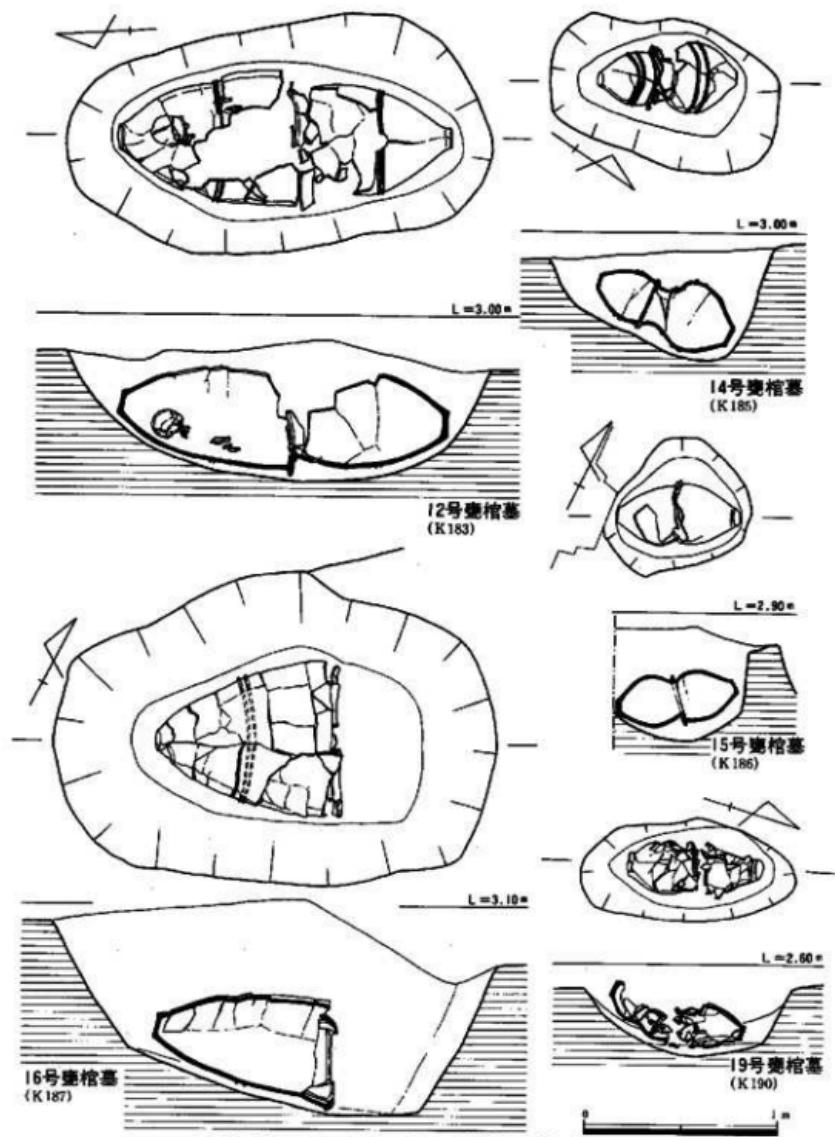
第6図 1号～7号墓棺基 (縮尺1/2)

11号墓棺基 (第7図、図版6)

調査区の中央部で検出した成人用の墓棺基である。墓壙の平面形は不整橢円形を呈し、長軸2.2m、短軸1.2mを測る。呑口式の墓棺で、上・下共に變形土器を用いている。主軸方位はN



第7図 8号-11号・13号壳棺墓 (縮尺3%)



第8図 12号・14号・15号・16号・19号墓棺基 (縮尺3分)

-24°-Wを示し、埋置角度は15°である。

12号壺棺墓（第8図、図版7）

調査区の中央部で検出した成人用の壺棺墓である。墓壙の平面形は不整長椭円形を呈し、長軸2.2m、短軸1.2mを測る。接口式の壺棺で、上・下共に變形土器を用いる。主軸方位はN-3°-Wを示し、埋置角度はほぼ水平で、5°である。下壺底部には頭蓋骨が検出された。

13号壺棺墓（第7図、図版7）

7号壺棺墓の北側で検出した小児用の壺棺墓である。墓壙は不整円形を呈し、上面を削平されている。現状面では長軸1.0m、短軸0.8mを測る。呑口式の壺棺で、主軸方位はS-13°-Eを示し、埋置角度は24°である。上壺に丹塗の變形土器、下壺には壺形土器を用いる。接合部の隙間を埋めるために、別個体の變形土器の胴上部破片をかぶせている。

14号壺棺墓（第8図、図版8）

調査区の中央西側で検出した小児用の壺棺墓である。墓壙の平面形は不整隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、短軸0.75mを測る。棺は接口式で、主軸方位はN-36°-Wを示し、埋置角度は24°である。上壺に變形土器、下壺には壺形土器を用いる。壺形土器の胴部下位には穿孔がある。

15号壺棺墓（第8図、図版8）

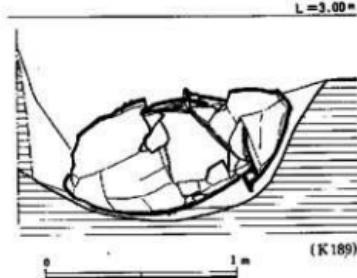
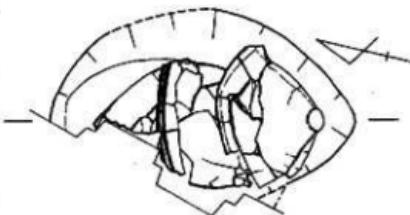
調査区の中央西側、14号壺棺墓の南側で検出した小児用の壺棺墓である。墓壙の平面形は不整円形を呈し、長軸は0.74m、短軸は0.6mを測る。壺棺は主軸方位N 63° 30' Eを示し、埋置角度は12°である。接口式で、上・下共に變形土器を用いている。

16号壺棺墓（第8図、図版8）

9号壺棺墓の南東側で検出した成人用の壺棺墓である。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.3m、短軸1.6m、深さ0.8mを測る。主軸方位はN-62°-Eを示し、埋置角度はほぼ水平である。単棺で、變形土器を用いる。底部付近に頭蓋骨片が遺存していた。

17号壺棺墓（図版8）

8号壺棺墓の北側で検出した小児用の壺棺墓である。擾乱により破壊されている為、詳細は不明である。變形土器一個体分が確認された。



第9図 18号壺棺墓（縮尺3%）

18号壺棺墓（第9図、図版9）

調査区の西側、第15号壺棺墓の南側で矢板に接して検出した。成人用の壺棺墓である。西側を矢板により切られている。墓壙の長軸は1.57m、短軸は1.07mを測る。覆口式の壺棺で、主軸方位はN-20°-Wを示し、埋置角度は20°である。上蓋に鉢型土器、下蓋には壺形土器を用いる。下蓋には人骨片が残っていた。

19号壺棺墓（第8図、図版9）

18号壺棺墓の東端部を切っている。小児用の壺棺墓である。墓壙は上面を削平されているが、現状では長橢円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.5mを、深さを0.35m測る。接口式で、上・下共に壺形土器を用いる。主軸方位はN-17°-Eを示し、埋置角度は11°である。

第2表 第7次調査出土壺棺墓一覧表

No.	方 位	傾斜角度	合口形態	組合せ	時 期	棺の大小	備 考
K 1 (172)	S - 17° - E	25°	接 口	壺+壺	中期後葉	成 人	上蓋は上半部共土残存 下蓋は土残存
K 2 (173)	——	——	——	壺+壺	中期後葉	小 児	一部残存
K 3 (174)	——	——	——	——	——	小 児	一部残存
K 4 (175)	S - 38° - E	33°	單 棺	壺	中期後葉	成 人	頭部上半欠損
K 5 (176)	S - 8°30' - E	31°	覆 口	壺+壺	中期後葉	小 児	上下蓋共土残存
K 6 (177)	S - 22° - E	15°	——	壺+壺	中期後葉	小 児	上下共大破
K 7 (178)	N - 24° - E	5°	接 口	壺+壺	中期後葉	小 児	上・下蓋は一部欠損
K 8 (179)	N - 15° - W	45°	覆 口	鉢+壺	中期後葉	成(中型)人	上蓋は土欠損 下蓋はほぼ完形
K 9 (180)	N - 54°30' - W	——	接 口	壺+壺	中期後葉	成(中型)人	上蓋は上半部土残存 下蓋は底部以上土残存
K 10 (181)	N - 45° - W	8°	接 口	壺+壺	中期後葉	成 人	上蓋は上半部土欠損 下蓋は上半部土無
K 11 (182)	S - 24° - E	15°	存 口	壺+壺	中期後葉	成 人	人骨
K 12 (183)	N - 3° - W	5°	接 口	壺+壺	中期後葉	成 人	上・下蓋とともに 「人骨」(土下部) 入骨
K 13 (184)	S - 13° - E	24°	存 口	鉢+壺	中期後葉	小 児	丹塗
K 14 (185)	S - 34°30' - E	24°	接 口	壺+壺	中期後葉	小 児	頭部に穿穴
K 15 (186)	N - 63°30' - E	12°	接 口	壺+壺	中期後葉	小 児	上・下蓋共に一部欠損
K 16 (187)	S - 63° - W	5.5°	單 棺	壺	中期後葉	成 人	ほぼ完形
K 17 (188)	——	——	——	——	——	成 人	壊乱により破壊
K 18 (189)	S - 13° - E	20°	覆 口	鉢+壺	中期後葉	成 人	上蓋は約土欠損 下蓋は一部欠損
K 19 (190)	S - 14°30' - E	11°	接 口	壺+壺	中期後葉	小 児	上・下蓋共土残存

(2) 土 壤

合計12基の土壤を検出した。形状は大部分が長方形を呈しているが、砂地のため崩壊が著しく、実測図作製時点では少とも変形している。この内、3号・8号・12号土壤は土壤墓と想われるが、副葬品等が無く、決め手を欠く。

1号土壙（第10図、図版10）

調査区の南東隅で検出した。主軸方位はN-74°30'-Eを示す。土壙の規模、形状は南側、及び西側が調査区外であるため明らかでないが、長さ2m以上、幅1.3m以上、深さ0.6mを測る。遺物の出土は無い。覆土は灰褐色砂である。

2号土壙（第10図）

1号土壙の北側で検出した。主軸方位はN-80°-Eを示す。第1号甕棺墓に西半部を切られているため土壙の形状、規模は明らかでないが、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。中期後半以前の時期である。現存の長さと幅は各々0.6m、深さ0.2mを測る。遺物の出土はない。覆土は灰褐色砂である。

3号土壙（第10図、図版10）

1号甕棺墓の西側にて検出し、甕棺墓の西北部を切っている。主軸方位はN-79°-Eを示す。土壙は上面を削平されているが、現状面では長さ2.0m、幅1.0m、深さ0.6mの橢円形を呈する。覆土は灰褐色砂である。遺物は土師器、須恵器が検出されているが、いずれも細片であるため、時期を確定する事ができない。

4号土壙（第10図、図版10）

3号土壙の西側、調査区の南側中央部で検出した。主軸方位はN-20°-Wを示す。土壙の東半部は試掘トレンチによりその上半部を削平されている。現状面では長軸1.4m、短軸1.0m、深さ0.5mを測り、平面形は不整橢円形を呈する。覆土は暗灰色砂である。遺物は土錘2点、土師器細片を検出した。

5号土壙（第11図、図版10）

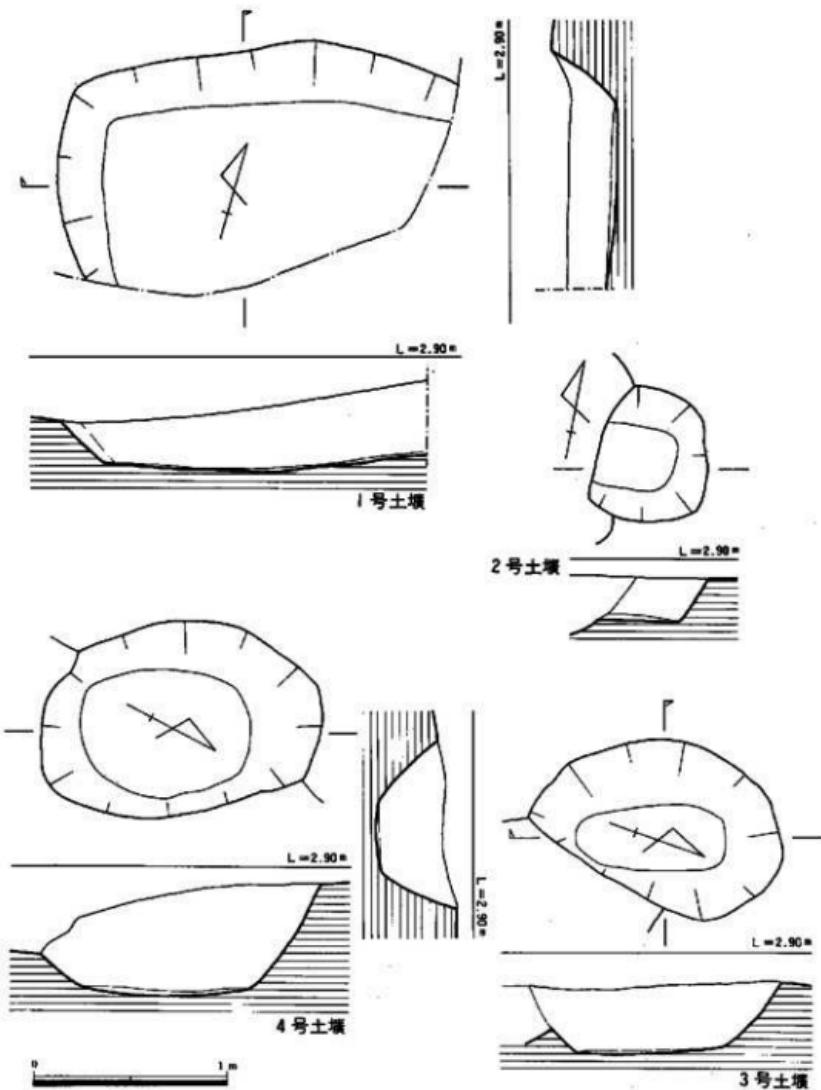
4号土壙の西北部で検出した。主軸方位はN-27°-Wを示す。土壙の南側は後世の擾乱を受け、その上半部を削平されている。現存長は長軸1.4m、短軸1.3mを測り、平面形は不整形を呈する。出土遺物は須恵器片、土師器片が出土しているが、いずれも細片のため時期を確定する事はできない。覆土は暗灰色砂である。

6号土壙（第11図）

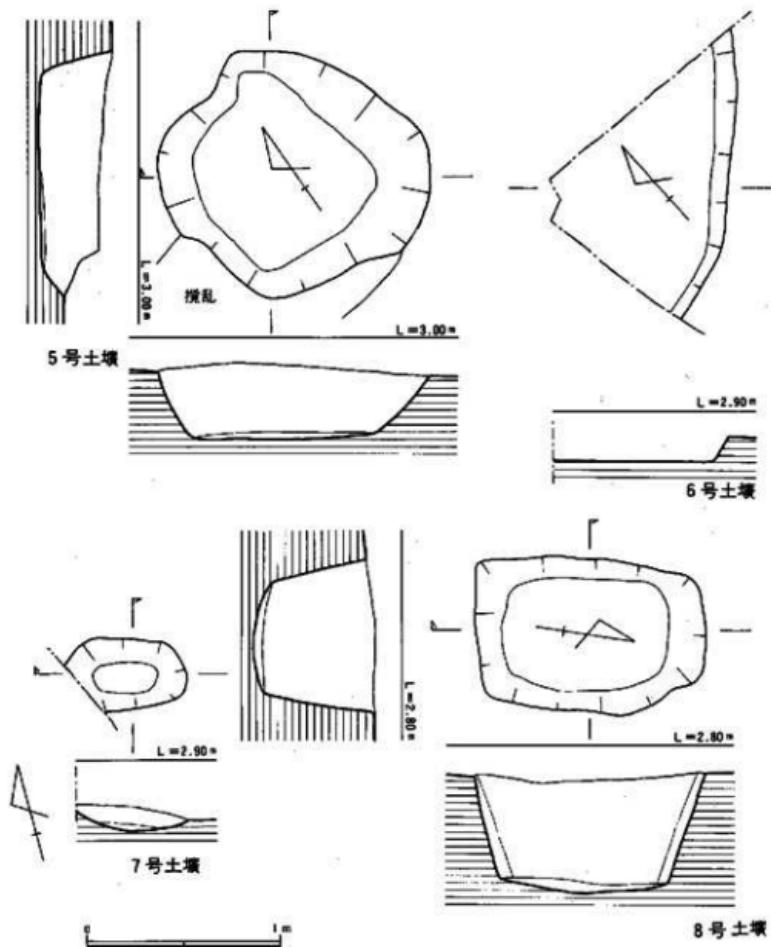
5号土壙の西側で検出した。2号甕棺墓に切られる。又、北側、及び西側は矢板によって切られている。規模、及び形状は明らかでない。深さは0.2mを測る。中期後半～末の時期が考えられる。覆土は黒褐色砂で、弥生式土器の細片が出土している。

7号土壙（第11図）

調査区の西南隅で検出した。主軸方位はS-15°-Eを示す。土壙の西側が調査区外であるため長さは不明であるが、現存長0.6m、幅0.4m、深さ15cmを測る。平面形は橢円形を呈している。遺物の出土はない。



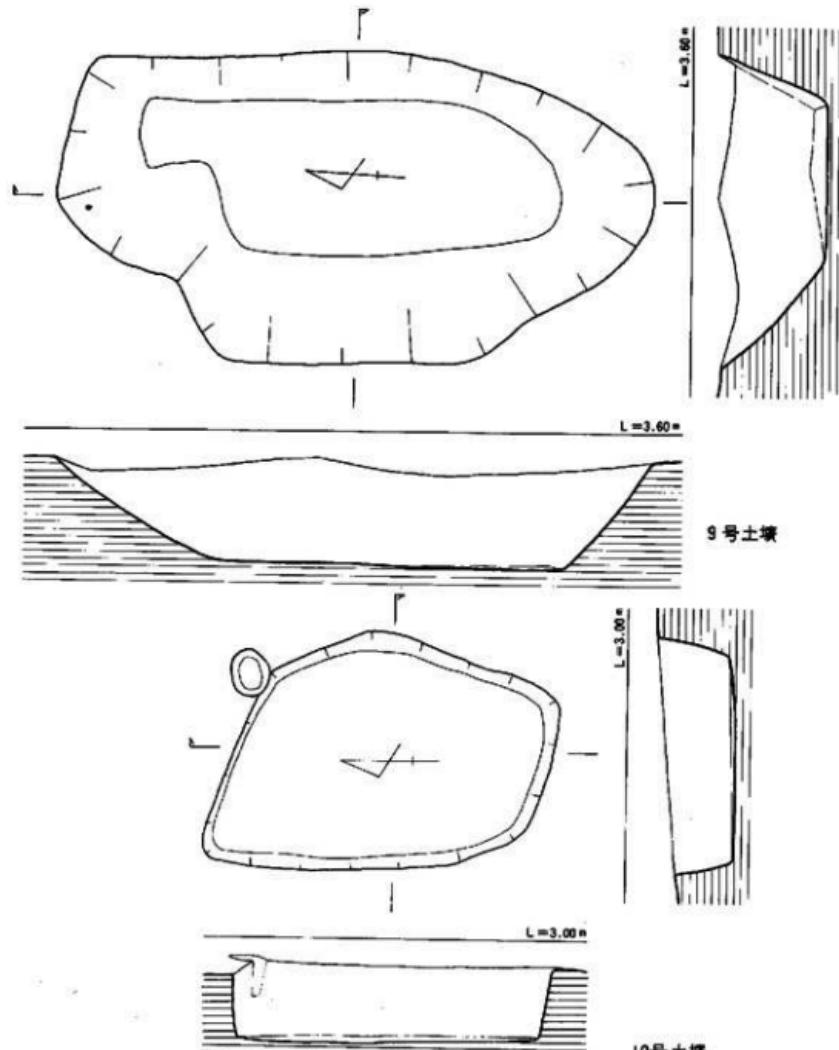
第10図 1号～4号土壌 (縮尺1/6)



第11図 5号～8号土壙 (縮尺1/50)

8号土壙 (第11図、図版11)

7号壺棺墓の東側で検出した。上壙の主軸方位はほぼ南北方向を示し、長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.6mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。覆土は黒褐色を呈し、覆土中には弥生式土器が出土したが、いずれも細片のため時期を確定する事ができない。



第12図 9号・10号土壤(縮尺3%)

9号土壤 (第12図、図版11)

調査区の中央部に位置する。主軸方位はほぼ南北方向をとる。土壤の長さ2.84m、幅1.65m、深さ0.53mを測り、平面形は不整形を呈する。覆土は黒褐色砂である。遺物の出土はない。

10号土壤 (第12図)

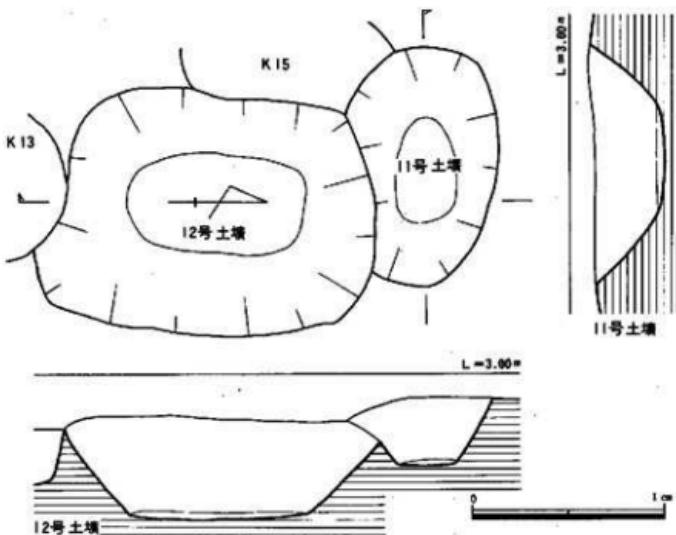
調査区の北側中央部に位置する。主軸方位はほぼ南北方向をとる。土壤の長さ1.58m、幅1.23m、深さ0.4mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。覆土は暗灰色砂である。遺物の出土はない。

11号土壤 (第13図)

14号壺棺墓の南側で検出した。土壤の主軸方位はほぼ東西方向をとる。土壤は南側を15号壺棺墓、12号土壤基に切られる。平面形は橢円形を呈し、長さ1.25m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。覆土は黒褐色砂である。出土遺物はない。

12号土壤 (第13図、図版11)

11号土壤の南側に接して検出した。主軸方位は南北方向をとる。構造は西側を15号・20号壺棺墓に、南側を13号壺棺墓に切られる。土壤の長さは1.55m、幅1.25m深さ0.5mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。覆土は黒褐色砂である。遺物の出土はないが、切合い関係から中期後半以前の時期が考えられる。

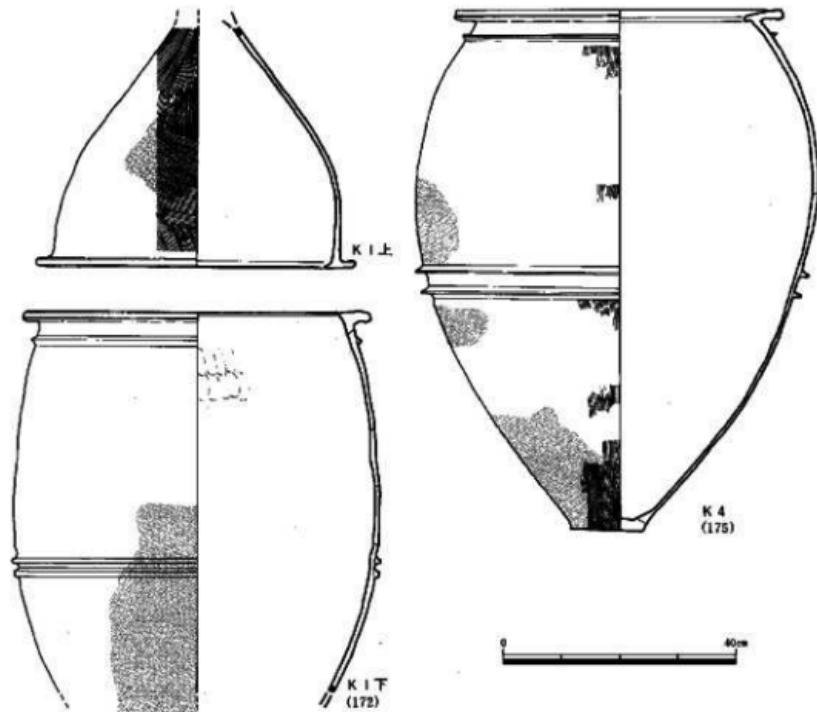


第13図 11号・12号土壤 (縮尺3分)

3. 遺物各説

(1) 覆棺の概要 (第14~21図、図版12~16)

覆棺墓は小児棺が10基、成人棺が9基の計19基が確認されたが、棺に使用された器種は壺形土器が主体を占め、他に鉢形土器2点、壺形土器がある。壺形土器は3点確認されたが、口縁部を打ち欠いたものはなかった。棺の組み合せは接口が最も多く8基、次いで呑口、覆口が各2基づつあり、この割合は同時期の他の覆棺墓遺跡と同様の傾向を示している。胴部に穿孔した土器は13号覆棺の1基のみである。

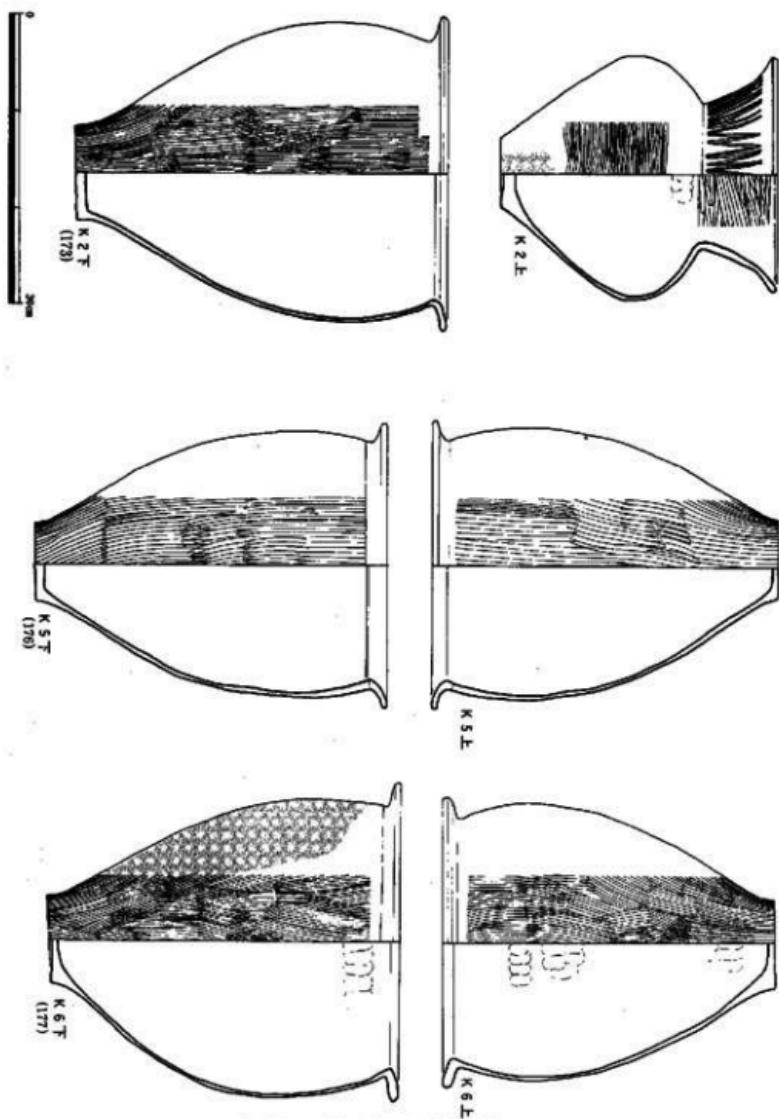


第14図 1号・4号覆棺 (縮尺3分)

第3表 第7次調査発掘観察表

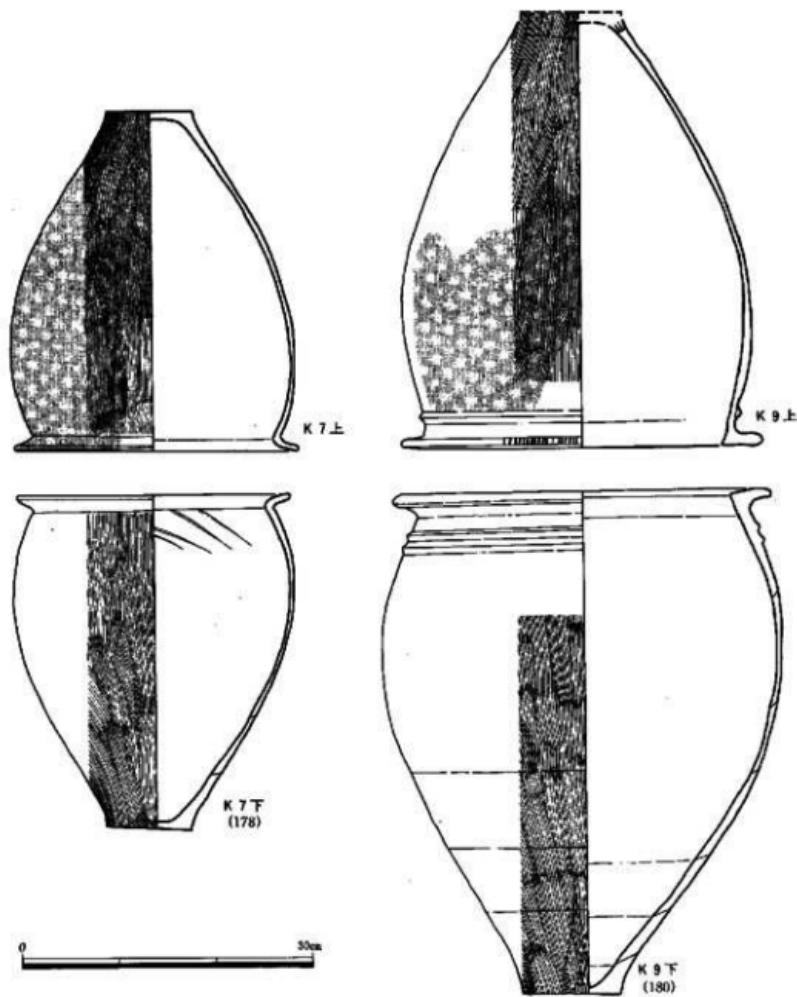
(1)

発掘番号	口縁部形態	法 米	特 徴	備 考
K 1 (172)	上 	口径54.3cm 器高42.0cm (底部欠損)	逆L字形口縁で、内側にやや張り出る。 口縁部はヨコナガ調整。器体外表面の上位及び中位はタテハケ。 中位はヨコハケ調整(ハケ幅2.4mm, 15本前後)。 器体内面はナゲ調整。	腹部中位に 黒斑
	下 	口径60.0cm 器高56.0cm (底部欠損) (谷部欠損)	逆L字形口縁で、内側にやや張り出る。 口縫下に三角突起一ヶ、腹部中位にコ字形突起二ヶを施す。 口縫、及び突起部はヨコナガ、胴部内外面はナゲ調整。 底部内面に指圧痕を残す。 胎土は精良、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好。	腹部中位～ 下位に黒斑
K 2 (173)	上 	口径44.5cm 器高28.5cm 底径 7.5cm	臺形口縫。 強く張った胴部と外上方へ大きく開く口縫部を持つ。底部は上げ底。 口縫部外面にタケ、及びナナメ方向の縦目、口縫部内面、 胴部外面に横方向のヘラミガキ、胴部内面はナゲ調整で 底部内面に指圧痕を残す。 胎土は精良、色調は須赤褐色を呈し、焼成は良好。	外面丹塗り
	下 	口径32.6cm 器高38.6cm 底径 9.9cm	上面が丸や丸味を持つくの字形口縫。底部は平底。 口縫部はヨコナガ、胴部外面はタテハケ調整(ハケ幅2.5mm, 10本前後)。 器体内面はナゲ調整。 胎土は精良、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好。	外面丹塗り
K 4 (175)	单 	口径56.0cm 器高90.1cm 底径12.4cm	内傾する丁字形口縫で内側の張りが弱い。 口縫下に三角凸起一ヶ、腹部中位にやや張れ気味の 三角凸起二ヶを施す。平底。 器体外表面はタテハケ後ナゲ調整、ハケ目を部分的に残す (ハケ幅2.3mm, 15本程度)。 器体内面はナゲ調整。胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。 色調は褐色を呈す。	腹部中位 及び 下位に黒斑
K 5 (176)	上 	口径29.8cm 器高36.1cm 底径 8.2cm	上面が丸味を持つくの字形口縫。平底。 口縫部はヨコナガ、器体外表面は粗いハケ調整(ハケ幅5mm)。 器体内面はナゲ調整。	
	下 	口径29.4cm 器高36.8cm 底径 8.1cm	上面が丸味を持つくの字形口縫。平底。 口縫部はヨコナガ、器体外表面は粗いハケ調整(ハケ幅5mm)。 胎土に0.1～1mm程度の砂石粒を含み、色調は黄褐色を呈す。 焼成は良好。	



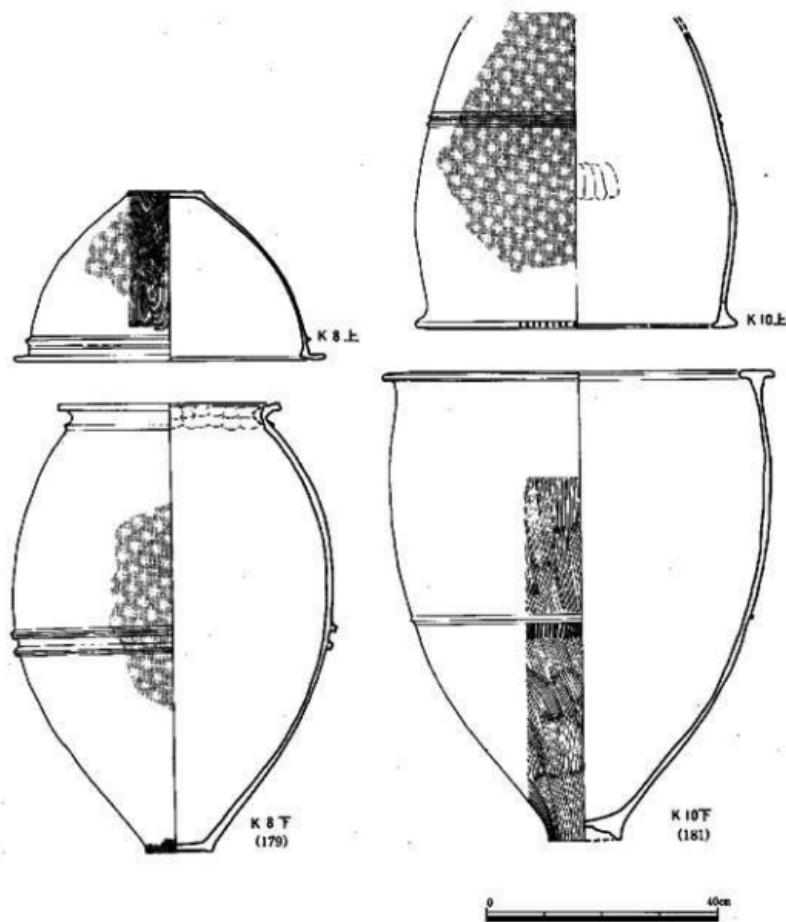
第15圖 2号・5号・6号撲箱 (縮尺3倍)

器械番号		II縁部形態	法量	特徴	備考
K 6 (177)	上		口径30.0mm 器高34.6mm 底径 9.1cm	上面が丸味を持つ「く」の字形口縁。底部は平底。 口縁部はヨコナゲ調整。 器体外側タテハケ調整(ハケ幅2.3mm, 10本程度)。 器体内面はナゲ調整、部分的に指圧痕を残す。	
	下		口径33.0mm 器高36.5mm 底径 9.2cm	上面が丸味を持つ「く」の字形口縁。底部はやや上げ底。 口縁部はヨコナゲ調整。 器体外側タテハケ調整(ハケ幅3mm前後, 10~13本程度)。器体内面はナゲ調整。 底部に指圧痕を残す。胎土に1mm前後の凹凸を含む。 色調は赤褐色を基し、焼成は良好。	器体外側に黒斑。
K 7 (178)	上		口径28.6mm 器高35.4mm 底径 9.2cm	上面がややくぼんだ「く」の半形口縁。底部は平底。 II縁部はヨコナゲ調整。内面に一部ハケ目を残す。 器体外側ハケ調整(ハケ幅2.5mm, 8~12本程度)。 器体内面はナゲ調整。焼成は良好。	
	下		口径28.2mm 器高34.8mm 底径 8.9cm	上面が丸味を持つ「く」の半形口縁。底部は平底。 口縁部はヨコナゲ調整。 底部内面に2本の沈線(5.4mm間隔)。 器体外側タテハケ調整(ハケ幅2.5mm, 10~12本程度)。 器体内面はナゲ調整。焼成は良好。	
K 8 (179)	上		口径33.6mm 器高29.6mm 底径13.0cm	逆L字形口縁で、口縁直下に三角突部一条を施す。底部は平底。 口縁部、突部ヨコナゲ、器体外側タテハケ調整(ハケ幅2mm, 12~16本)。 器体内面はナゲ調整。 胎土に砂粒を含む。色調は黄褐色を基し、焼成は良好。	肩部中位に黒斑。
	下		口径38.5mm 器高28.1cm	やや内傾する逆L字形口縁で、内側への張り出し部を打ち欠いている。 口縁直下に三角凸部一条、腹部中位にくぼみの「く」字形突部二条を施す。 口縁部、突部ヨコナゲ調整。 器体外側ハケ後ナゲ、底部にハケ目調整(ハケ幅1mm, 10本程度)。 胎土に砂粒少量含む。焼成は良好。	肩部中位に黒斑。
K 9 (180)	上		口径37.6mm 器高44.5mm (底部欠失)	水平な逆L字形口縁で、内側にやや張り出る。 口縁直下に三角突部一条を施す。口縁部ヨコナゲ調整。口縁端部に刻み目。 器体外側タテハケ(ハケ幅2mm, 6~11本)。器体内面はナゲ調整。 焼成は良好。	器体上半に黒斑。
	下		口径39.0mm 器高52.4mm 底径10.1cm	やや内傾する逆L字形口縁。II縁直下に低い三角突部二条施す。 口縁部ヨコナゲ、器体外側は底部がナゲ調整の他はハケ目調整(ハケ幅2mm, 8~12本)。器体内面はナゲ調整。 下半部に粘土接合痕を残す。 胎土は稍粗。色調は黄褐色を基し、焼成は良好。	



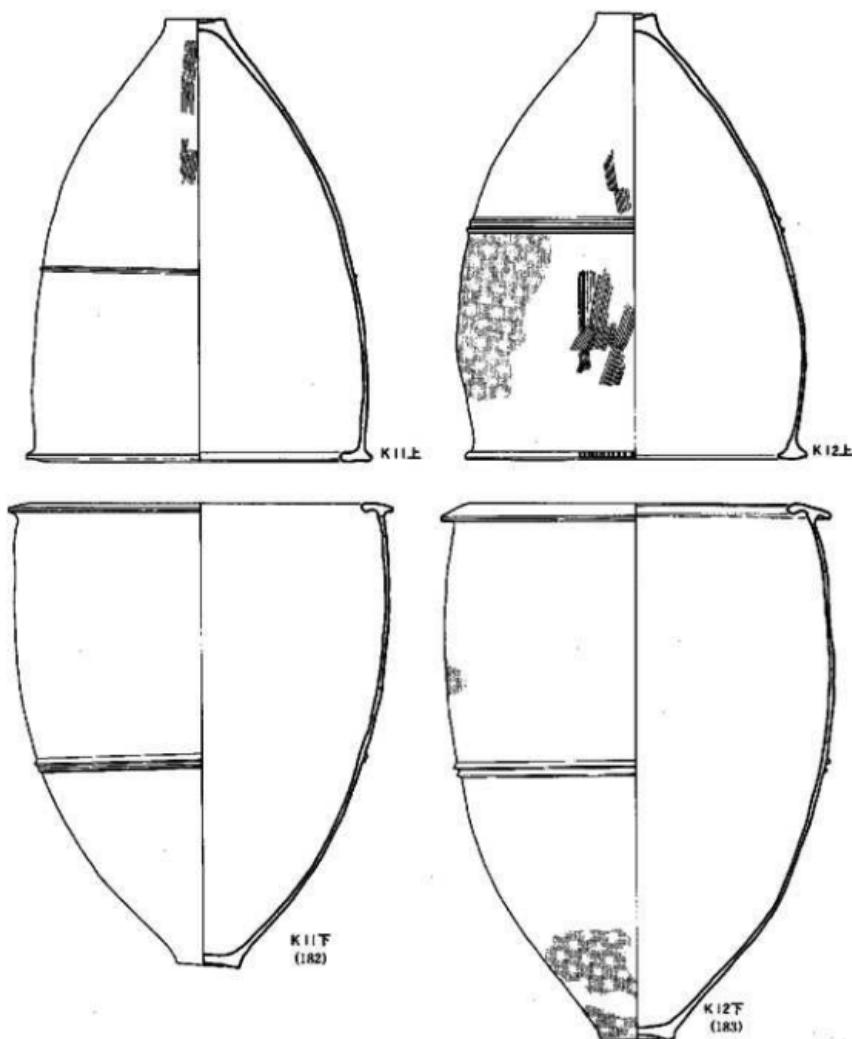
第16図 7号・9号壺棺 (縮尺3/6)

各壺棺の成形については、小児棺は壺形土器を除きハケ目調整、成人棺はハケ目調整後、ナデ調整を施しているものが主体をなす。しかし、10号壺棺はハケ目調整をナデ消さず、又、胸部突帯の下にタタキ調整を残し、他の棺とは違った特徴を持つ。色調は成人棺には赤褐色を呈



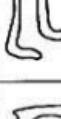
第17図 8号・10号壺棺 (縮尺5分)

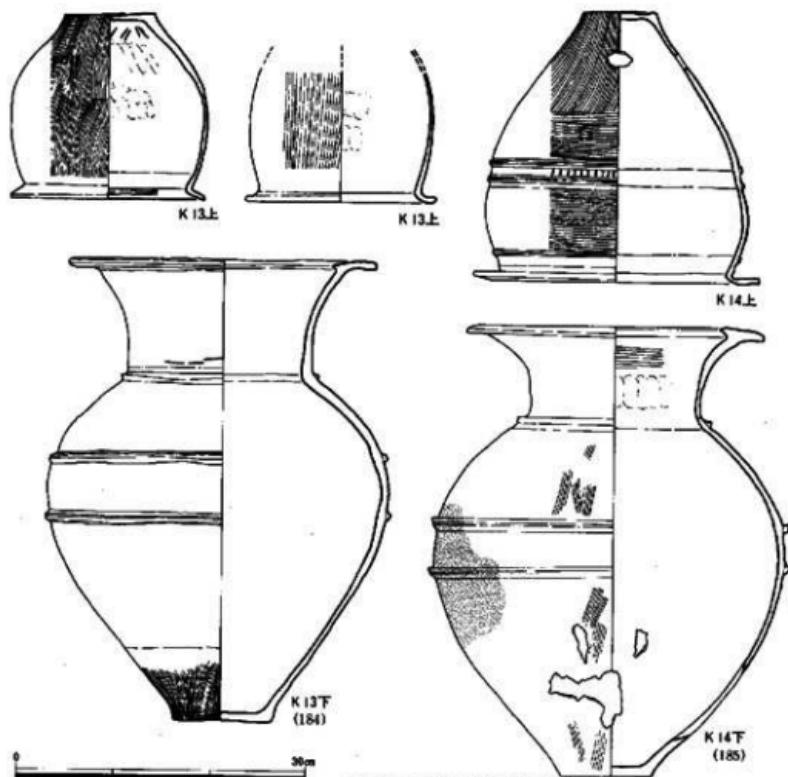
する上器が多く、小児棺では黄褐色を呈する上器が多い。焼成は各棺とも良好である。各壺棺については、第3表で詳述しているので参照にされたい。



0 40cm

第18図 11号・12号甕棺 (縮尺3/4)

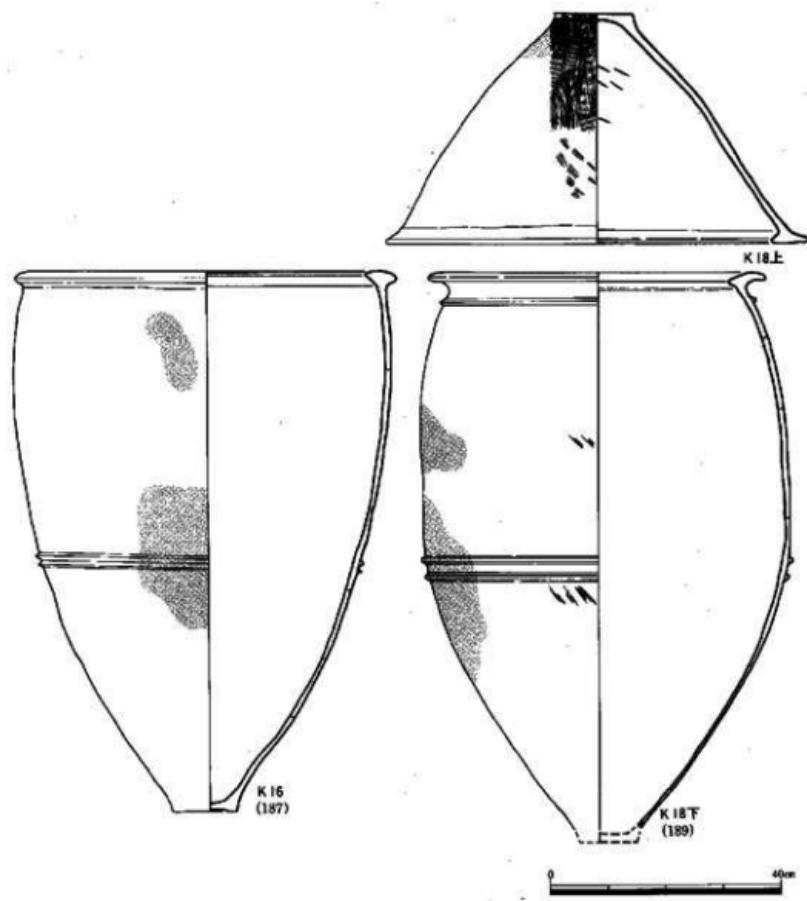
実験番号		口縁部形態	法 番	特 徴	備 考
K10 (181)	上		口径56.2cm 器高51.3cm (胴部下位欠失)	上部は丁字形口縁で、内外への張り出しが弱い。胴部下位に三角突帯二条。 口縁部、突帯部はヨコナダ調整、口縁端部には組み目を施す。 器体外面は肩部やハケ後ナダ調整、突帯直下でタタキ目。 その他の部分はハケ目調整(ハケ幅3mm)、内面はナダ調整。 地土に砂粒を少量含む。焼成は良好。	黒底以下に 黒斑。
	下		口径68.2cm 器高61.5cm 底径12.7cm	水平な丁字形口縁、胴部中位に三角突帯一条。 底部平底と思われるが結合部で欠失している。 I字縫部、突帯部はヨコナダ調整。器体外面はタテハケ後ナダ調整。 突帯直下にタタキ目(ハケ幅3mm, 12本前後)。 地土に細砂粒を含む。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好。	
K11 (182)	上		口径59.6cm 器高77.0cm 底径10.4cm	やや外傾する丁字形口縁で、内側への張り出しが強い。 胴部や上位に小さく鋭い三角突帯一条。底部は上げ底。 I字縫部、突帯部はヨコナダ、器体外面はハケ目後ナダ調整。 胴部下位にハケ目を残す。器体内面はナダ調整。 焼成は良好。	
	下		口径65.9cm 器高80cm 底径11cm	やや外傾する丁字形口縁で内側への張り出しが強い。 胴部下位に丸かけ二条、突帯一条を貼付。底部は上げ底。 口縁部、突帯部はヨコナダ、器体内外面はナダ調整。 地土に細砂粒を含み、色調は褐色を呈し、焼成は良好。	
K12 (183)	上		口径59.4cm 器高77.3cm 底径10.5cm	上部は丁字形口縁で、口縁で内外への張り出しが弱い。 胴部中位に三角突帯二条を貼付、底部は上げ底。 口縁部、突帯部はヨコナダ調整、口縁端部には組み目を施す。 器体外面はハケ後ナダ調整で、部分的にハケ目を残す(ハケ幅2mm)。 器体内面はナダ調整、焼成は良好。	黒底あり。
	下		口径67.2cm 器高93.0cm 底径12.6cm	外傾する丁字形口縁で胴部中位に三内突帯二条を貼付。底部は平底。 I字縫部、突帯部はヨコナダ、器体外面はナダ調整。 地土に細砂粒を含み、焼成は良好。 色調は黄褐色を呈す。	
K13 (184)	上		口径20.3cm 器高19.5cm	くの字形口縁。底部は上げ底。 口縁部はヨコナダ、調整、内面にハケ目を残す。 器体外面はハケ目調整(ハケ幅2mm, 10本程度)。 器体内面はナダ調整。胴部下半に指正痕。 底部付近にヘラ压痕。焼成は良好。	■
	下		口径31.8cm 器高48.4cm 底径10.3cm	やや内傾する細形口縁。底部に小さい三角突帯一条。 胴部中位に中央のくぼんだコの字形突帯二条を貼付。 口縁部、突帯部はヨコナダ。底部に板状具の圧痕。 器体外面はハケ後ナダ、近縁付近にハケ目を残す(ハケ幅1mm, 10本程度)。 器体内面はナダ調整。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好。	



第19図 13号・14号要摺 (縮尺3%)

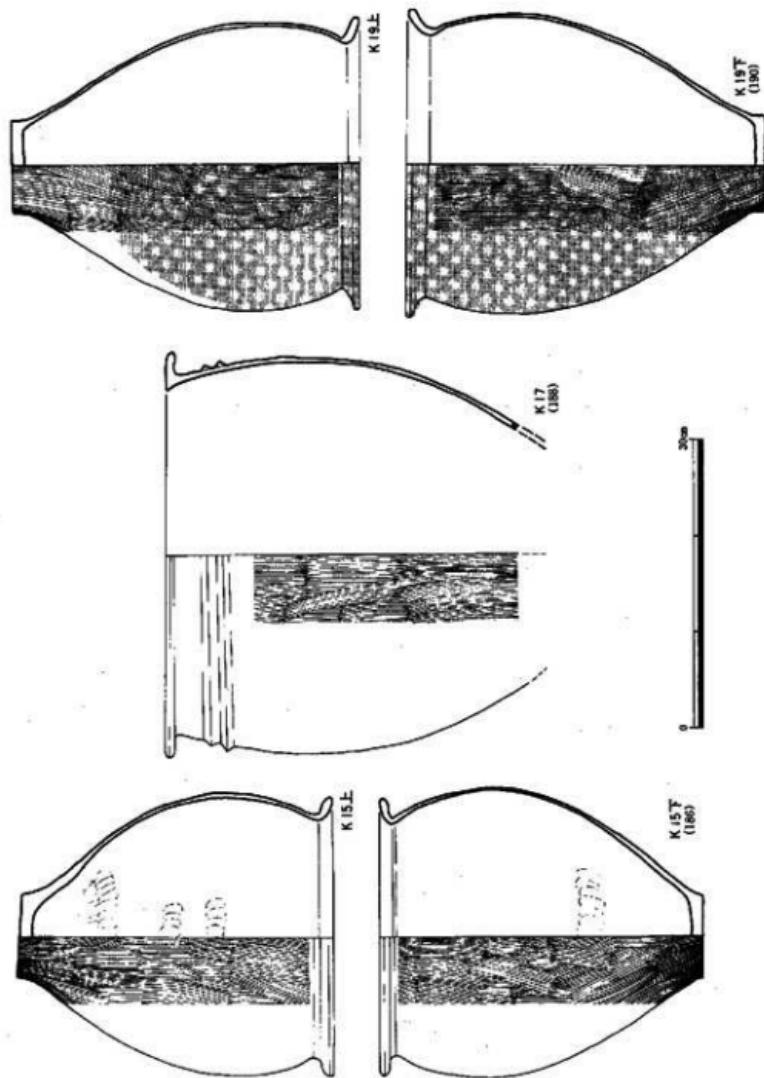
(4)

要摺番号	口縁部形態	法量	特徴	著本
K14 (185)	上	口径29.8cm 高さ28.1cm 底径 9.5cm	ほぼ水平なく字形口縁。口縁底に三角形の見かけ二条、突巻一条。 肩部上位にコの字凸帯二条を付す。 底部は少し上げ底。底部上位に穿孔。 口縫部、突巻部はヨコナガ調整。器体外面、肩部上位から 下位にかけてヨコ方向、腰部下位ではタテ方向のハラミガキ、 肩部突巻間にタテ方向の増文。器体内面はナダ調整。 焼成は良好。	
	下	口径30.8cm 高さ47.1cm 肩部最大径 37.2cm 底径 9.6cm	わずかに外傾する圓形口縁。縫部に三角突巻一条。 肩部中位に中央部のくびれたコの字形突巻二条。 底部は平底。腰部下位に上下3ヶ所の穿孔。 口縫、突巻部はヨコナガ調整。縫部内面にハケ目開物(ハケ幅4mm、7本程度)。 器体外面はハケ後ナダ(ハケ幅3mm、6本程度)。 器体内面はナダ調整。 胎土は精良、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好。	肩部中位に 穿孔。



第20圖 16号・18号麥格 (縮尺5分)

麥粒番号	口縁部形態	法量	特徴	備考
K15 (185)	上		口径29.0cm 器高32.2cm 肩部最大径 29.4cm 底径 8.8cm 上面は丸味を帯びたくの字形口縁。底部は平底。 口縁部はヨコナデ、器体外面はテテハケ調整(ハケ幅2.5mm, 9~12本)。 器体内面はナゲ調整。 肩部中位から下位にかけて指圧痕。	底部に 黒斑。
	下		口径29.0cm 器高33.6cm 肩部最大径 30.3cm 底径 8.6cm 上面は丸味を帯びたくの字形口縁。底部は平底。 口縁部はヨコナデ、器体外面はテテハケ調整(ハケ幅3mm, 8~11本)。 器体内面はナゲ調整。肩部中位に指圧痕。 胎土は稍良。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好。	底部に 黒斑。
K16 (187)	上		口径65.6cm 器高94.0cm 肩部最大径 64.8cm 底径11.05cm ぶ厚いT字形口縁で内外の張り出しがやや弱い。 肩部下位に小さい三角突起二条。底部は上げ底。 口縁部、凸唇部はヨコナデ、器体外面はナゲ調整。 胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈す。焼成は良好。	肩部中位に 黒斑。
K17 (188)	上		口径42.2cm 器高36.6cm 肩部最大径 41.2cm (底部欠損) 水平干渉字形口縁。口縁下に三角突起二条。 口縁部、凸唇部はヨコナデ、器体外面はハケ調整(ハケ幅1.5mm)。 器体内面はナゲ調整。 胎土に1mm前後の砂粒を含み、色調は黄褐色。焼成は良好。	
K18 (189)	上		口径73.4cm 器高39.7cm 底径13.8cm ほぼ水平な鈎先口縁。底部は平底。 口縁部はヨコナデ、器体外面はハケ後ヨコナデ。 器体下半にハケ目を残す(ハケ幅1.5mm, 10~12本)。 器体内面はナゲ調整。器体下半に板状具の圧痕。	
	下		口径58.6cm 器高97.0cm 底径64.4cm (底部欠損) U字形、突唇部はヨコナデ、器体外面はハケ後ナゲ調整、 部分的に1.5mm幅のハケ目を残す。 器体内面はナゲ調整。 胎土に砂粒を含み、色調は明赤褐色を呈す。焼成は良好。	肩部中位～ 上位に 黒斑。
K19 (190)	上		口径30.4cm 器高35.8cm 肩部最大径 29.9cm 底径 9.7cm 上面は丸味を帯びたくの字形口縁。底部は平底。 口縁部はヨコナデ、器体外面はテテハケ調整(ハケ幅2.5mm, 8~10本)。 器体内面はナゲ調整。	黒斑あり。
	下		口径37.0cm 器高37.2cm 肩部最大径 31.0cm 底径 9.9cm 立ちあがりの強いくの字形口縁。上面は丸味を帯びる。 底部は平底。 口縁部はヨコナデ、器体外面はテテハケ調整(ハケ幅3mm, 8~11本)。 器体内面はナゲ調整。	黒斑あり。



第21図 15号・17号・19号蝶棺 (縮尺3倍)

(2) 土壌出土遺物 (第23図、図版17)

土製品

土錘(17, 20) 第4号土壌から出土した。17は管状土錘で、先端部を欠いているが、現存長5.9cm、径2.0cm、孔径0.57cmで、重さは18.2gを測る。胎土に長石等の細石粒を含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。20は滑車形をした有溝土錘である。長さ4.4cmで、重さは17.3gを測る。胎土は雲母、長石等の細石粒を含み、焼成は良好である。明黄褐色を呈する。

(3) 包含層出土遺物 (第22図、図版17)

須恵器

坏蓋(1) 復元口径14cmを測る。天井部から体部にかけて軽く屈曲し、平底の天井部を持つ。外面は天井部から体部にかけて時計回りのヘラ削りを施す。内面はナデ調整である。口縁内面にはやや外傾した断面三角形のかえりを有する。かえりは口縁部と同じ高さである。胎土に少量の砂粒を含み、灰青色を呈する。

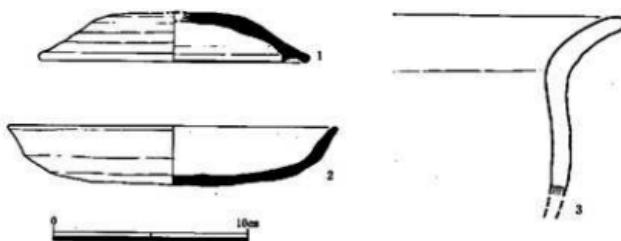
坏身(2) 口径17cm、器高3.1cmを測る。体部の屈曲は弱い。底部は丸味を持ち、口縁端部は尖り気味に引き上げている。内外面共にナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。暗灰色を呈する。

土師器

甕(3) 破片のため口径は不明である。現存高8.2cmを測る。大きく外反する口縁部を持つ。頸部の内面に軽く稜を持っている。器表は磨滅が著しいため、調整は不明である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。

土製品

土錘(4, 6, 8, 9, 11, 12, 14) すべて管状土錘である。完形品の長さは6.75~7.75cmの範囲で、平均7.6cmである。最大径は1.8~2.1cmで、平均1.97cmである。孔径は0.55~0.6cmで、



第22図 包含層出土遺物 (縮尺5%)

第4表 第7次調査出土土鉢計測表

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点(層名)	番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点(層名)
4	8.85	1.95	0.53	26.2	包含層	13	6.6	2.15	0.75	20.2	擾乱層
5	8.1	1.9	0.41	24.2	擾乱層	14	6.3+α	2.0	0.6	18.5+α	N層
6	7.75	2.1	0.58	29.3	包含層	15	6.4	2.0	0.7	24.2	擾乱層
7	5.65	2.0	0.65	26.0	擾乱層	16	6.0	2.0	0.46	15.1+α	擾乱層
8	7.65	1.95	0.55	28.5	N層	17	5.9+α	2.0	0.57	18.2+α	D 4
9	7.7	1.8	0.55	26.3	N層	18	4.8+α	1.93	0.55	18.0+α	擾乱層
10	7.5	1.95	0.6	22.7	擾乱層	19	3.7+α	1.9	0.65	10.3+α	擾乱層
11	6.75	2.05	0.55	25.0	N層	20	4.4	2.2		17.3	D 4
12	6.9	1.87	0.5	23.3	N層						

平均0.57cmである。重量は25～29.3gの範囲で、平均26.4gである。いずれも胎土には雲母、長石等の細石粒を含み、焼成は良好である。色調は9が黄灰色で、その他は黄褐色を呈する。

(4) 表土、及び擾乱層出土遺物 (第23～25図、図版17, 18)

擾乱層からは赤生式土器片や、土錘、近世から現代にかけての陶磁器類が出土した。陶磁器類は高取焼、伊万里焼が多く、器種としては碗、壺類を中心にスリ鉢、皿、窓道具等がある。他に土師質土器で近世の炮焰が3点出土している。

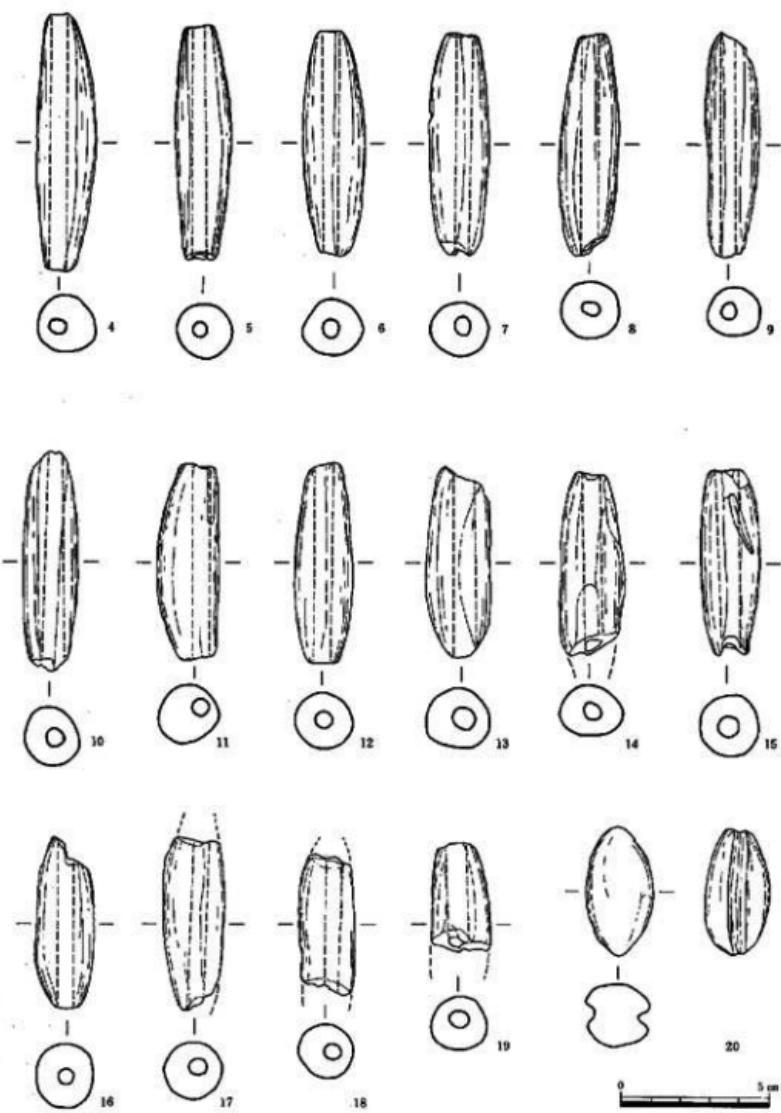
土製品

土錘(5, 7, 10, 13, 15, 16, 18, 19) すべて管状土錘で、16・18・19以外は完形品である。完形品の長さは5.65～8.1cmで、平均6.8cmを測る。最大径は1.9～2.15cmで、平均1.98cmを測る。孔径0.41～0.75cmで、平均0.6cmを測る。重さは22.7～24.2gで、平均23.5gを測る。5の胎土は精選されているが、他の胎土には雲母、長石等の細石粒を含む。焼成はすべて良好である。

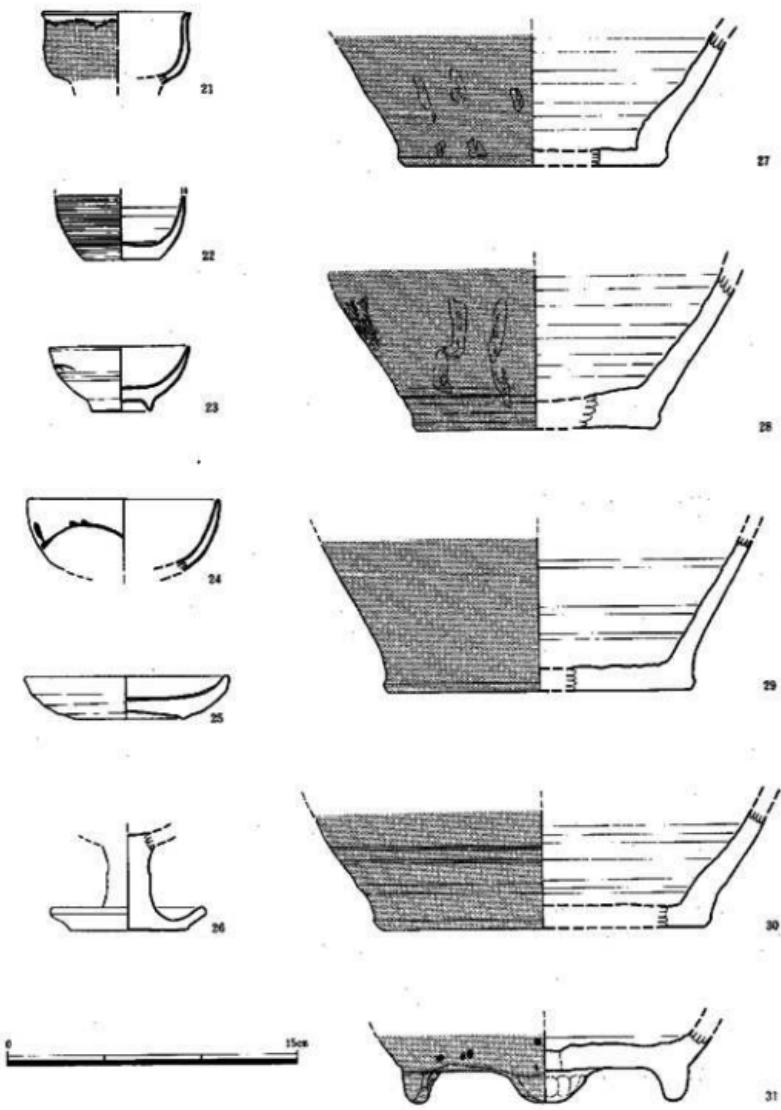
色調は11・15が黄灰色、18が赤褐色を呈し、他は黄褐色である。

陶磁器

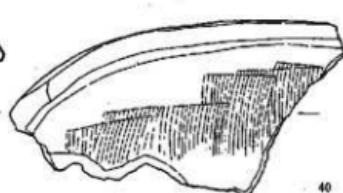
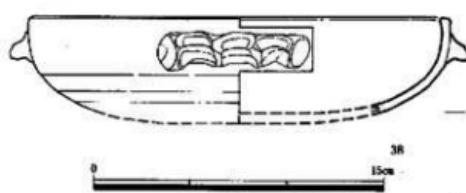
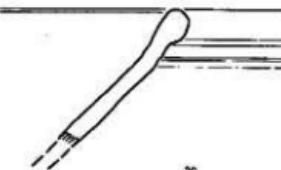
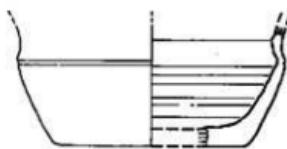
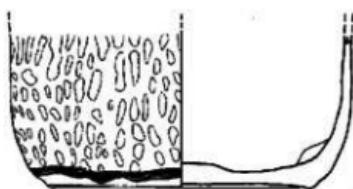
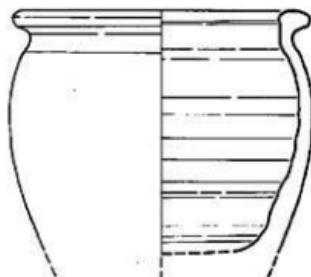
碗(21～24) 小型の碗で、22が高取焼で、23・24が伊万里焼と思われる。21は復元口径7.8cmを測る。丸味を持った体部から直口し、口縁部が外反する器形を有す。体外面に透明の釉を施し、外面口縁部下には、更に、黒色釉を浸し掛けしたものである。22は口縁部を欠損するが、現存器高3.3cm、底径4.0cmを測る。平底の底部から丸味を帯び、緩やかに立ち上がる体部を持つ。外面は横方向のハケ調整で、内面には水引痕を残す。内外面共に暗茶褐色釉が施される。23は口径7.2cm、器高3.3cmを測る。口縁端部は尖り気味である。体部は内湾しながら外上方に聞く器形を持つ。体部中位には2本の横線を巡らせる。内外面共に白色釉が施される。24は高台部を欠損しているが、口径10.0cm、現存器高3.7cmを測る。丸味を帯びて緩やかに聞く口縁部を持つ。内外面共に青味がかかった白色釉が施され、体部上半部には草花文と思われる文様を描く。



第23図 出土遺物（土錐）(縮尺5分)



第24図 捜査出土遺物 (縮尺3分)



第25図 搬乱出土遺物（縮尺3分）

皿(25) あげ底の皿である。陶器で、口径10.5cm、底径5.6cmを測る。口縁部は横ナデ、体部外面はヘラ削りを施す。内面に白色釉を薄く施す。外底部は糸切り痕を残す。胎土は精良で、黄褐色を呈する。

灯焰(26) 灯焰で、脚上部を欠いている。半球形の鉢がつくものと考えられる。黄褐色釉を施すが、外底部は露胎である。外底部に糸切り痕を残す。近世のものである。

甕(27~33) 高取焼と思われる大甕である。いずれも胴上半部を欠損している。27・29は底部から一度強く屈曲して外上方に立ち上がり、28・30は更に底部上方に凹線及び段を巡らす。調整は内外面に水引痕を残す。内外面共に暗茶褐色釉を施し、外面には更に黒色釉を流し掛けている。31は底部だけであるが、底部端部に断面U字型の脚を4つ付したものである。底部に穿孔があるので植木鉢であろう。脚部は指押えによる整形で指圧痕を残す。外底部はナデで、内底部には同心円の調整痕を残す。体部外面に暗茶褐色の釉を施し、黒色釉が斑点状に垂れ下がっている。32・33は丸味を帯びた体部に直口する頸部と、外へ折り返した玉縁状の口縁部を持つ小型甕である。共に底部を欠いている。32は復元口径15.2cm、現存器高12.5cmを測る。33は復元口径15.2cm、現存器高8.0cmを測る。33は32に比べ、直口した頸部と、肩の張った体部を持つ。調整は内外面共に、ヨコナデ調整し、体部内面には水引痕を残す。胎土は精良で、焼成は良好である。外面の釉は黄褐色を呈する。

鉢(34、35) 口縁部を欠損しているが、上げ底気味の底部と直口する体部を持つ。底部径13.6cm、現存器高8.0cmを測る。内外面共にオリーブ色の釉が施され、外面に黒色の釉を流し掛けている。外底部は釉が施されず、糸切り痕を残す。内底部には火膨れが生じている。35は復元底径9.7cm、現存器高6.3cmを測る。小型の鉢である。体部と頸部、及び頸部と口縁部の間に屈折を持っている。肩部には沈線を一条巡らせる。外面及び、口縁部、頸部内面はヨコナデを施し、体部内面には水引痕を残す。胎土は精良で、焼成は良好。赤褐色を呈する。

擂鉢(39) 玉縁状の口縁で、口縁部下に二重の段を巡らす。内面には8本一組の条線をナナメ方向に施す。胎土には砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。

陶器

甕(36) 底部片で、復元底径21cmを測る。外面はナデ調整で、内面にはハケを施す。砂粒を含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。

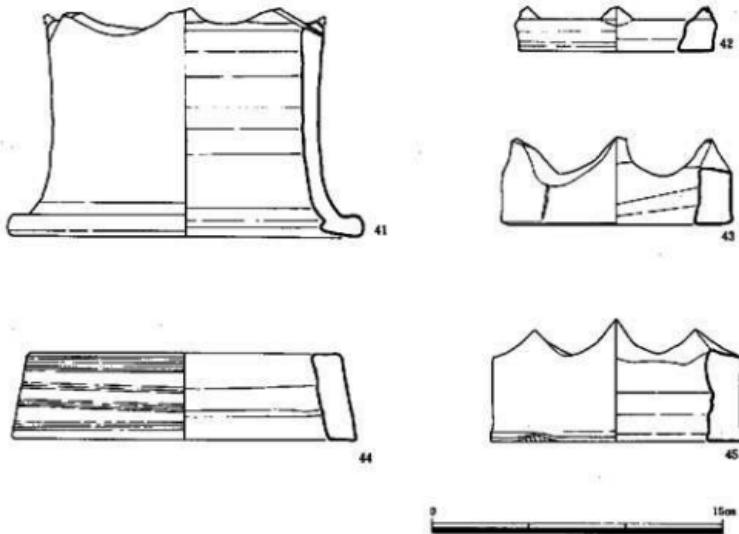
炮塔(37、38、40) 直口する口縁部と丸味を帯びた底部を持っている。37は片口で、復元口径20.6cm、器高3.3cmを測る。口縁部は底部から屈曲して立ち上がり、体部と底部の境には段を巡らす。38は把手を有するもので、復元口径21.8cm、器高5.6cmを測る。底部からやや内窓気味に立ち上がる。体部は丸味を帯び、口縁部へ緩やかに移行する。把手は指押えによる成形で、指圧痕を明瞭に残す。調整は37・38共に口縁部及び、体部内面はナデ調整で、外底部にはヘラ削りを施す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。黄灰色を呈し、外底面には煤が付着し

ている。40は約1/2弱の破片である。平面形はU字形を呈し、頂部付近に把手が付くものである。塵取形になるものと思われる。底部内面及び側壁内面はハケ調整で、他はナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。赤褐色を呈する。外底部、側壁部に煤が付着する。

窯道具

高取焼に関連するもので、付近に皿山が存在している。皿山での開窯年代は明治22年であるから、これらの遺物は近、現代のものである。

焼台（41～45） 上部に山形の突起を削り出している。41は窯の口頸部を反転させた様な形態に8個の山形突起を持つ。復元底径18.4cm、器高11.9cmを測る。43・45は体部に6個の山形突起を作り出している。43は復元底径11.8cm、器高4.5cm、45は復元底径13.1cm、器高6.3cmを測る。調整は41・43・45共に外面ナデ調整で、内面には水引痕を残し、外底部はナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。41は赤褐色を呈し、43・45は黄灰色を呈する。44は復元口径15.6cm、底径17.4cm、器高4.5cmを測る円筒形の焼台である。外面はヨコハケを施し、内面には水引痕を残す。上、下の平坦部は共にナデ調整である。胎土に砂粒を少し含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。



第26図 掘乱出土遺物（縮尺3/6）

4. 小 結

今回の調査区は、狭い面積であったが甕棺墓19基、土壙12基が検出された。土壙のうち、7号・11号・12号上壙号が土壙墓と考えられる。時期については、いずれも弥生式土器の細片を検出したのみで、弥生時代のいつ頃にあたるのか確定する事は出来ない。しかし、11号・12号土壙墓は、弥生時代中期後半の13号・15号・19号甕棺墓に切られていたため、その下限を中期後半に置く事が出来る。また隣接する藤崎第2次調査においても土壙墓が確認されており、その時期が中期初頭を降らないものであるため、当調査区における土壙墓も中期初頭以前の所産であると考えられる。

甕棺墓は中期前葉～中葉と、中期後葉のもので、森貞次郎氏の編年で見れば汲田式と立岩式の範疇に入るるものである。汲田式の甕棺墓は、¹¹² 10号・11号・12号・16号甕棺があるが、これらを更に藤崎遺跡1981年度報告の編年案に従い細分すると、10号・11号・12号上甕がⅣ期にあたる。¹¹³ 10号下甕・11号甕棺・¹¹⁴ 12号上甕は口径60～69cm、器高77～82cmとこの時期の棺としては大きく、口縁部も内外へ発達している。胴部凸筋についてもⅣ期の棺が1条を貼付するのに対し、2条を貼付しており、又、底部から胴部へ続く部分がスマートである等、Ⅴ期への漸移形態を示している。これに対し10号上甕は、口径が57cmと一回り小さく、胴部には三角凸筋を2条貼付するものの口縁部は平坦で内外への発達は小さい等、他の棺に比べやや古い様相を呈している。又、先の報告では述べられていないが、胴部から頸部への移行は、古い形態の甕棺が胴部から口縁部へ直線的に内傾するのに対し、新しいものは曲線を描き、内傾する事が指摘出来よう。12号下甕・16号甕棺は器高が94cm以上とⅣ期の棺に比べ大型化しており、口縁も内外に発達している。器形もスマートになり、砲弾形に近くなるなどⅤ期に分類されるものである。須次～立岩期の甕棺は1・4・8・18号甕棺と小児棺すべてで、先の編年案から見ればⅦ、Ⅷ期に分類される。成人棺では1号甕棺がほぼ平坦な口縁を持ち、口縁下のすぼまりが小さい等、Ⅷ期に属するもののやや古い様相を呈し、4・8・18号甕棺は口縁下のすぼまりが大きく口縁部も内傾している等、1号棺に比べ新しい様相を呈する。小児棺では器高40cmを越える大型の9号・17号甕棺が、次のⅨ期と比較すると、内傾する口縁部の傾きが小さく逆L字状を呈し、又、口縫部の内側に張り出しを持たないなどⅨ期の特徴を持つ。特に17号甕棺は、9号甕棺に比べ口縫下のすぼまりが小さく、口縫部が水平である事からⅨ期に近い特徴を持っている。器高40cm以下の小児棺では2号甕棺・6号下甕が口縫部の立ち上がりはわずかでⅨ期に属する。その他の棺はすべてⅨ期の範疇に入るものであるが、5号・19号下甕は立ち上がりが大きく、くの字口縫を呈し、Ⅹ期に近い様相を呈する。以上、藤崎遺跡1981年度編年に従い分類したが、これを表に整理してみる。

中期前葉～中葉の成人棺では、表を見てもわかる様に上甕には古い要素を持つ棺も下甕には

第5表 第7次調査壇棺編年表

時期	中期前葉		中期中葉		中期後葉		後期前葉	
	N	V	M	W	E	I	X	
成入棺	K10上、K12上、K10下、K11		K12下、K16、K1			K4	K18、K8	
小児棺			K17、K9、K15	K13、K14、K7上		K7下、K19下		

新しい要素を持ち、時期的な差はあまりないと思われる。上、下棺の前後関係から10号→11号→12号・16号壇棺という結果が得られる。この結果から小面積であり断定は出来ないものの、当調査区のこの時期の壇棺墓は南から北へ造営されて行くようである。中期中葉～後葉の成人棺では4・18・8号壇棺の順になると思われるが、現時点では丸味を強く帯びた8号棺の位置づけが困難で、時期的な新旧を述べる事が出来ない。小児棺については17号が最も古く、次いで2・9号になる。そして最も新しい様相を呈するのが5号・19号下葬であるが、その他の小児棺については、胴部が強く張り丸味を帯びるものと、スマートな器形のものがある事が指摘出来る。口縁部の立ち上がりから後者がやや新しくなると考えられる。今回の調査では、Ⅶ期の壇棺墓が検出されなかったが、前述した様にⅧ期の壇棺にもⅦ期の形態に近いもの、Ⅸ期の壇棺もⅧ期の要素を持つものが存在する。また隣接する第2次調査では、Ⅷ期の壇棺が検出されており、一概にこの区域がⅧ期に断絶があったとは言えない。

次に壇棺墓の配置、傾斜角度、方位等について述べる。壇棺墓の配置のされ方は、中期前葉の壇棺墓が等間隔で埋葬されているのに対して、後葉の壇棺墓は、成人棺のまわりに小児棺を配し群集する。この傾向は藤崎遺跡第1・2次調査においても指摘出来る。この様な時期による相違は、^{註4}福岡県甘木市の栗山遺跡、^{註5}佐賀県三養基郡の二塚山遺跡、^{註6}同神埼郡四本黒木遺跡等も中期前葉から中葉の過程において見る事ができ、集団の規制から家族的な小グループの成立と意味づけされている。棺の埋葬方位は、中期前葉の10・11・12号壇棺墓は、頭位方向を統一し、方位もN-35°-E～N-6°-Wまでの40°の間にあり、又、後葉の壇棺墓においても同一方向を示す棺が多く、家族墓的な小グループの自立を見るものの集団的に何らかの規制があったものと考えられる。埋置角度においては、中期前葉の棺よりも後葉の棺がやや大きさの角度を持つ様であるが、藤崎遺跡第1・2次調査例を併せ見ると、前期の成人用壇棺墓が40°以上の大きな角度を持つものに対し、それ以降の成人用壇棺墓は15°以内のものが圧倒的に多い。この事は、他の壇棺墓遺跡が、中期中葉から後葉以降に埋置角度が大きくなる状況と相違を示す。又、それに伴い頭位方向も一般的には、中期中葉以前の壇棺墓で頭位が下葬にくるものから中期後葉には上葬へと逆転するのに対し、当遺跡では人骨が出土しているものを見る限り、逆転する事なく前代の伝統を守っているのである。この事は、同じく砂丘上にある西新町遺跡にも言える。これは当遺跡、及び西新町遺跡が砂丘上に立地する事に要因が求められよう。すなわち、砂地であるため他の遺跡に比べると容易に基壙を掘る事ができ、棺の大型化に伴う労力を節減する必要はない。

かった。またかえって、傾斜をつける事は、墓壙の崩壊を招いたものと思われる。

以上、甕棺墓の形式、配置、方位、埋置角度等について述べて来たが、型式においては甕棺の出土数が少ない事から、更に、細分出来る可能性を残すものの、藤崎遺跡第2次調査報告の編年案に頼らざるを得なかった。又、この他にも甕棺墓を営んだ集団の経済的基盤、甕棺墓に見る埋葬原理、他地域との関連など残された問題点が多い。今後、資料の増加を待って再度検討してみたいと思う。

註1 福岡市教育委員会、井沢洋一氏の御教示による。

註2 萩内次郎「弥生時代における細形鋼劍の流入について」『日本民族と南方文化』 1968

註3 福岡市教育委員会『高速鉄道関係調査報告書「藤崎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981

註4 註3と同じ

註5 甘木市教育委員会「栗山遺跡」甘木市文化財調査報告第12集 1982

註6 佐賀県教育委員会 新郷土刊行会『二家山』佐賀県東部中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 1979

註7 佐賀県教育委員会「四本黒木遺跡」四本黒木遺跡発掘調査報告書 1977

註8 福岡市教育委員会『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集 1982

V章 第9次調査

1. 調査経過の概要

調査対象地は住宅地であったため、客土や攪乱等の存在することが予想された。昭和58年11月の試掘調査の結果、表土下の約50cm～70cmに灰白色砂層の地山面が存在することが判明した。しかし、その上部には暗茶褐色砂質層が乗っており、奈良～中世の遺物を包含している事から二つ以上の生活面が存在する可能性があった。そのため表土、或いは客土を調査区外へ排除するとともに攪乱層の撤去を丁寧に行い、遺構面の検出に努めた。

遺構面は上・下の二面を検出できた。すなわち上面は黄褐色粘土を混入した暗茶褐色を呈した砂質層で形成されており、厚さは約30～50cmを測る。この層は中世の遺物を含んでおり、7世紀～9世紀の須恵器や中世の土師壺、皿、陶磁器が出土する。中・近世の遺構は全てこの暗茶褐色砂質土層上面に検出できるので、中世の整地層として考えて良いだろう。東側は攪乱が著しく遺構の遺存状態は悪い。遺構は十墳、土壤墓、製鉄跡、溝、pit等を検出したが、特に性格の不明な土壤を多く検出した。これらの土壤の形状は一様ではなく、円形、隅丸方形、隅丸長方形、不定形を呈しており、覆土や出土する遺物の状態にも違いがある。掘立柱建物の大柱穴と考える土壤もあるが狭い面積のため確定するには至らなかった。

下層の遺構面は黄灰色、又は黄白色砂層上面で検出できる。これらの層には遺物を含んでおらず、本来の砂丘面（地山面）と考えられる。遺構の時期は弥生時代から古墳時代に及び、住居跡、土壤、方形周溝遺構などを検出した。以下に各遺構について説明を加えていくが、上・下の遺構面毎の説明は行わない。住居跡、土壤、溝の順次で述べるが、中世の遺構は上層の生活面、弥生時代～古墳時代の遺構は下層の生活面から検出したものと判断されたい。

2. 遺構各説

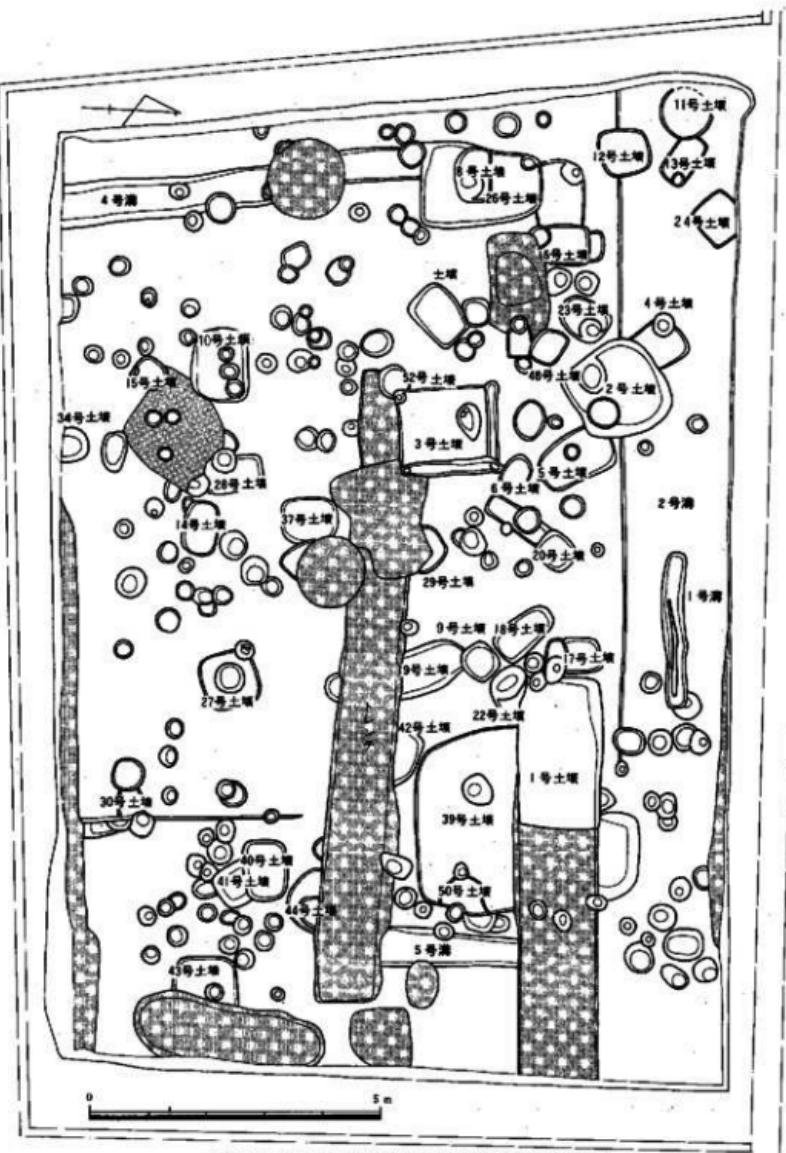
先述した様に上・下の両生活面より検出した遺構は住居跡、十墳、土壤墓、製鉄跡、溝、方形周溝遺構、柱穴等である。柱穴は掘立柱建物を構成するものと考えられるが、建物を検出するに至らなかった。幾つかの柱穴の底には土師皿数枚が鎮めとして納められていた。

(1) 住居跡

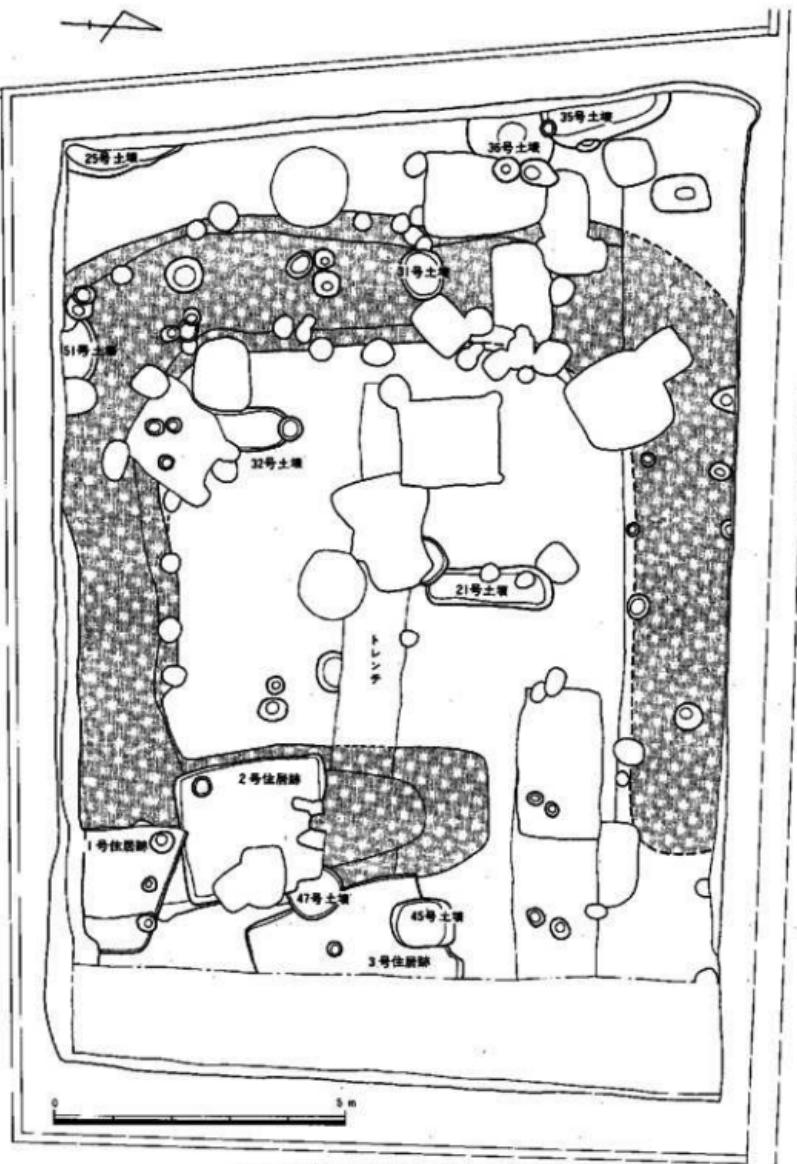
下層の生活面より検出したが、攪乱や試掘溝による損失が著しく、又砂地のため形状が明確に把握できた住居跡は無い。

1号住居跡（第29図、図版20、22）

中世の遺構によって西半分を消失している。隅丸方形を呈するものと思われる。東西壁の現存長244cm、残存の最大深は約10cmを測る。南側は境界地にあるため不明。覆土は黒灰色砂であ



第27図 第9次調査遺構配置図(歴史時代)(縮尺3‰)



第28図 第9次調査査査配置図(占墳時代以前)(縮尺3‰)

る。柱穴、炉跡は検出できなかった。遺物は土師器長頸壺、須恵器の坏身が出上している。

2号住居跡（第29図、図版21、22）

北側の一部をトレンチで切られており、1号住居跡と南壁で切合す。平面形はやや歪みのある長方形を呈する。東壁長約4.6m、西壁約5.2m、北壁約4.2m、南壁約4.5mを測る。現存の最大壁高は約26cmである。北壁の中央に接してハの字形に開いたカマドを付設している。カマドは黄褐色粘質土を用いて形成されている。柱穴はP₁、P₂が伴うものと思われる。P₁の径66cm、深さ40cm、P₂の径56cm、深さ52cmである。遺物は床面より須恵器坏身、蓋、土師器甕が出上している。

3号住居跡（第30図、図版21、22）

東側が境界地に位置するため正確な形状は不明。覆土は黒灰色砂である。49号土壙に切られる。現存長334cm、現存幅249cm、現存の最大深約26cmを測る。カマド及び柱穴は不明である。遺物は土師器甕、砥石2点、不明石器1点が出土した。

（2）土 壩

総数52の土壙を検出した。この内古墳時代～平安時代に属する土壙は21・26・30・31・32・35・36・45・46号土壙、弥生時代は25号土壙である。その他は全て中近世に属する。中世の土壙の覆土は暗茶褐色、又は暗黄褐色を呈する砂質土である。古墳時代の覆土は黒褐色砂質土である。

1号土壙（第31図、図版22）

東側は境界地にある。平面形は長方形を呈し、底部は浅いレンズ状を呈する。長さ265cm、幅147cm、最大の深さ38cmを測る。遺物は土師皿、坏、白磁皿が出土した。

2号土壙（第31図、図版22）

平面形は不整隅丸方形で、底面は浅いレンズ状を呈する。最大長170cm、最大幅165cm、最大深29cmを測る。遺物には、須恵器片、土師皿片がある。

3号土壙（第32図、図版23）

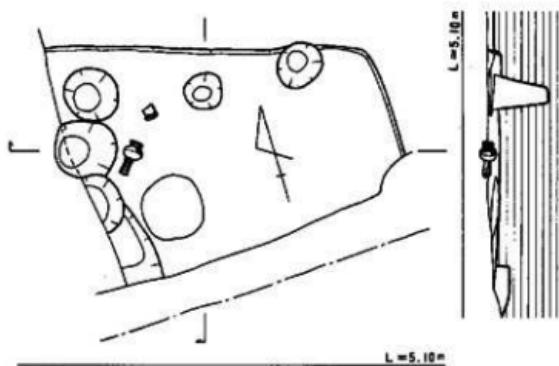
平面形は方形を呈している。四隅には径18～25cmの柱穴が存在する。北壁、東壁下の床面には幅15～20cmの小溝が存在し、柱穴間をつないでいる。南北長160cm、東西長126cm、深さ40cmを測る。遺物は鉄製釘、高取鏡片、骨片が出土している。近世と考えられる。

4号土壙（第31図、図版23）

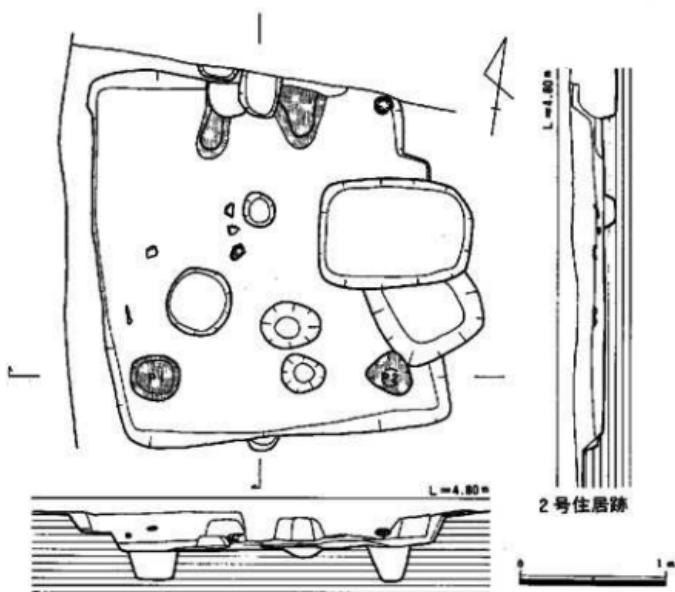
2号土壙に切られる。平面形は隅丸長方形を呈している。現存長84cm、幅80cm、深さ34cmを測る。遺物は土師器皿細片がある。

5号土壙（第32図、図版23）

平面形は隅丸長方形を、底部は舟底形を呈している。最大長140cm、幅89cm、深さ36cmを測る。遺物は須恵器片、土師器皿片がある。

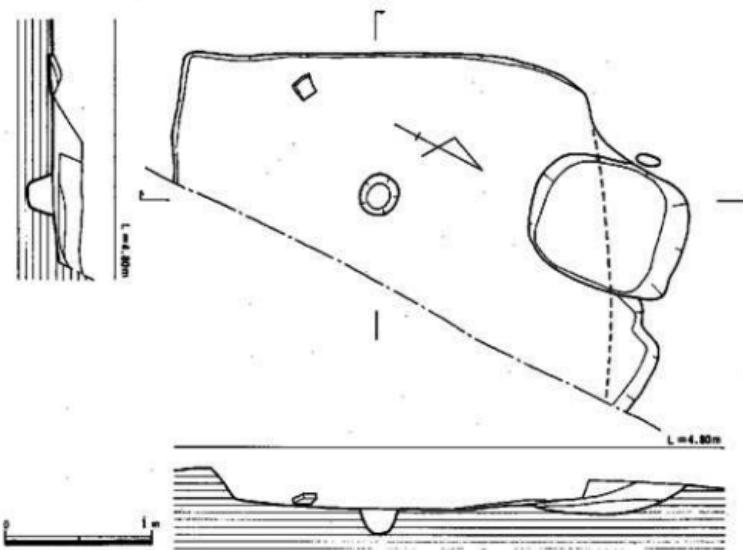


1号住居跡



2号住居跡

第29図 1号・2号住居跡 (縮尺3倍)



第30図 3号住居跡（縮尺1/4）

6号土壙（第32図）

平面形は不整隅丸長方形を、断面形は逆梯形を呈している。最大長57cm、幅48cm、深さ40cmを測る。遺物には須恵器の蓋がある。

7号土壙（第33図、図版24）

平面形は隅丸長方形を、断面形は浅いレンズ状を呈している。長さ103cm、幅77cm、深さ34cmを測る。遺物には土師器の糸切り皿が出土している。

8号土壙（第33図、図版24）

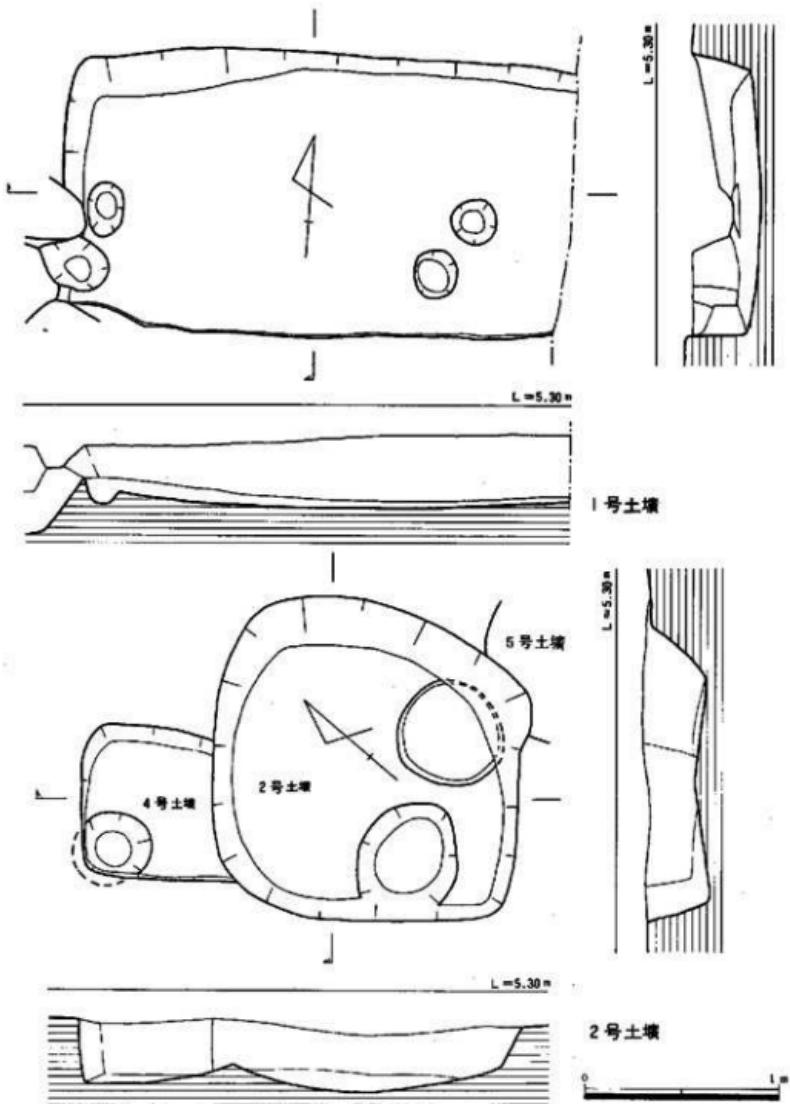
平面形は不整隅丸長方形を呈している。底部にpitが存在するが土壤を切っている。長さ113cm、幅87cm、深さ31cmを測る。遺物は土師器皿片がある。

9号土壙（図版24）

平面形は隅丸長方形を呈する。長さ66cm、幅59cm、深さ30cmを測る。遺物は上師器皿片、同安窯系碗がある。近世陶器片の混入がある。

10号土壙（第33図、図版24）

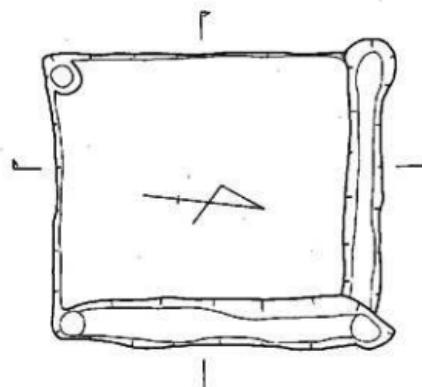
平面形は不整隅丸長方形を呈する。長さ129cm、幅100cm、深さ29cmを測る。遺物は土師器細片がある。



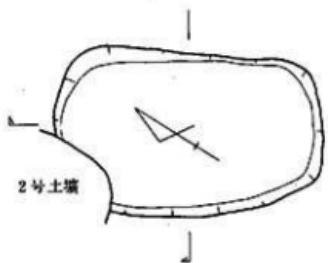
第31図 1号・2号・4号土壤 (縮尺5)



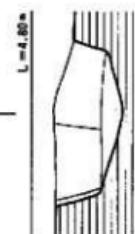
3号土壤



L = 5.20 m



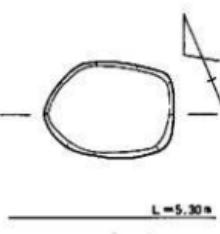
2号土壤



L = 4.80 m



5号土壤



6号土壤



第32図 3号・5号・6号土壤 (縮尺1/2)

11号土壙（第33図、図版25）

13号土壙と切合う。西側を消失している。平面形は円形を呈している。長径95cm、短径87cm、深さ18cmを測る。遺物は須恵器、土師器細片が出土している。

12号土壙（第33図、図版25）

平面形は不整隅丸方形を呈し、断面形は逆梯形である。長さ86cm、最大幅84cm、深さ14cmを測る。遺物は土師器細片と連結環状の金属器がある。

13号土壙（第33図、図版25）

西側を11号土壙に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形を呈する。長さ94cm、幅52cm、深さ12cmを測る。遺物には土師皿細片がある。

14号土壙（第34図、図版25）

平面形は隅丸長方形を、底部は浅いレンズ状を呈する。長さ93cm、幅62cm、深さ36cmを測る。遺物には土師器皿片がある。

15号土壙（第34図、図版26）

平面形は不整隅丸方形を、断面形は逆梯形を呈している。長さ59cm、幅55cm、深さ25cmを測る。遺物は土師器皿片がある。

16号土壙（第34図、図版27）

南側を擾乱にて消失する。平面形は不整隅丸長方形を、断面形は逆梯形を呈する。現存長103cm、幅68cm、深さ25cmを測る。遺物には土師器皿片がある。

17号土壙（第34図、図版26）

南側をPitによって切られる。平面形は不整隅丸長方形で、断面形は丹底状を呈する。現存長69cm、幅63cm、深さ21cmを測る。遺物は糸切り底の土師皿が出土している。

18号土壙（第34図、図版27）

平面形は不整隅丸長方形である。長さ118cm、幅61cm、深さ26cmを測る。底部断面形はやや浅いレンズ状を呈している。遺物は糸切り底の土師器杯、皿、瓦器塊、鉄滓が出土している。

19号土壙（第34図、図版27）

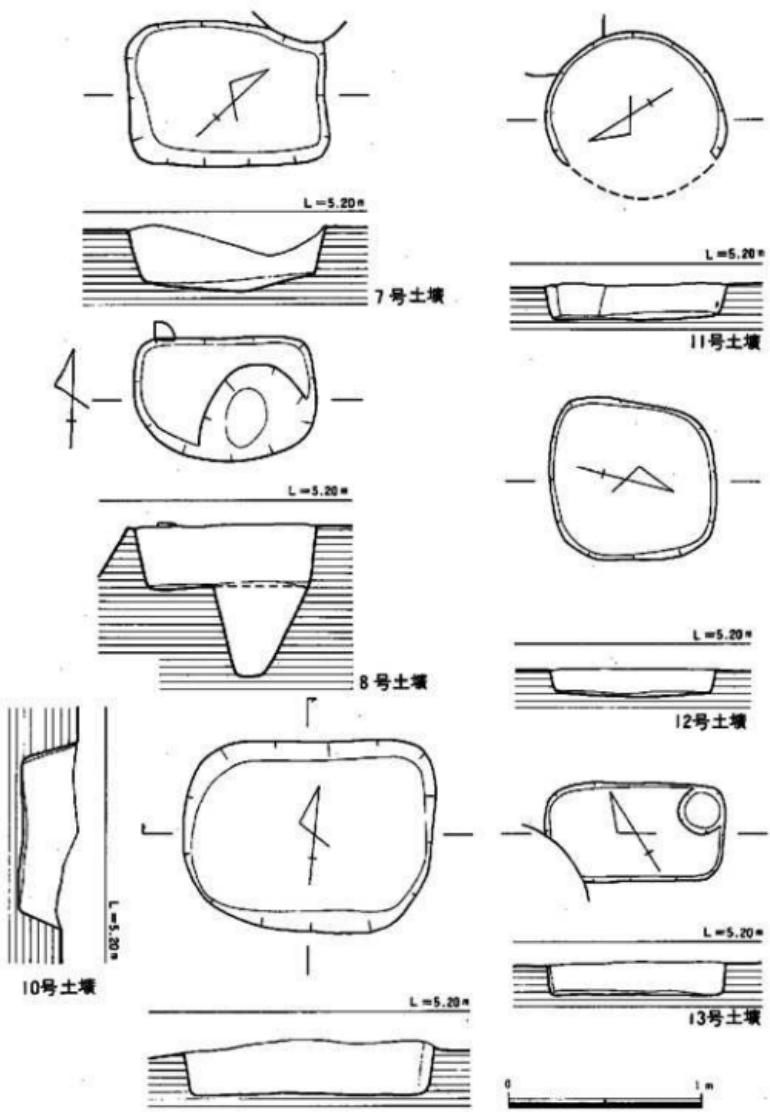
南側を試掘溝によって損失している。平面形は不整梢円形である。現存長141cm、最大幅81cm、深さ38cmを測る。遺物は磁器片、土師器皿片の他、小型の砥石が1点出土している。

20号土壙

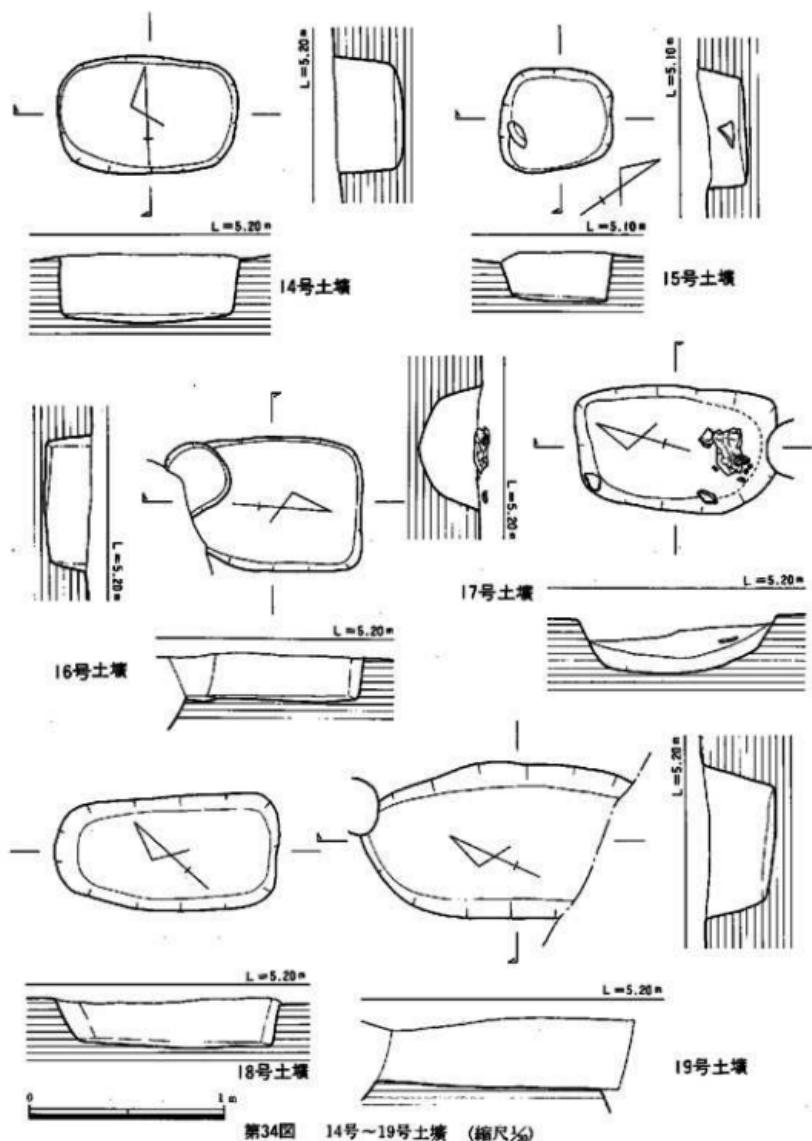
平面形は隅丸長方形で、断面形は逆梯形である。長さ98cm、幅50cm、深さ52cmを測る。柱痕を有しており、柱穴の掘り方と考えられよう。遺物には土師器皿片、摺鉢片がある。

21号土壙（土壙墓）（第35図、図版27）

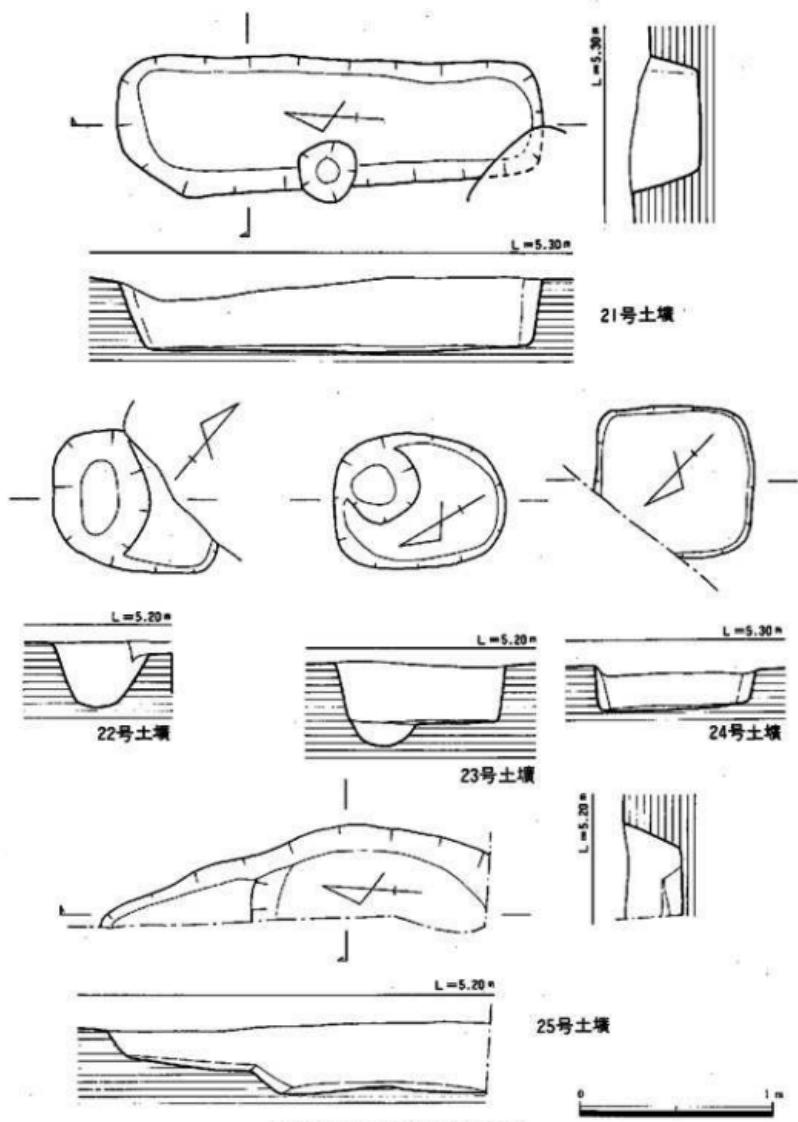
覆土は黒灰色砂質土である。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。底部は平坦である。北側が幅広くなっている。形状より土壙墓と考えられる。長さ221cm、幅74cm、深さ



第33図 7号・8号・10号～13号土壤 (縮尺3%)



第34図 14号～19号土壤 (縮尺 $\frac{1}{50}$)



第35図 21～25号 土壌 (縮尺1/20)

39cmを測る。墓壙の東側に接して黄褐色粘土が幅30cm、長さ3.0mに及び帶状に分布している。遺物は鉄片が2枚出土した他は無い。

22号土壙（第35図、図版28）

北側を1号土壙に切られる。浅い土壙で、西側に短径73cm、深さ34cmのpitを有している。現存長86cm、幅74cm、深さ10cmを測る。遺物には天目片、土師器細片、滑石片、鉄片がある。

23号土壙（第35図、図版28）

平面形は梢円形を呈する。断面形は逆梯形である。東側のpitは土壙を切った柱穴である。長さ89cm、幅71cm、深さ31cmを測る。遺物は土師器細片である。

24号土壙（第35図、図版28）

平面形は隅丸長方形で、断面形は逆梯形を呈する。北側が境界地にある。長さ83cm、幅78cm、深さ24cmを測る。遺物は白磁片、土師器皿の細片である。

25号土壙（第35図、図版28）

調査区の西南隅に存在する。境界地にあるため平面形は不明。二段掘りの土壙で、現存長202cm、現存幅55cm、深さ31cmを測る。覆土は黒灰色砂質土である。遺物は弥生時代後期の甕が完品で出土した。

26号土壙（第36図、図版29）

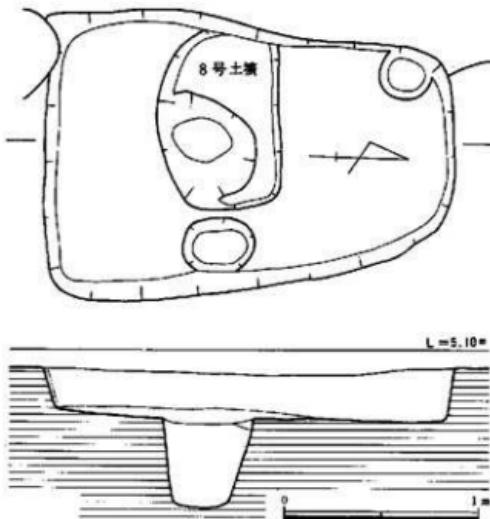
8号土壙に切られる。平面形は不整隅丸長方形である。長さ210cm、幅149cm、深さ22cmを測る。遺物は土師器皿の細片が出土した。

27号土壙（第37図）

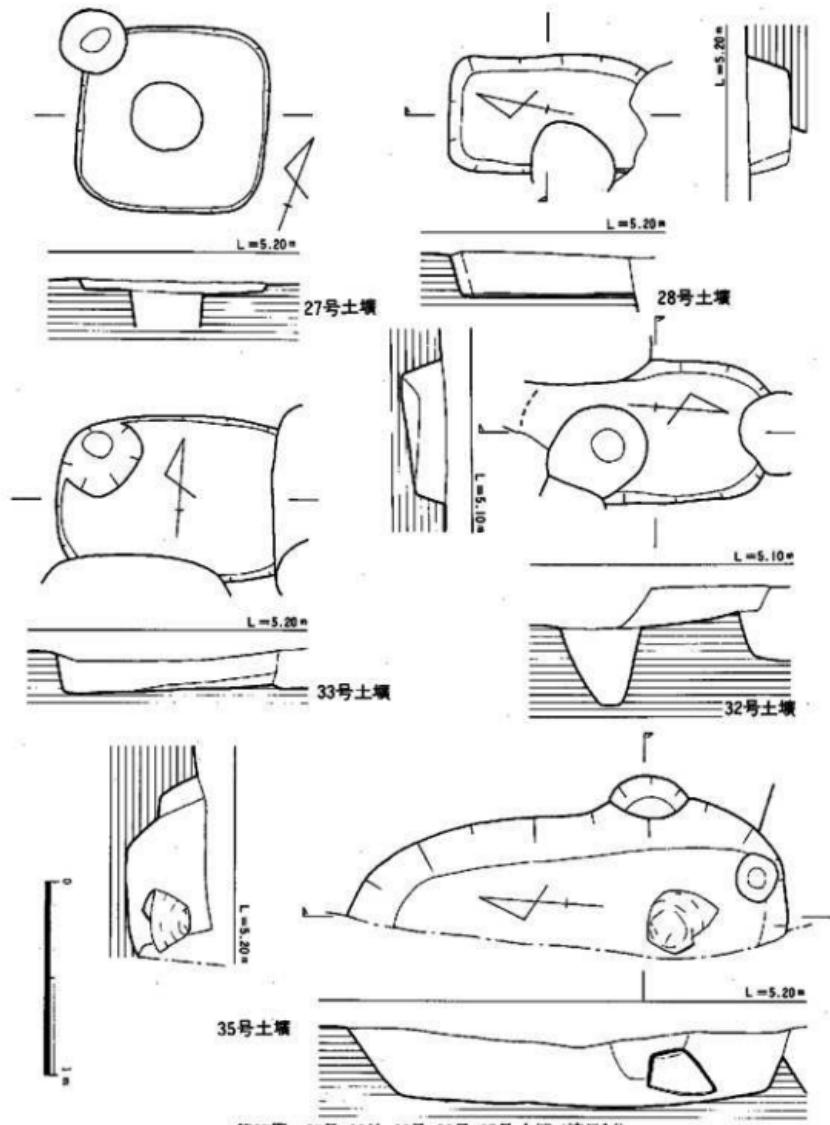
平面形は隅丸長方形を呈する。中央に径51cm、深さ55cmの柱穴がある。この柱穴の掘り方とも考えられる。土壙の長さ96~101cm、現存の深さ7cmを測る。遺物には土師器、須恵器の細片がある。

28号土壙（第37図、図版29）

南側を擾乱によって消失している。平面形は隅丸長方形で、断面形は逆梯形である。現存長101cm、幅61cm、深さ24cmを測る。遺物は土師器の細片が出土した。



第36図 26号七壙 (縮尺3倍)



第37図 27号・28号・32号・33号・35号 土壌 (縮尺 $\frac{1}{4}$)

31号土壙

平面形は不整橢円形を呈する。最大長90cm、最大幅76cm、深さ31cmを測る。遺物は土師器片が出土した。

32号土壙（第37図）

南側を擾乱によって消失する。平面形は長椭円形を呈する。現存長98cm、最大幅74cm、深さ21cmを測る。内部の柱穴は土壙を切っている。覆土は黒褐色を呈する。遺物は出土していない。

33号土壙（第37図）

16号・26号土壙に切られる。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。現存長116cm、幅82cm、深さ22cmを測る。遺物は細片である。

35号土壙（第37図、図版29）

西側の境界地にある。平面形は橢円形を呈するものと思われる。断面形は舟底状を呈する。現存長228cm、幅84cm、深さ41cmを測る。遺物は須恵質の甕が出土した。

36号土壙（第38図）

西側が境界地に存在する。35号土壙に切られる。平面形は隅丸長方形であるが、断面形は播鉢状を呈する。長さ150cm、幅83cm、深さ55cmを測る。遺物は細片のため時期は不明である。

37号土壙（製鉄跡）（第38図、図版30）

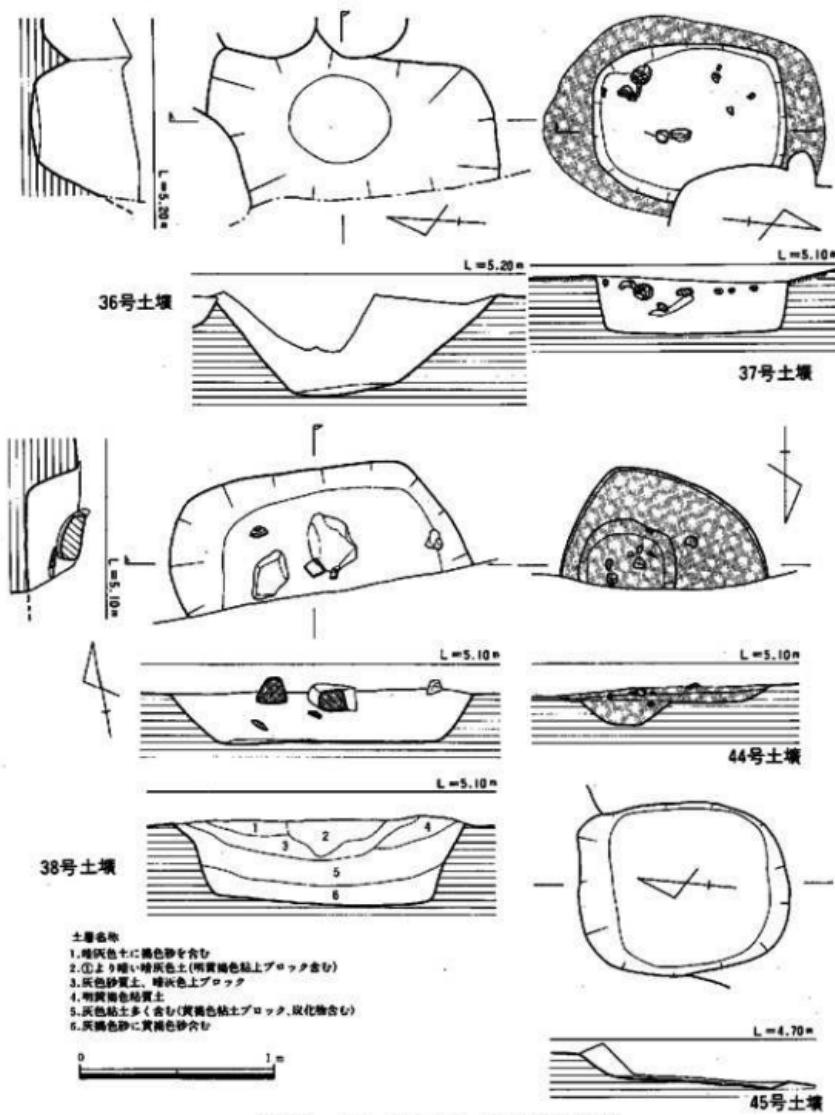
東側を擾乱層によって消失している。平面形は隅丸長方形を、断面形は逆梯形を呈している。長さ100cm、幅83cm、深さ29cmを測る。土壙上面には、粘土塊を含んだ焼土層が覆い、下層には焼土層が存在する。又、土壙周辺は幅20~50cmにわたって焼けている。遺物は甕羽口2点、土師器糸切り底の坏、瓦器碗、滑石片、鐵滓が出土している。

38号土壙（第38図、図版31）

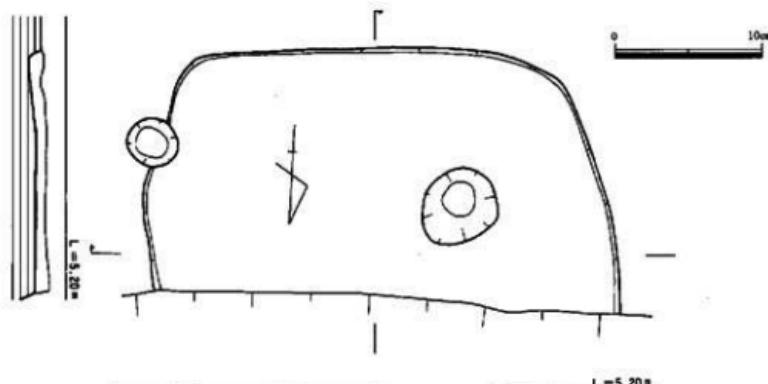
南側半分をトレンチによって損失している。平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。現存長158cm、幅81cm、深さ29cmを測る。覆土は5層に分れる。暗灰色粘砂質土を主体として、黄褐色粘土ブロックを含む粘土層で構成されるが、最下層は炭化物が多く含んだ層が約9cmの厚さで堆積している。第1層、すなわち土壙上面には長さ42~45cm、厚さ16~20cmの角礫が2個存在するが、この角礫は火を受け表面が黒変している。遺物は各層から出土する。土師器糸切り底の皿、坏片、白磁皿、青磁皿、硯がある。硯は第3層・暗灰色粘土ブロックを含む灰色砂質土より出土している。

39号土壙（第39図、図版32）

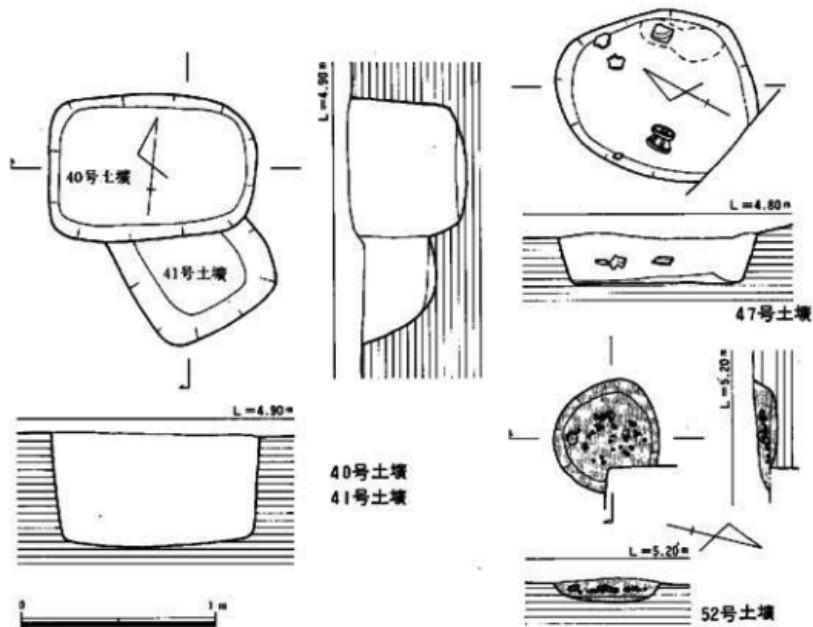
北側半分をトレンチによって損失している。不整隅丸長方形を呈し、現存長215cm、幅113cm、深さ6cmを測る。全体に黄褐色粘土が分布しており、特に東半分には充填した状態で検出した。粘土は縮っており、タタキ状の床面と考えられる。西側のpitは土壙に伴い、深さ38cmを測る。遺物は多量に出土し、土師器糸切り底皿、坏、白磁小碗、土鍤などがある。



第38図 36号-38号-44号-45号土壤 (縮尺1/6)



39号土壤



第39図 39号・41号・47号・52号 土壌 (縮尺 1/20, 1/20)

40号土壙（第39図、図版32）

平面形は隅丸長方形を呈し、底面は浅いレンズ状である。長さ107cm、幅77cm、深さ60cmを測る。遺物は土師器皿、坏片がある。

43号土壙

東側を擾乱壙にて損失している。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。長さ113cm、現存幅88cm、深さ17cmを測る。遺物は土師器皿片、坏片がある。

44号土壙（製鉄遺構）（第38図、図版32）

北側をトレンチにて損失している。平面形は不整円形を呈し、上面には焼土面が広がっている。長径109cm、現存短径66cm、深さ5cmを測る。覆土は暗灰色砂層である。この土壙の東寄りに径76cm、深さ26cmを測るpitが存在する。このpitには焼土、焼壁、炭化物と共にスラッグが多量に出土した。

45号土壙（第38図、図版33）

3号住居跡を切っており、平面形は隅丸長方形を、断面形は浅いレンズ状を呈している。長さ110cm、幅92cm、深さ24cmを測る。覆土は黒灰色砂質土である。遺物は敲打具と思われる石製品が1点出土している。

46号土壙（図版33）

2号溝の西側底面にて検出した。平面形は隅丸長方形を、断面形は摺鉢状を呈する。長さ103cm、幅65cm、深さ44cmを測る。遺物は土師器片、須恵器片、土錘片がある。古墳時代の土壙である。

47号土壙（第39図、図版33）

44号土壙の下位より検出した。平面形は不整橢円形を、断面形は逆梯形を呈している。覆土は黒灰色砂層である。長径104cm、短径90cm、深さ25cmを測る。遺物は土師壺片の他、須恵器の器台状土器が出土している。古墳時代前期の所産である。

52号土壙（製鉄遺構）（第39図、図版34）

3号土壙によって東側を切られている。直徑55~60cm、深さ15cmを測る。断面形は緩い深皿状を呈している。覆土は黒褐色を呈し、上層には鉄滓が多量に含まれており、焼土、焼壁片も出土した。

（3）溝

5条検出したが、この内1号・2号・4号・5号溝は中世の所産であり、上面の遺構面で検出した。3号溝は弥生時代の溝である。3号溝と1号溝の一部下層部分は結果的に方形周溝状に接続することが判明したため別項で述べたい。

1号溝（図版35）

溝の全長2.7m、幅40cmの小規模な溝である。2号溝を切っており、主軸方向は同一である。

第6表 第9次調査土城一覧表

(単位: cm)

番号	平面形	断面形	規 模		方 位	時 期	備 考
			長さ	幅			
1	長 方 形	浅いレンズ状	(265) × 147 × 38	N86°E	近世	東側をトレントで切られる	
2	不整隅丸方形	浅いレンズ状	170 × 165 × 29	N49°E	中世	4号5号土城を切る	
3	方 形	長 方 形	160 × 126 × 40	N6°30'W	近世	52号土城を切る。近世帯	
4	隅丸長方形		(84) × 80 × 34	N41°W	中世	2号土城に切られる	
5	隅丸長方形	舟底形	140 × 89 × 36	N32°W	中世	2号土城に切られる	
6	不整隅丸方形	逆梯形	57 × 48 × 40	N67°W			
7	隅丸長方形	浅いレンズ状	103 × 77 × 34	N43°E	中世	pitに切られる	
8	不整隅丸長方形	台 形 状	113 × 87 × 31	N88°E	中世	pitに切られ、26号土城を切る	
9	隅丸長方形	舟底形	66 × 59 × 30	N54°W	中世	19号土城に切られる	
10	不整隅丸長方形	台 形 状	129 × 100 × 29	N84°30'E	中世	pitに切られる	
11	円 形	レンズ状	95 × 87 × 18	N32°E	中世	13号土城を切る	
12	不整隅丸方形	逆梯形	86 × 84 × 14	N15°W	中世		
13	隅丸長方形	逆梯形	94 × 52 × 12	N59°30'E	中世	11号土城に切られる	
14	隅丸長方形	レンズ状	93 × 62 × 36	N88°W	中世		
15	不整隅丸方形	逆梯形	59 × 55 × 25	N34°30'E	中世		
16	不整隅丸方形	逆梯形	103 × 68 × 25	N4°W	古代	南側を機械により破壊されている	
17	不整隅丸方形	舟底形	(69) × 63 × 21	N16°30'W	中世	南側をpitに切られる	
18	不整隅丸長方形	浅いレンズ状	118 × 61 × 26	N42°W	古代～中世		
19	不整梯円形	舟底形	(141) × 81 × 38	N25°W	中世	南側をトレントで切られる	
20	隅丸長方形	逆梯形	96 × 50 × 52	N38°E	中世	20号土城を切る	
21	隅丸長方形	逆梯形	221 × 74 × 39	N4°W	古墳	21号土城、20号土城に切られる	
22	隅丸長方形	複合形	(86) × 74 × 10	N51°E	中世	西側にpitを有する。1号土城に切られる	
23	複円形	逆梯形	89 × 71 × 31	N31°30'E		東側をpitに切られる	
24	隅丸長方形	逆梯形	83 × 78 × 24	N46°30'E	中世	北側は調査区外	
25	不 明		(202) × (55) × 31	N4°W	苏生	西側は調査区外	
26	不整隅丸長方形	舟底形	210 × 149 × 22	N2°W	中世	8号土城、pitに切られる	
27	隅丸長方形	レンズ状	98 × 71	N60°30'E	古代	柱穴の掘り方? 中央にpitあり	
28	隅丸長方形	台 形	(101) × 61 × 24	N12°W		南側を機械で破壊される	
29		レンズ状	(82) × 42 × 23	N36°E	中世	南側を機械で破壊される	
30	複円形	舟底形	(49) × 47 × 36	N87°E	中世	西側をpitに切られる	
31	不整梯円形	舟底形	90 × 76 × 31	N64°30'E	中世		
32	長 橋 円 形	レンズ状	(96) × 74 × 21	N4°W	古墳	10号土城、pitに切られる	
33	隅丸長方形	逆梯形	(116) × 82 × 22	N87°E	古代	16号・26号土城に切られる	
34	不 明	レンズ状	(66) × 8	N 5°30'W	中世	南側は調査区外	
35	複円形	舟底形	(228) × (84) × 41	N4°W		西側は調査区外。D35に切られる	
36	隅丸長方形	複合形	150 × (83) × 55	N4°30'W		西側は調査区外。D35に切られる	
37	隅丸長方形	逆梯形	100 × 83 × 29	N7°W	中世	北側を機械により破壊される、製鉄跡	
38	不整隅丸長方形	逆梯形	158 × (81) × 29	N80°W	中世	南側をトレントで破壊される	
39	不整隅丸長方形	レンズ状	(215) × 113 × 6	N87°E	中世	北側をトレントで破壊される	
40	隅丸長方形	浅いレンズ状	107 × 77 × 60	N83°E	中世	41号土城を切る	
41	隅丸長方形	U字状	(73) × 63 × 36	N36°W	中世	40号土城に切られる	
42	不整円形	台 形 状	109 × 56	N87°30'W		南側をトレントで破壊される	
43	隅丸長方形	台 形 状	113 × (88) × 17	N85°E	中世	東側をトレントで破壊される	
44	不整円形	レンズ状	109 × 66 × 5	N90°E	中世	製鉄跡。北側をトレントで破壊される	
45	隅丸長方形	浅いレンズ状	110 × 92 × 24	N 6°30'W		3号住居跡を切っている	
46	隅丸長方形	複合形	103 × 65 × 44	N 4°30'W	古墳	2号住居跡に切られる	
47	不整梯円形	逆梯形	104 × 90 × 25	N29°W	古墳		
48	不整隅丸長方形	台 形	67 × 57 × 40	N66°W			
49	複円形	台 形	68 × 55 × 35	N72°W			
50	不整円形	レンズ状	76 × 52 × 13	N 3°30'W		pitに切られる。D39を切る	
51	複円形	方 形 状	(107) × (46) × 18	N83°30'E		南側は調査区外。pitに切られる	
52	不整円形	深溝状	57.5 × 15	N14°W	中世	D 3に切られる。製鉄跡	

覆土は第1層-暗黄灰色砂質土で、粘土を含んでいる。第2層-暗灰色砂質土と茶褐色砂質土との混合土である。雨落ち溝等の機能をもつと思われるが確証は無い。遺物は須恵器壺蓋、青磁碗、土師器皿片などが出土している。

2号溝（第40図、図版35）

調査区北側の道路に平行した東西方向の溝である。方位はN 98° 30' Wで、溝の北側肩は道路のため不明。現存の溝幅約2m、深さ18cmを測る。覆土は暗茶褐色砂層と淡茶褐色砂層で構成される。2号溝下層には3号溝へ接続する溝が存在する。遺物は須恵器の蓋、甌、土師器糸切り底の皿、同安窯青磁皿、陶器鉢などが出土している。

4号溝（第40図）

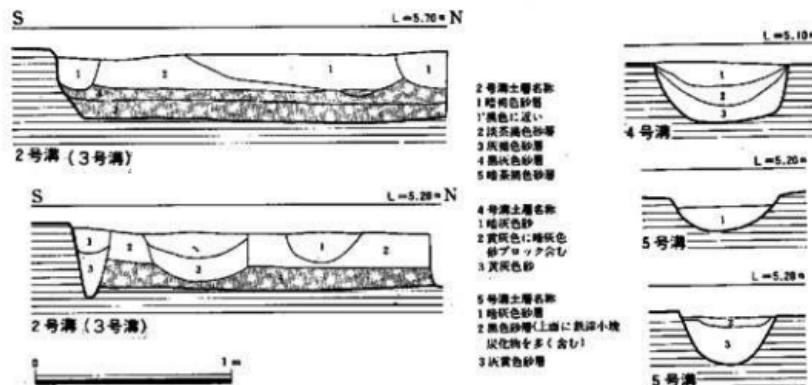
調査区の西側に位置し、3号溝の西に沿う。南北方向の溝で北側は土壤群と切合うため不明。覆土は暗茶褐色砂質土である。溝の現存長は6.3m、幅60~75cm、深さ約33cmを測る。遺物は土師皿、壺が出土している。いずれも糸切り底である。

5号溝（第40図）

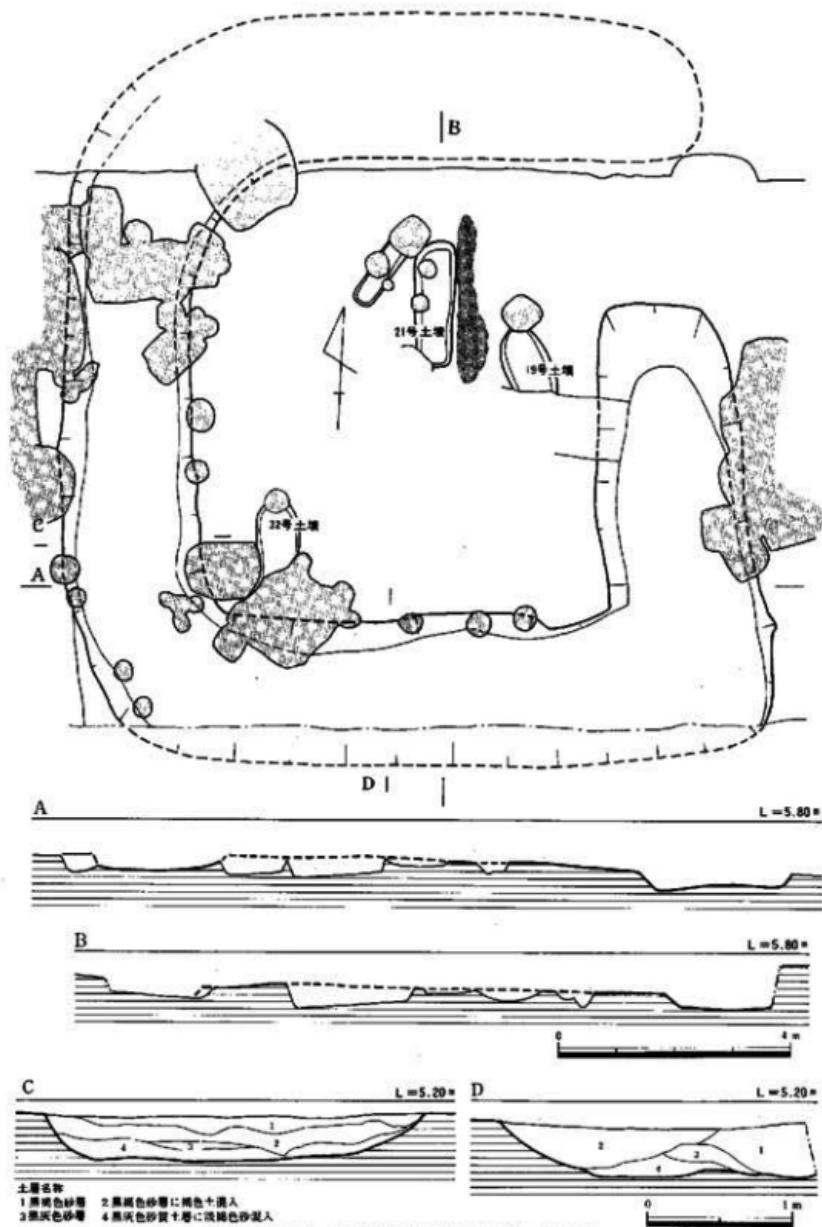
調査区の東側に検出した。4号溝同様に南北方向の溝である。溝の南方向、北方向は遺構の切合いが著しいため確認し得なかった。現存長2.5m、幅50~70cm、深さ約18cmを測る。覆土は暗灰色砂質土である。遺物は土師器糸切り底の皿、壺が出土している。

（4）方形周溝遺構（第41図、図版35）

遺構は下層の遺構面に存在するが、長軸方向を磁北方向に置いて、調査区内にすっぽりに入る状態で出現した。調査区の西側では中世の整地層が削平を受けていたため、南北方向部分は早



第40図 2号・4号・5号溝土層図（縮尺3%）



第41図 方形周溝造構造圖 (縮尺1/50, 1/50)

くから把握できていたが東側、及び北側では土壌や溝、住居跡と切合うため溝の検出に手間だった。特に2号溝と重複する部分では、3号溝の肩や溝の先端部を検出することができなかつた。この部分は2号溝の発掘の際に掘りすぎている。東側先端部については床面の深さを検討すると、丁度、2号溝の東側底面が西側に対して急に浅くなる。この部分は南側から矩形に曲った溝の先端と同位置にあるため周溝の終末部分と推定した。周溝は方形に巡るもので、東西の外形の長さは約12mを測る。周溝に囲繞された方形区画部分（台状部と呼称する）は隅丸方形形状を呈し、東西方向の長さ約7m、南北方向の長さは推定で約8mを測る。溝幅は西側で約2.3m、東側で2.4mを測る。溝の断面は東側、西側ともにレンズ状を呈しているが、南側では切合いのため、歪みがある。深さは西側で約35cm、北側で約35cm、南側約36cmを測り、東側の覆土は上層より黒褐色砂層、黄灰色砂層（黒色土混入）、灰褐色砂層、黄灰色砂層（淡褐色砂混入）の順である。南側、東側の覆土は上層面の整地層である暗茶褐色砂質土の汚染が強く、黒色砂質土と混合した状態を呈している。台状部にはpitや土壙が検出できる。この内、21号土壙、及び32号土壙は遺物の出土はないが、南北方向に主軸をとり、台状部の主軸方向とほぼ一致する。21号土壙は土壙墓として考えられるところから台状部に伴う遺構である蓋然性が高い。又、周溝の切れた部分（陸橋部）は東北隅に位置し、幅は約2.2mを測る。砂地のため遺構の切合は判然としない場合が多く、特に小pitは確認し難いため遺物は弥生時代中期末～中世までの範囲で出土する。古墳時代～中世の遺物は少くない。これらは溝に重複したpitの遺物や、上層の整地面より掘り込まれた遺構による混入物と思われる。弥生時代の土器はいずれも變形土器であるが、溝西側部分に集中しており、下層から底部にかけて出土した。出土状態は完形品としてのまとまりではなく、破碎状態である。又、底部に焼成後に穿孔した土器が4点検出できた。これらの土器は弥生時代中期末～後期初頭に位置づけられる。

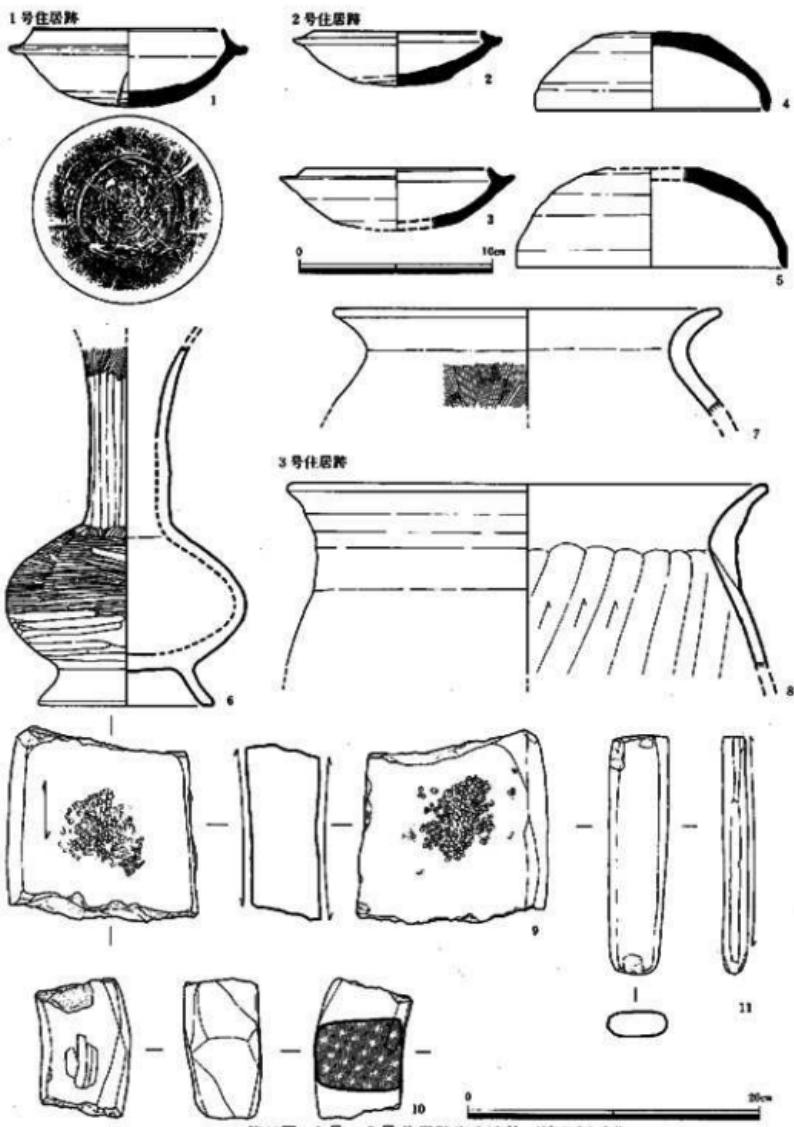
調査区の北側は村上研究所の方格描文鏡を出土した箱式石棺が存在し、更に北のバスター・ミナルの調査に際しては古墳時代初頭の三角縁神獣鏡を出土した方形周溝墓群が存在する。当該の方形周溝状遺構は主体部や土器の出土状態、或いは周溝幅が広いことなど検討を要するが、21号土壙の存在や底部穿孔土器の出土など方形周溝墓としての蓋然性は無いとは言いきれない。

3. 遺物各説

(1) 1号住居跡出土遺物(第42図、図版36)

須恵器

杯身(1) 口径10cm、器高4.1cmを測る。蓋受けはややドリ気味につまみ出す。立ち上り部は蓋受けから連続しており、先端小口は小さく水平にカットする。天井部外面は逆時計回りのヘラ削りを施す他はナデ調整である。ナデは水引きによる調整ではないため粗雑である。×字形



第42図 1号～3号住居跡出土遺物（縮尺5%, 1/4）

のヘラ記号がある。胎土に粗い砂粒を含むため、決して良質とはいえない。暗灰色を呈する。

土師器

長頸壺（6） 台付の壺で完形品である。口径9.0cm、器高18.8cm、高台径9.0cmを測る。外面は丹塗研磨を施す。口縁部はタテ方向、胴部はヨコ方向のヘラ磨きである。頸部内面は丁寧なヨコナデ調整である。胎土は精選されている。

※須恵器は形態的にIV a期に入るものの、長頸壺との共伴は考えられない。

（2）2号住居跡出土遺物（第42図、図版36）

いずれも床面より出土したもので一括資料である。

須恵器

杯身（2・3） 2の口径9cm、器高2.8cm、3の口径9.6cm、復元高2.8cmを測る。蓋受けは小さく、立ち上りは小さく内側へ内傾する。内外面ナデ調整で、2は灰色を、3は青灰色を呈する。胎土に砂粒を含む。

杯蓋（4・5） 4は口径12cm、器高4.1cm、5は口径14cm、器高5.1cmを測る。外面は体部の2/3までヘラ削りを行う。体部内面はヨコナデ、内底はナデ調整である。胎土は精良で、5には細砂粒を含む。4は灰色、5は明褐色を呈する。5は赤焼け上器である。

須恵器はいざれもⅣ期の特徴を示しており、6世紀末～7世紀初頭頃の時期と考えられる。

土師器

甕（7） 口径20cmを測る。口縁部外面はヨコナデ調整、外面はタテハケ、胴部内面はタテ方向のヘラ削りである。胎土に砂粒を含む。茶褐色を呈する。

（3）3号住居跡出土遺物（第42図）

土師器

甕（8） 口径21.8cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、体部内面はヘラ削り調整である。胎土に砂粒を含み、黒灰色を呈する。

石器

砥石（9・10） 9は長さ12cm、幅13cm、厚さ5.1cmを測る。上・下の小口は未調整である。表・裏2面を砥面として利用するが、両面とも中央部に敲打痕が集中している。細粒砂岩製である。10は長さ9.8cm、幅6.1cm、厚さ5.2cmを測る。上・下の小口は未調整である。砥面は表・裏、両側面の4面を使用する。中粒砂岩製である。

不明石器（11） 断面形は橢円形を呈し、柱状形を呈する。長さ16.6cm、幅4.1cm、厚さ2.1cmを測る。先端部は丸味を持ち、使用による敲打痕がある。端部小口は平坦である。全体に研磨を施しており、敲打具などの用途が考えられる。粘板岩製である。

(4) 1号土壌出土遺物 (第43図、図版37)

土師器

皿 (14) 口径9.2cm、器高1.0cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整、糸切り底である。黄、灰色を呈する。

杯 (12) 口径14cm、器高3cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整。糸切り底で、黄褐色を呈する。

白磁

皿 (13) 口径12.4cm、器高3cmを測る。内底見込みに沈線を施す。内底には蓮花文等の印紋がある。釉は透明釉で、灰白色を呈し、やや厚目に施す。底部外面は露胎である。

その他、鉄滓及び須恵器細片が出土している。

(5) 2号土壌出土遺物

いずれも実測は不可能であるが、糸切り底の土師皿、須恵器細片、近世陶器片が出土している。

(6) 3号土壌出土遺物

鉄釘が出土している。土器はいずれも破片のため図示し得ないが、須恵器片、土師器、高取焼を含む。その他自然遺物として、骨や貝殻がある。

(7) 6号土壌出土遺物 (第43図、図版37)

須恵器

蓋 (15) 口径11cm、器高6cmを測る。腹部の張りが強く、口縁部はやや外反気味に立ち上る。内外面ナデ調整である。胎土に石英粒子を含み、灰色を呈する。

(8) 7号土壌出土遺物 (第43図、図版37)

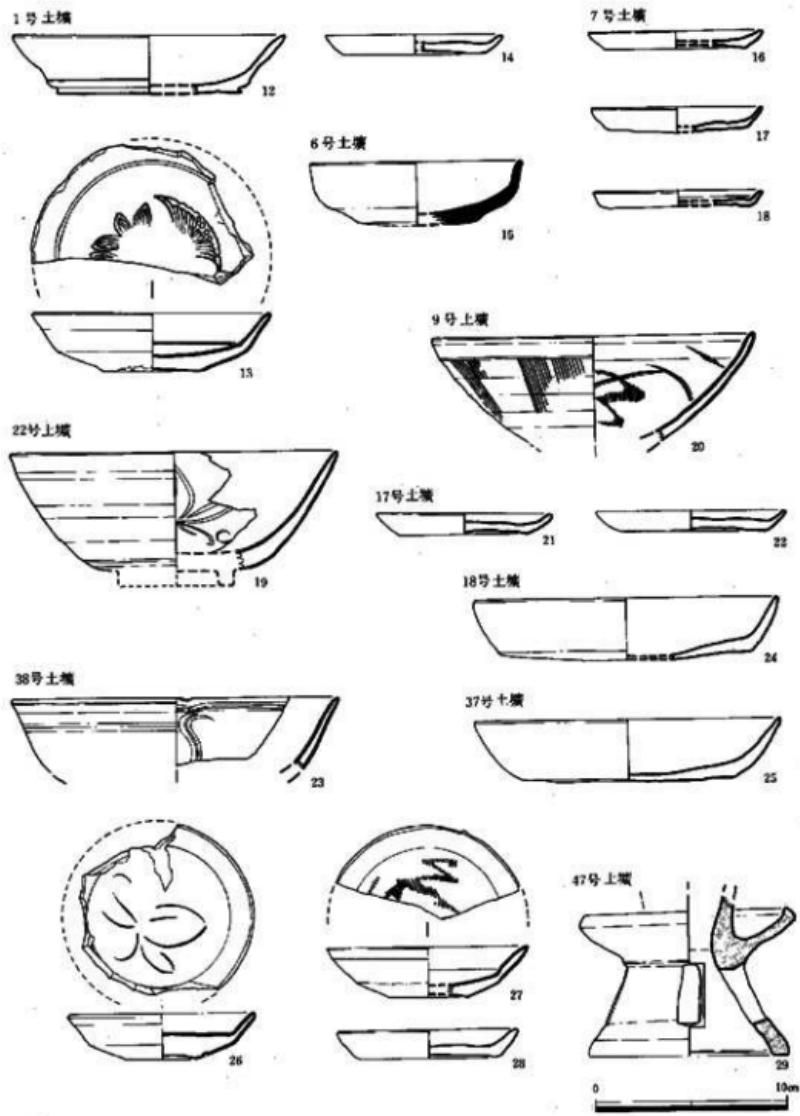
土師器

皿 (16~18) 口径8.8cm~9.0cm、器高0.8cm~1.3cm、底径7.4cm~8.2cmを測る。いづれも糸切り底である。内外面ヨコナデ、内底はナデ調整である。16・17は褐色を、18は黄褐色を呈し、胎土に雲母、長石の粒子を含む。

(9) 9号土壌出土遺物 (第43図、図版37)

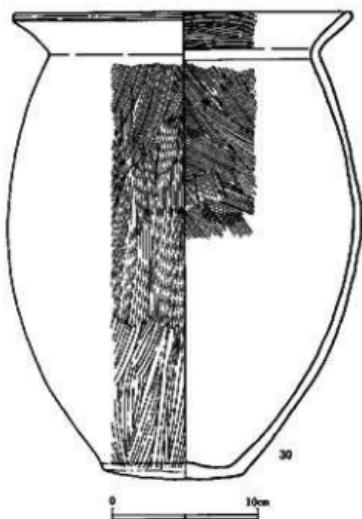
青磁

碗 (20) 同安窯系である。口径16.8cm、現存器高5.6cmを測る。外面は9本単位の櫛描き文を

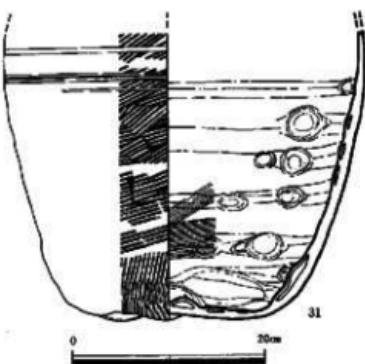


第43図 土壌出土遺物 (縮尺1/2)

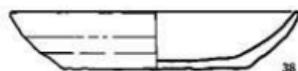
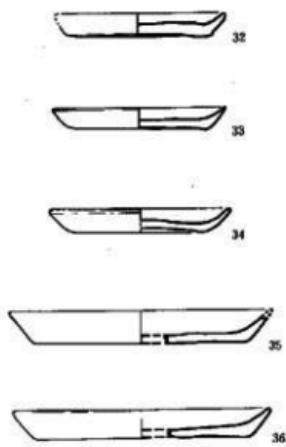
25号土瓶



35号七缸



39号土盆



第44図 25号・35号・39号土壤出土遺物 (縮尺1/3, 1/4, 1/6)

施し、体部内面は片影りの雲文と猫描き文を施す。釉は黄緑色で、体部下位は露胎である。胎土は黄灰色を呈している。

(10) 12号土壤出土遺物(第56図)

鉄器(195)

双環状の鉄製品で、外面は金メッキを施す。長さ1.9cm、幅0.7cm、環内径0.6cmを測る。

その他の遺物には、土師器、弥生土器片がある。

(11) 17号土壤出土遺物(第43図、図版37)

土師器

皿(21, 22) 口径9.2cm~9.8cm、器高1.1cm~1.2cm、底径6.8cm~7.5cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整で、21の外底には板目が残る。胎土には長石粒子と雲母粒子を含み、特に22には金雲母を含んでいる。いずれも赤褐色を呈している。

(12) 18号土壤出土遺物(第43図、図版37)

土師器

杯(24) 口径15.9cm、器高3.2cm、底径13.0cmを測る。糸切り底で、体部内外面はヨコナデ調整、胎土に少量の長石と金雲母を含む。赤褐色を呈する。

(13) 19号土壤出土遺物(第55図)

石器

砥石(187) 量大長5.9cm、厚さ1.0cmを測る。側辺は粗削り状態である。表裏の2面を砥面として利用している。頁岩製である。

その他の遺物には糸切りの土師皿、磁器片がある。

(14) 21号土壤出土遺物(第56図、図版37)

鉄器

鉄片(190, 191) 190は最大長6.0cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmを測る。191は長さ4.4cm、幅3.8cm、厚さ0.4cmを測る。長方形形状を呈し、191の両隅は丸味をもっている。鉄片はいずれも若干、反りをもつが、断面で観察する限り、片方が尖っている。刃部に相当する可能性をもつ。

その他の遺物には土師器、須恵器の細片が混入する。これらの遺物は他の遺構切合い関係上混入品であろう。

(15) 22号土壙出土遺物 (第43図)

青磁

碗 (19) 龍泉窯系の碗で、太宰府史跡分類の碗I-1aに分類される。復元口径17cm、現存高6.0cmを測る。体部内面にヘラ片彫りの雲文や花文を配している。緑灰色釉を厚目に施す。胎土は灰色である。

(16) 25号土壙出土遺物 (第44図、図版36)

土師器

甕 (30) 口径23.2cm、器高32.2cm、底径10.6cmを測る。口縁部はくの字形に外反し、端部は平坦仕上げである。胴部最大径は上位にあって、長胴化している。底部は丸味を持つが、胴部との境は明瞭である。胴部外面はタテハケ、下位はヘラナデを施す。口縁部内外面はヨコナデ調整である。胎土は精良で、暗茶褐色を呈する。外面全体に煤が付着する。弥生時代終末の土器と考えられる。

その他にはこの土壙からの出土遺物は無い。

(17) 35号土壙出土遺物 (第44図、図版36)

陶質土器

甕 (31) 脇部上位を欠いている。現存高30cm、最大胴径37.5cmを測る。外面は平行タタキを施した後、部分的に水平なナデ消しを施す。胴部最大径位置に沈線を巡す。内面はヨコナデ調整である。火彫れが著しく、器形が歪んでいる。底部は丸底で、中凹みしている。胎土には砂粒を含む。青灰色を呈している。軟質で、須恵質の甕である。

(18) 37号土壙出土遺物 (第43図、図版37)

土師器

杯 (25) 口径16.0cm、器高3.2cm、底径11.0cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整。糸切り底で、板目压痕がある。胎土には雲母、長石、石英粒子を含む。明赤褐色を呈する。

(19) 38号土壙出土遺物 (第43、55図、図版37)

青磁

皿 (26, 27) 口径9.8cm、器高2.4cmを測る。龍泉窯系の皿である。内底見込みに圓線を施し、内底にはヘラ描きの花文を施す。釉はやや厚目で、緑灰色を呈し、外面下位は露胎である。胎土は灰色を呈する。27は口径10.4cm、器高2.6cm、を測る。同安窯系である。内底見込みに圓線を巡ら

し、内底に猫描き文を施す。釉は淡緑色で、薄目である。体部外面の腰部より下位は露胎である。
碗 (23) 龍泉窯系である。太宰府史跡分類の碗 I - 4bに分類される。口径16.9cmを測る。口縁部内側にヘラによる、擦線を巡らす。又、タテ方向の区画線を設ける。口縁部は刻みを入れ、輪花としている。釉は緑灰色である。

土師器

皿 (28) 糸切り底である。口径9.4cm、器高1.5cm、底径7.4cmを測る。体部内外面はヨコナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

石製品

硯 (189) 現存長11.3cm、幅7.5~7.8cm、高さ1.9cmを測る。長方形硯である。小豆色を呈する軟質の石材である。縁部幅は0.6~0.7cm、高さ0.2cmを測るが、後部には設けられない。裏面は上げ底に削り取っている。凝灰岩と思われる。

その他、糸切り底の土師片が多数出土している。

(20) 39号土壙出土遺物 (第44図、図版37)

土師器

皿 (32~34) 口径8.8~9.4cm、器高1.1~1.3cm、底径6.7~7.6cmを測る。いずれも糸切り底で、口縁部内外面はヨコナデ調整。胎土は精良で、32・33には雲母、長石粒子を含む。32・33は黄灰色を、34は黄褐色を呈している。

杯 (35~39) 器高の浅い杯と深い杯の二種ある。A類 (35, 36) は口径13.3cm、器高1.5cm、底径11.0cmを測る。体部は丸味を持たない。底部は糸切りである。体部は摩滅している。胎土は精良で雲母と長石粒子を含む。35は黄灰色、36は黄褐色を呈する。B類 (37~39) は体部が内湾し、口径と底径比の大きなもの (38・39) と、口縁部が外反する37がある。38・39は口径15.0~15.2cm、器高2.8cm、底径9.6cmを測る。37は口径15.6cm、器高2.3cm、底径11.8cmを測る。いずれも摩滅のため調整不明。36は糸切り底である。38はヘラ切り底で、外底に板目圧痕がある。胎土は精良で、37には細砂粒を、39には長石等を含む。38・39は黄褐色を、37は灰褐色を呈する。

陶磁器

天目碗 (40) 土壙の粘土層より出土。口径6.3cm、器高3.1cm、高台径3.2cmを測る。釉は黒色を呈し、体部下位まで厚目に施す。高台及び、体部下位は露胎である。胎土は淡褐色を呈している。

(21) 45号土壙出土遺物 (第55図、図版37)

石器

敲打具 (188) 最大長15.6cm、最大幅5.9cm、厚さ4.2cmを測る。平面形は長楕円形を呈してい

る。自然石を転用したもので、両側辺と両面平坦部に敲打痕が残っている。又、左側辺と表面の一部には削り込んだ傷痕がある。玄武岩製である。

(22) 1号溝出土遺物 (第45図)

須恵器

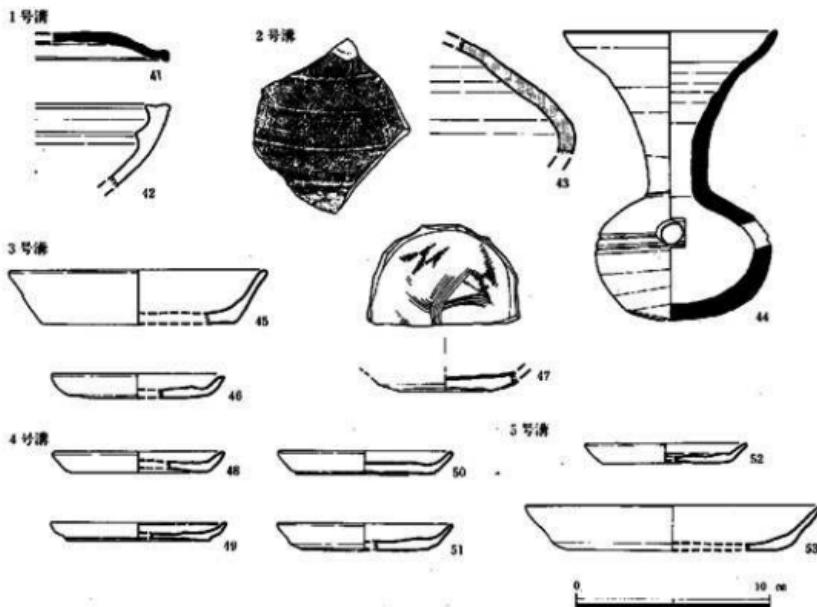
蓋 (41) 破片のため復元は不可能である。器高は低く、端部は平坦に仕上げ、内面には端部を小さくつまみ出している。胎土は精良で、灰色を呈している。

陶器

鉢 (42) 中国輸入陶器片である。体部は丸味を持ち、口縁部の内側に二重の断面三角形突帯を有している。内外面ヨコナデ調整で、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。褐色を呈している。

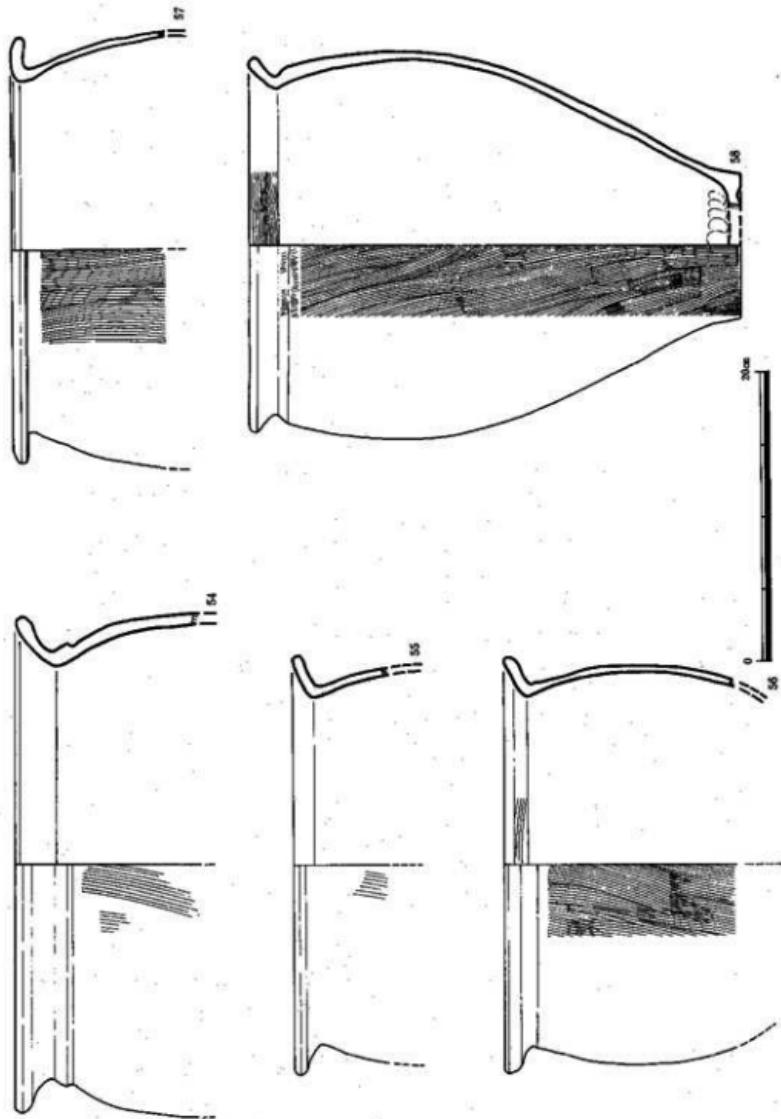
(23) 2号溝出土遺物 (第45図、図版38)

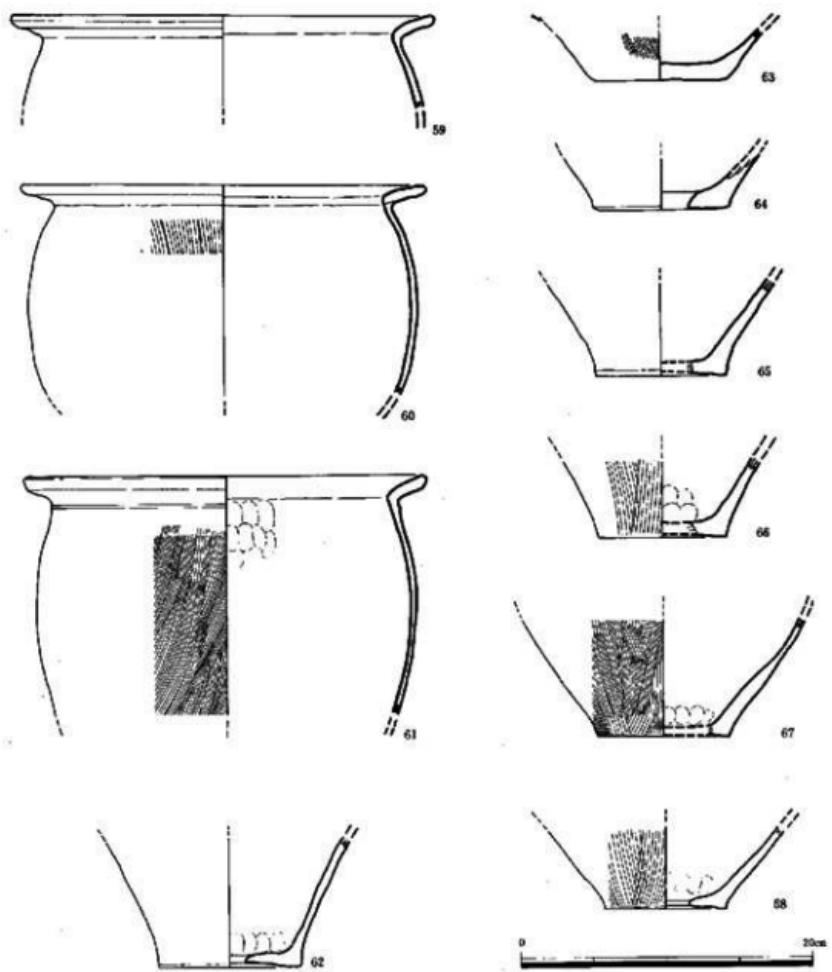
遺構各説で述べた通り、3号溝の上部に重複して作られているため、完全な分離ができないなか



第45図 1号～5号溝出土遺物 (縮尺1/2)

第46圖 方形筒樣遺構出土遺物 (縮尺 $\frac{1}{2}$)





第47図 方形周構造構出土遺物 (縮尺3/4)

った。そのため出土遺物に混入があることは否めない。時期は弥生時代～中世に亘っている。但し、溝の規模に比して遺物は少くない。

陶質土器 (第45図)

(43) 壺の肩部と思われる。器壁は0.6~0.8cmの厚さであるが、焼成は軟質である。胎土は良好で、灰青色を呈する。肩部には上から櫛描き列点文、沈線、波状文、列点文、沈線の順に施文する。波状文は10~12条である。内外面の調整はヨコナデである。

須恵器

壺 (44) 完形品である。口径11cm、器高15cm、最大胴径9.2cmを測る。頸部は細く縮り、体部は球形を呈す。口縁部は内凹気味に開いている。胴部の肩には一条の沈線を施す。肩部には穿孔を施し、径1.4cmを測る。体部の下位から底部にかけてヘラ削りを施す。他はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を少し含み、灰褐色を呈する。焼成が甘い。

土師器（3号溝）

皿 (46) 口径9.0cm、器高1.3cmを測る。糸切り底で、体部内外面はヨコナデ調整である。胎土は精良で、雲母粒子を含む。黄褐色を呈する。

杯 (45) 口径13.5cm、器高2.8cm、底径10.0cmを測る。糸切り底で、体部の立ち上りは強い。体部内外面はヨコナデ調整である。胎土に雲母、長石を含む黄褐色を呈する。

青磁（3号溝）

皿 (47) 底径4.7cmを測る。同安窯系で、円底にはヘラ描きの雲文と猫描文を施す。胎は緑灰色で、外面は露胎である。

（24）4号溝出土遺物（第45図、図版38）

土師器

皿 (48~51) 口径8.8~9.0cm、器高0.9~1.4cm、底径7.2cm~7.4cmを測る。糸切り底で、体部内外面はヨコナデ調整。48・49・51の外底部には板目圧痕がある。胎土に雲母及び長石粒子を含む。48は褐色、49は黄褐色、50は赤褐色、51は茶褐色を呈する。

（25）5号溝出土遺物（第45図）

土師器

皿 (52) 口径8.4cm、器高1.0cm、底径6.6cmを測る。糸切り底である。体部内外面はヨコナデ調整。胎土は精良である。

杯 (53) 復元口径15.2cm、器高2.3cm、底径11.0cmを測る。外面は摩滅し、内面に煤が付着している。胎土は精良で、茶褐色を呈している。

（26）方形周溝遺構出土遺物（第46、47図、図版38）

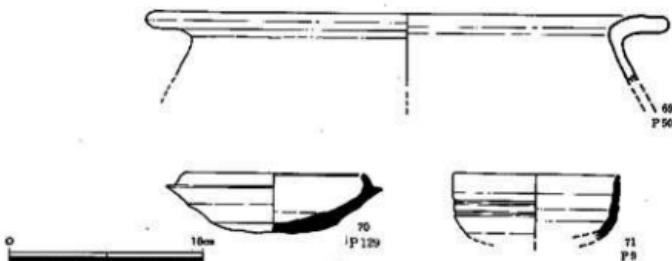
先述したようにこの構は調査区全体にすっぽり入っており、又、上部遺構の重複も著しいため古墳時代～中世までの遺物の混入が認められる。いずれも細片で器形復元できるものは無く、

絶対量は弥生時式土器に比べて少くない。

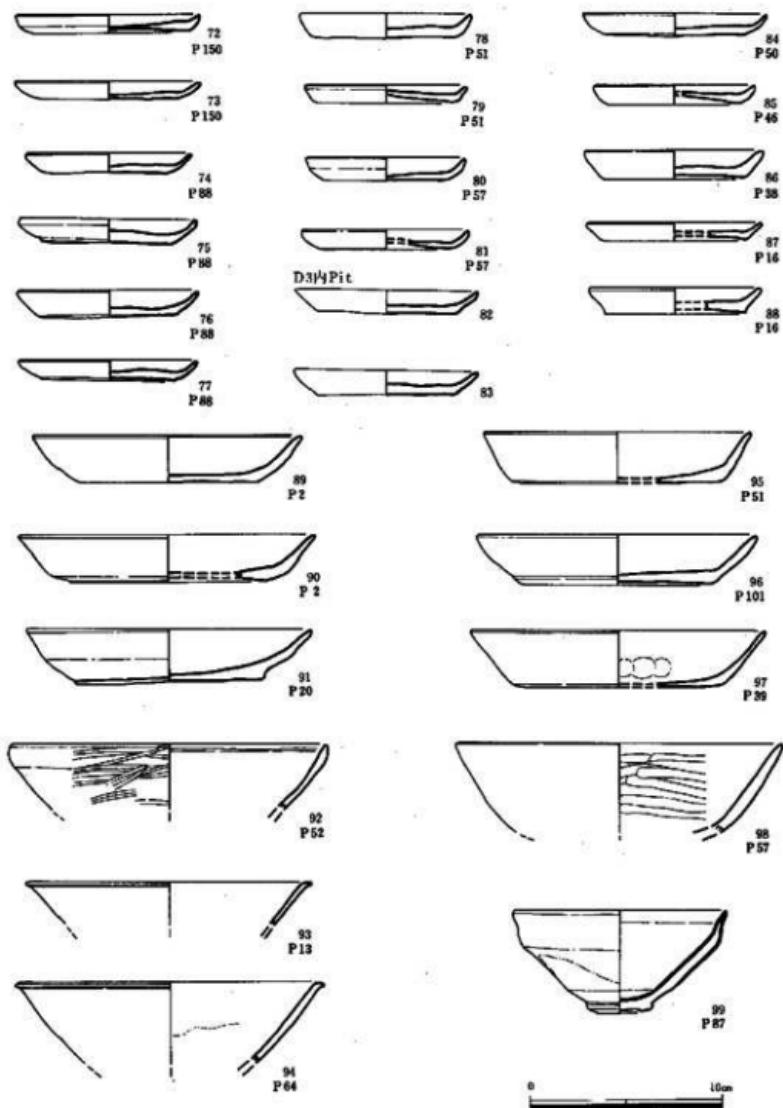
弥生式土器

甕 (54~68) いすれも變形土器ばかりである。54~61は口縁部である。大小の2種があって、小 (55~61) は口径27.6~29.6cmを測る。55~58・59~61の口縁部はくの字形に外反し、端部は丸味をもっている。頸部内面に稜を有している。56・59~61の胴部は最大径が上位にあって、球形に近い張りを示している。57の口縁部はL字形を呈している。外面はいすれもタテ方向のハケで、底部迄の途中に息つきをもっている。58の口縁部内面はヨコハケ調整。他の甕はヨコナデ調整を施す。58は底部の一部を欠くが、口径26cm、器高34.2cm、最大胴径26.8cmを測る。口縁部はくの字形を呈し、立ち上りは強い。外面の頸部下には接合部の軽い穂が認められる。胴部の張りは強い。底部は平底である。内面はナデ調整を施す。胴部外面はタテハケを施すが、底部までの間に數度の息つきを行う。口縁内面はヨコハケ調整である。大 (54) は口径34.4cmを測る。口縁部はくの字形に外反し、立ち上りは強い。頸部外面に三角突帯を貼り付け、内面には稜を有している。外面はタテハケ調整である。底部は62~68まである。体部の立ち上りが強く外反気味のもの (65, 66, 68) と、立ち上りが弱く、丸味をもつもの (62, 63, 64, 67) がある。立ち上りの強い65・66・68は胴部の張りが弱い体部に接続し、立ち上りの弱い底部 (63, 64, 65, 66) は胴部が球形をなす器形に接続するものと思われる。これらの底部の内、64・65・62・68は焼成後の底部穿孔を行っている。63・66・67・62の外面にはタテハケ調整が認められる。變形土器はいすれも胎土に雲母や長石粒子を含む。焼成は良好で、59は赤褐色、62・63は黄褐色、64は暗褐色、65・66は茶褐色を呈している。

これらの土器は底部の立ち上りの状態から外弯して立ち上るタイプと、やや丸味をもつタイプの2つがあるが、その中間的な形態をもつものもあることや口縁部の形状よりして大きな時期差はないものと考えたい。弥生時代中期末から後期初頭の土器群であろう。



第48図 Pit出土遺物 (縮尺5)



第49図 Pit出土遺物(縮尺3%)

(27) Pit 出土遺物 (第48図、図版38)

Pit には土壤状の大きさを持つもの、柱穴と考えられるものなど多種あるが、特に土師器皿、坏などは主柱の頸め具として埋納されたものが多い。本来、Pit 每の説明を行うべきであるが煩雑になるので、時期、器形毎に一括して行い、出土地点についてはその都度、文頭に記入する。又、挿図の中にも註記しているので参照されたい。

弥生式土器

甕 (69) P50出土。口径27cmを測る。口縁部はL字形に強く外反し、端部は丸味を持つ。内外面はヨコナデ調整。胎土に長石、石英粒子を含み、茶褐色を呈している。

このP50からは糸切りの土師皿が出土している。

須恵器

坏身 (70) P129出土。口径9.2cm、器高3.1cmを測る。蓋受けは小さく、立ち上り部は内傾する。外面天井部はヘラケズリを施す。胎土に砂粒を含む。青灰色を呈している。

壺 (71) P9出土。復元口径8.6cm、器高3.4cmを測る。底部は丸味を持ち、体部はやや外反する。体部と口縁部との境には2条の沈線を施す。内外面ヨコナデ調整。胎土は精良で、黒褐色を呈する。

土師器

皿 (72~88) 72・73はP150、74~77はP88、78、79はP51(坏95が伴う)、80・81はP57、82・83はD3内Pit、84はP50、85はP46、86はP38、87・88はP16出土である。

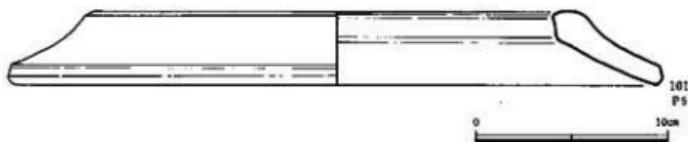
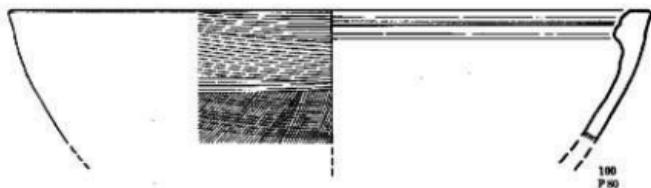
底盤はいずれも糸切り底である。三種ある。A類 (72、73) は口径9.6~9.8cm、器高0.9cm、底径7.6~8.0cm、B類 (36、37、78) は口径9.6cm、器高1.2~1.3cm、底径7.1~7.3cm、C類は口径8.6~9.3cm、器高1.0~1.5cm、底径は6.8~7.4cm、平均値は口径9.0cm、器高1.2cm、底径7.3cmを測る。A類は口径と底径の比が小さく、B類は両者の比が大きく、A類に比べ器高が高くなる。C類はB類に比べ口径が小さく、口径と底径の比も2cm未満であるが、83・84・93・95のような器高の高い一群も目立つ。一括土器では無いので、器種変化を追うことは困難であるが、A類を除いて同時性を示すものと思われる。いずれも体部内外面はヨコナデ調整である。80・86・90・91・92は黄灰色、81・82・88は褐色、83・94は黄褐色、36・37・89は赤褐色、85は茶褐色、95は明褐色を呈する。

坏 (89~91、95~97) 89・90はP2、91はP20、95はP51、96はP101、97はP39出土である。全て糸切り底で、体部外面はヨコナデ、内底はナデ調整である。口径は14.1~15.6cm、器高2.5~3.1cm、底径9.4~11.2cmを測る。底径と口径の比が4.5~5.0cmを測るが、95は両者比が2.9cmで小さい。ほぼ同時期の所産である。

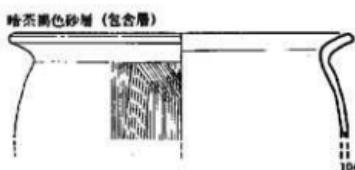
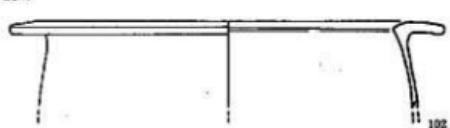
瓦器

碗 (92、98) 92は口径16.6cm、98は口径14cmを測る。92の外面は粗いヘラミガキを施す。98は内面ヘラミガキを施す。胎土は精良で、92の外面は黒灰色、内面は灰白色を、98の口縁部周

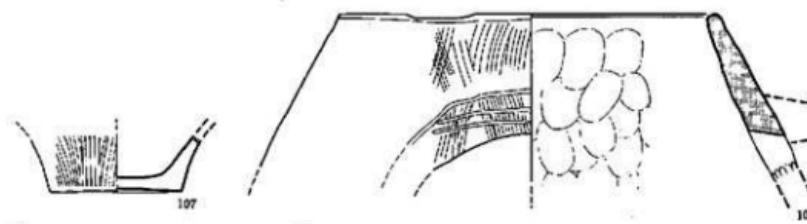
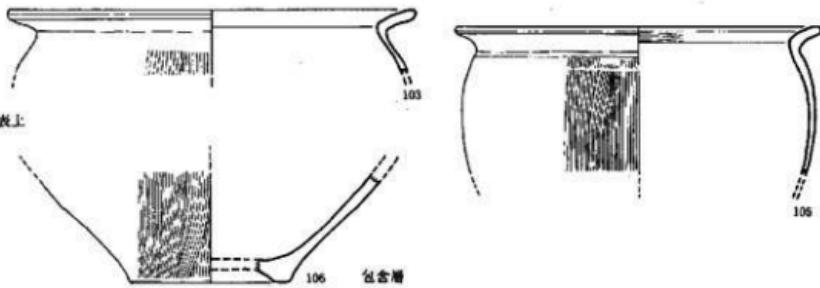
Pit



横孔



表上



第50図 Pit及び、包含層出土遺物(縮尺1/6, 1/4)

辺は黒灰色、他は黄灰色である。

白磁

碗 (93, 94) 93はP13, 94はP64出土。端反りの碗で、口径は93が14.0cm, 94が16.2cmである。釉はやや緑味を帯びた灰白色で、内外面に気泡がある。94は貫入がある。94の釉は厚目である。

陶器

天目碗 (99) P87出土。口径11.1cm, 器高5.3cm, 高台径3.4cmを測る。体部は鉢状に開くもので、口縁部は小さく外反する。釉は黒褐色で、一部茶褐色を呈し、外面上位まで施される。底部、及び体部下位は露胎である。胎土は淡褐色を呈する。

鉢 (100) P80出土。口径33.4cmを測る。口縁部の内側にM字形の突帯を施す。外面はタテ、ヨコ方向のハケ調整。砂粒を含み、黒灰色を呈する。

土師質土器

器台 (101) P5出土。口径26cm, 底径34cm, 器高3.8cmを測る。内外面ヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み、黄褐色を呈する。

(28) 表土及び包含層出土遺物 (第51~56図、図版39, 40)

この項に入れた遺物は表土、攪乱塊、遺構面上、及び整地層撤去の際に出土したもので、所属を明確にできない。但し、包含層の遺物は全て中世の整地層及び、整地層より掘り込まれた遺構出土品と考えられ、包含層の年代観を与えてくれる。

弥生式土器

甌 (102~107) 102・103は攪乱塊、106・107は表土上、104・105は暗茶褐色砂層（包含層）出土である。102は口径30cmを測り、L字形口縁である。外面は丹塗りを施す。103・104・105はL字形口縁を有し、104・105の口縁部の立ち上りは強い。外面はタテハケを施す。胎土は102が褐色、103が灰褐色、104が赤褐色、105が黄褐色を呈する。

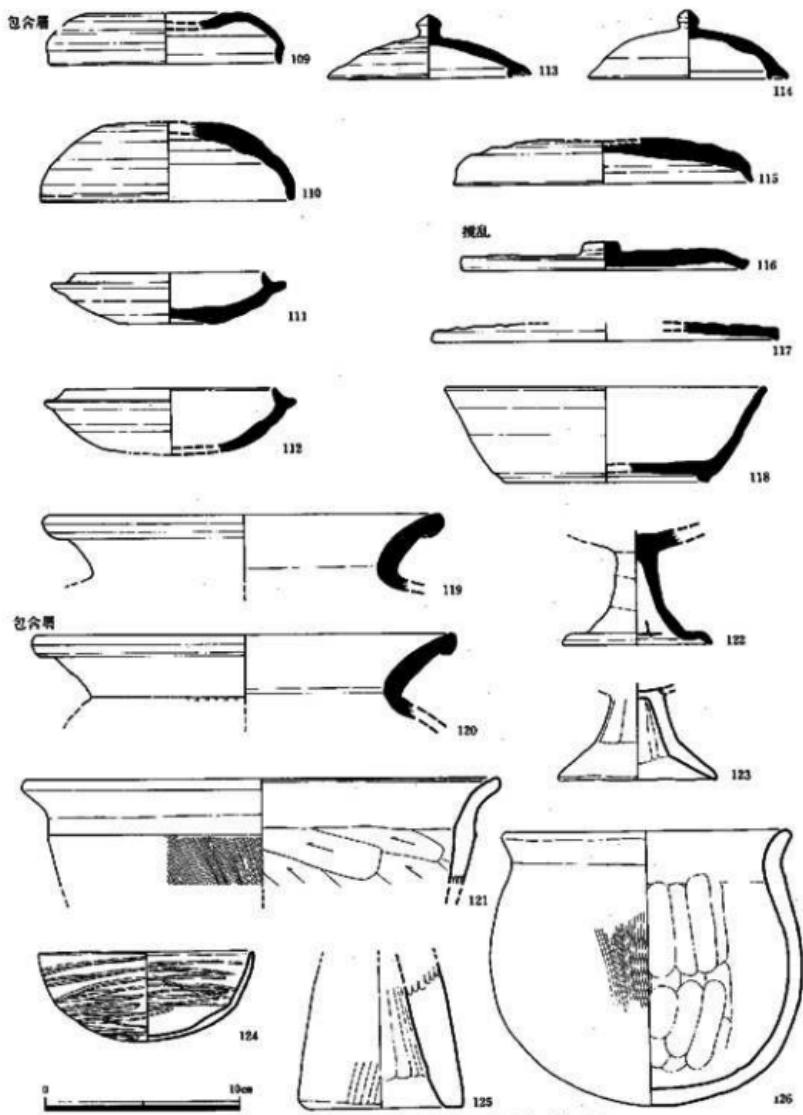
甌 (106) 表土出土。上げ底の底部で、体部は丸味を持つ。袋状口縁部が接続するもので、外面は粗いタテハケ調整、黄褐色を呈する。

土師器

竈形土器 (108) 口径26cm、現存高11.6cmを測る。口縁部がすぼまった器形である。焚口は焼成前に切り開けられている。焚口部の縁辺には幅3.8cmを測る鈎貼付部がある。鈎は剥落している。外面は粗いタテハケ調整である。竈形土器は藤崎遺跡第3次調査の1号・2号住居跡から出土している。1号住居跡は須恵器高台付碗が伴っている。^{註2}

須恵器

坏蓋 (109, 110, 113~117) 109・110・115は暗茶褐色砂質層（包含層）、113・114は遺構面、



第51図 表土及び、包含層出土遺物（縮尺3%）

116・117は攪乱層出土。109は口径12.0cm、器高2.7cmを測る。体部はヨコナデ調整。110は口径7.1cm、器高4.1cmを測る。体部の2/3まで逆時計回りのヘラ削りを施す。胎土に砂粒を含み、109は暗灰色を、110は暗青灰色を呈する。113は口径10.6cm、器高は3.3cm、114の口径は10.5cm、器高は13.6cmを測る。宝珠形のつまみを有している。口縁内側のかえしは小さく内傾する。114の断面形は三角形状である。天井部外面はヘラ削りを施す。いずれも淡灰色を呈する。115は口径15.6cm、器高2.3cmを測る。口縁部は小さく外反する。外面天井部は逆時計回りのヘラ削りを施す。胎土に長石、石英との砂粒を含み、暗灰色を呈する。116は口径15.0cm、器高1.5cm、117は口径18cmを測る。扁平な擬宝珠形のつまみを有す。116は体部と口縁部の境に屈折を持ち、口縁端部は平坦である。17の口縁端部は下をつまみ出して平坦に仕上げる。内外面ヨコナデ調整。胎土は精良で、116は灰色、117は灰白色を呈する。109・110はⅣ期、113・114はⅤ期、116・117はⅥ期である。

杯身(111、112) いずれも茶褐色砂層(包含層)出土。111は口径9.8cm、器高2.6cm、112は口径10.8cmを測る。蓋受けは水平につまみ出し、かえしの立ち上りは低く内傾する。須恵器Ⅳ期に相当する。胎土は精良で111は灰色、112は暗灰色を呈する。

碗(118) 暗茶褐色砂質層(包含層)出土。低い高台が付いている。口径16.8cm、器高4.9cm、高台径10.6cmを測る。体部は直線的に立ち上り、底部との境は明瞭である。高台は肩折部に貼付ける。胎土に砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。

甕(119、120) 119は遺構面、120は包含層出土。119は口径20.7cm、120は口径21.9cmを測る。玉縁状の口縁を有し、強く外反する。120の肩部にはタタキ痕がある。胎土に砂粒を多く含み、119は黒灰色、120は暗灰色を呈する。

高杯(122) 包含層出土。高台径7.9cm、現存高5.9cmを測る。高台裾部は強く屈折し、内傾する。端部は丸味を持つ。胎土に微砂粒子を含み、暗灰色を呈する。

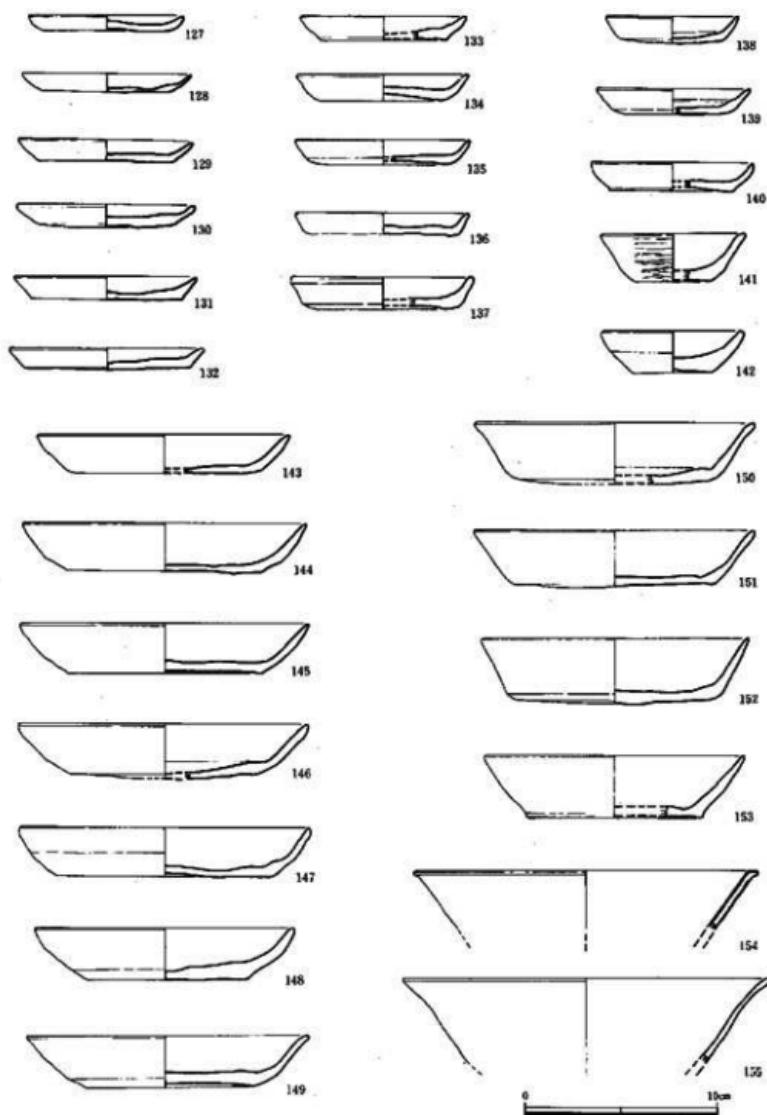
土器

碗(124) 暗茶褐色砂層出土。口径11.0cm、器高4.6cmを測る。半球形の体部で、内外面ヘラミガキを施す。内面底部と外面は丹塗りである。胎土は茶褐色を呈する。

甕(122、126) いずれも包含層出土。121は口径24.6cmを測る。口縁部は緩く外反する。体部内面はタテ方向のヘラ削り、外面はタテハケ調整である。126は口径15.1cm、器高14.2cmを測る。口縁部は小さく外反する。球形の胴部である。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。内面には炭化物が付着している。121・126とともに砂粒を多く含み、121は黒灰色、126は茶褐色を呈する。

高杯(123) 遺構面山土。高台径8.3cm、現存高4.7cmを測る。筒部と裾部の境には屈折を有し、内面には縞がある。筒部外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。裾部外面はヘラミガキである。胎土は砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。

支脚(125) 包含層出土。底径8.6cmを測る。筒状を呈し、最大厚2cmである。外面はタテハ



第52図 表土、及び包含層出土遺物（縮尺3分）

ケ後ナデ調整である。内面端部はナデ調整。胎土は砂粒を含み、二次熱のため赤褐色を呈す。

皿（127～142） 132・133・136・137は擾乱焼、135・140は黒褐色砂層、128・130・131・138・141・142は遺構面直上出土である。他は暗茶褐色砂質層（包含層）である。器形は大まかに三種ある。A類は127で、口径8.0cm、器高0.8cm、底径6.4cmを測る。B類は128～140で器高の高くなるもの、口径8.6～10.0cm、器高1.0～1.5cm、底径6.4～8.2cm、平均値は口径9.0cm、器高1.2cm、底径6.4cmを測る。この内、133・134・139・140は口径が8.4～8.9cm、底径が5.0～6.6cm、器高1.0～1.5cmを測り、他に比べ器高が高く、口径と底径の比が大きい。いずれも糸切り底で、体部内外面はナデ調整である。内底はナデ調整。129・130・138～140は板目压痕を残している。C類（141、142）は口径7.5～7.6cm、器高2.0～2.6cm、底径4.0～4.2cmを測る。糸切り底で、体部は直線的に外反する。底径と口径の比が大きい。141は外面にヘラミガキを施す。他はナデ調整。129・135・137の胎土には長石、雲母粒子を含む。127・131・134・141は微砂を含む。他は精選され、砂粒を含まない。127・129・139は黄褐色、128・131・138は黄灰色、132・142は赤褐色、133・134は乳灰色、135は茶褐色、137は褐色、140・141は灰褐色である。

杯（143～153） 146・153は擾乱焼、144・145・148～150・152は遺構面、他は暗茶褐色砂質層（包含層）出土である。器形には二種類ある。A類は143～147・150～152で、更に大小がある。小（143）は口径13cm、器高2.0cm、底径9.0cmを測る。大（144～147、150～152）は口径14.0～15.0cm、器高2.5～3.4cm、底径9.8～10.2cmを測る。体部が丸味を持つものと外反するものがある。糸切り底で、内外面はヨコナデ調整、内底はナデ調整である。B類は口径と底径の比が大きい器形で、148・149・153が相当する。口径13.5～14.6cm、器高2.7～3.3cm、底径8.4～9.2cmを測る。体部はやや丸味を持つ。糸切り底で、内外面はヨコナデ調整である。143・146・147・150・151・153の胎土には長石、雲母粒子を含む。144・145・148・149には微砂を含み、152は砂粒を多量に含む。143は乳灰色、145・147～149は明褐色、144・151・153は黄褐色、146・150は褐色を呈する。

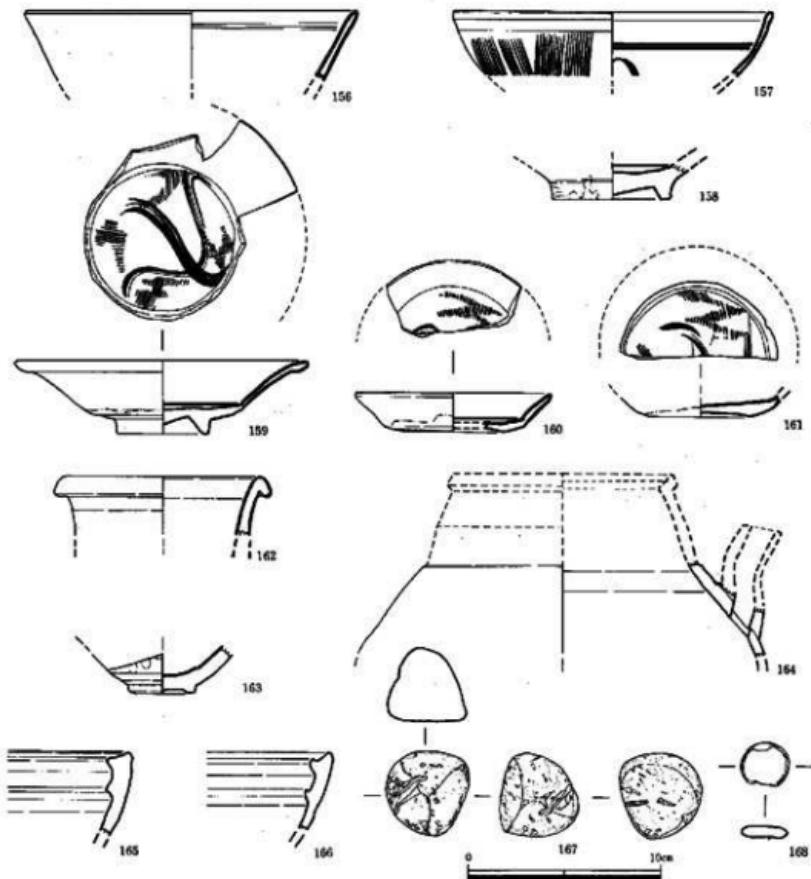
白 磁

碗（154、155） 154は遺構面、155は表土出土。端返りの口縁部を有し、154は口径18.0cm、155は口径19.2cmを測る。釉は154が緑味を帯びた灰白色で、155が青味がかかった白色である。154の外面には気泡がある。胎土は154が灰白色、155が青味がかかった白色である。

四耳壺（162） 口径11.2cmを測る。口縁部は強く折り曲げており、厚目の釉のため玉縁状をなす。釉は透明釉である。胎土は灰色を呈す。

青 磁

碗（156～158） 156・158は包含層出土。157は擾乱焼出土。156は龍泉窯系、157・158は同安窯系である。156の口径は17cm、157の口径は16.8cm、158の底径は6.2cmを測る。釉は156が緑色、157が淡緑色で、やや厚目に施す。156の口縁内側には圓線を施す。157の外面は櫛目文、内面は



第53図 包含胎、造構面出土遺物（縮尺1/2）

2条の圓線と櫛描文を施す。胎土はいずれも灰白色である。

壺（159） 同安窯系である。159は高台付である。口径15.2cm, 器高3.8cm, 高台径4.8cmを測る。口縁部は強く端反りし、端部は厚みを持っている。腰部の屈折は強い。内底にはヘラ描文と猫描文を施す。釉は緑灰色で、厚目である。外底は露胎である。

皿（160, 161） 160は口径10.1cm, 器高2.0cm, 161は底径5.3cmを測る。外底部は露胎である。釉はいずれも緑灰色を呈し、161はやや厚目に施す。内底にはヘラ描文と猫描文を施す。

陶 器

天目碗 (163) 高台径3.5cmを測る。釉は黒褐色を呈し、外面下位まで施す。胎土は暗黄灰色である。

水注 (164) 注口部分片である。復元の最大胴径は21.2cmを測る。胎土は茶灰色を呈し、釉は暗緑色である。山本氏分類の水注IVに相当する器形である。

鉢 (165, 166) 体部の丸味をもち、口縁部はやや内湾する。内側に2条の突帯を有しているが、165の突帯間は深い。胎土に長石粒を多く含み、165は茶褐色、166は灰褐色を呈する。山本氏分類のI-2aに属する。

土製品

小円盤 (168) 土製であるため判断に迷うが、形態上からみて碁石として良いと思われる。表面はいぶしをかけて黒灰色を呈している。胎土は精良で、灰色を呈している。径2.5cm、厚さ0.6cmを測る。

土錘 (169~174, 180, 181) 一覧表を93ページに掲載しているので参考にされたい。169~174・180・181は包含層の暗茶褐色砂層から出土、172は灰白色砂層出土、177はP99、178はP116の出土。175は攪乱層出土である。一種類あって、A類は両端が細くなった円筒形である。最小は178で、現存長4.6cm、最大径1.2cm、重さ41gを測る。最大は170・176で、170は長さ7.1cm、最大径2.0cm、重さ21.1g、176は長さ6.2cm、最大径3.8cm、重さ30.7gである。B類(180, 181)は円柱状体部の両端を扁平にし、穿孔するもので、181の長さは9.8cm、最大径は1.8×2.2cm、重さ34.8gを測る。孔径は0.9~1.0cmである。

鰐羽口 (183, 184) いずれも暗茶褐色砂質層から出土したものである。下半を欠いている。183の現存長6.3cm、最大径6.2cm、孔径1.2~1.8cm、184の現存長6.3cm、最大径6.2cm、孔径1.7cmを測る。ナデ調整を施し、184の胎土に砂粒を含む。184は二次熱のため灰白色を呈する。184の表面はガラス質が付着する。

土鉈 (182) 包含層出土。全長4cm、最大径2.4×2.6cmを測る。球体部の下間に幅3mmの切り込みがある。釣手の紐通しは径6mmを測る。黄褐色を呈する近世のものであろう。

石 器

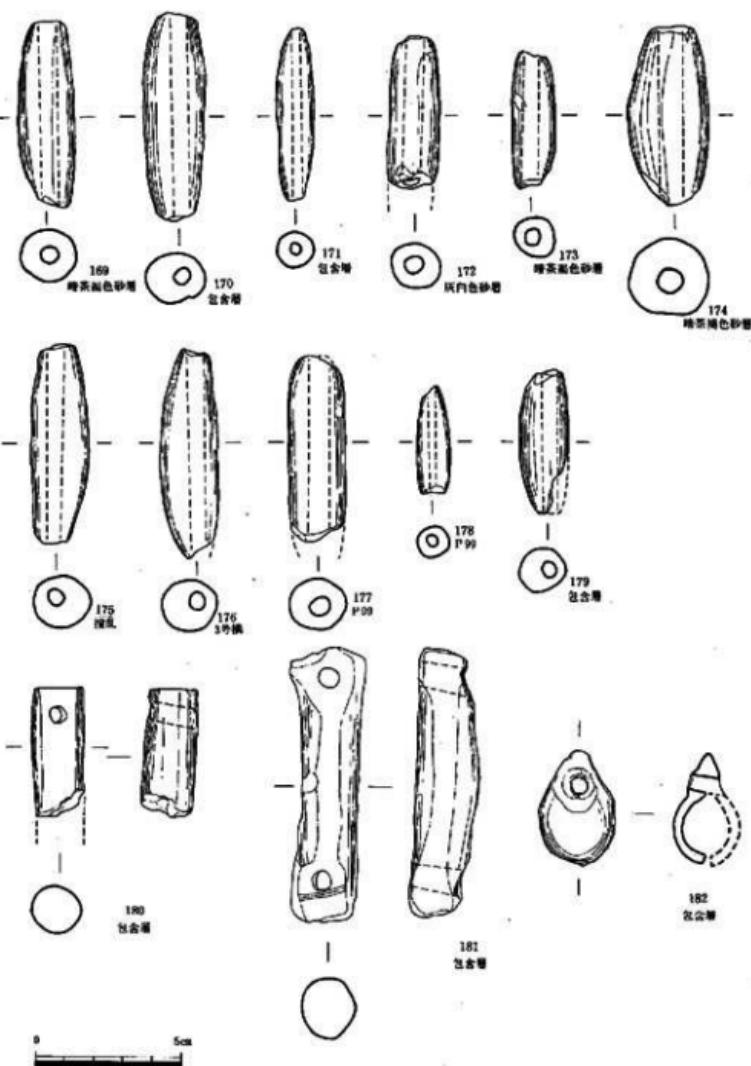
砥石 (186) 包含層より出土。中粒砂岩製で、多面体を呈している。一部に自然面を残す。手持ちの砥石である。

輕石製品

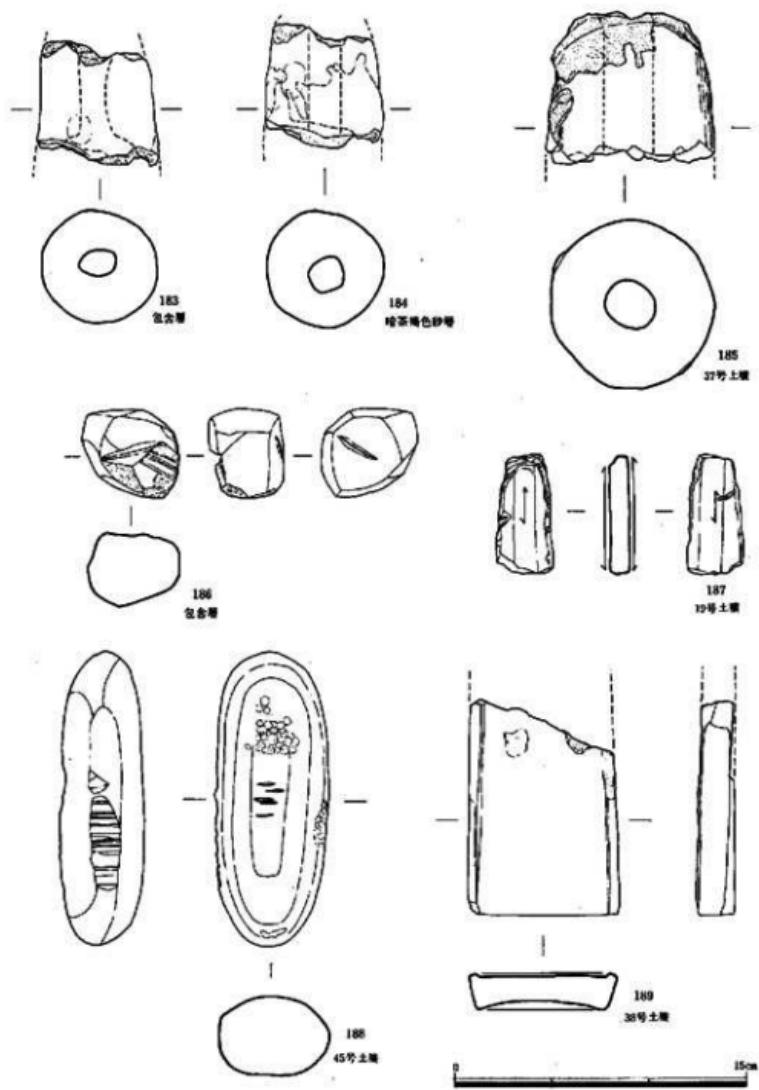
浮子 (167) 丸味をもち、一面が三角形状の立面体を呈している。大きさは4.1~4.6cmを測る。第11次調査でも同形同大のものが1点出土している。

金 屬 製 品

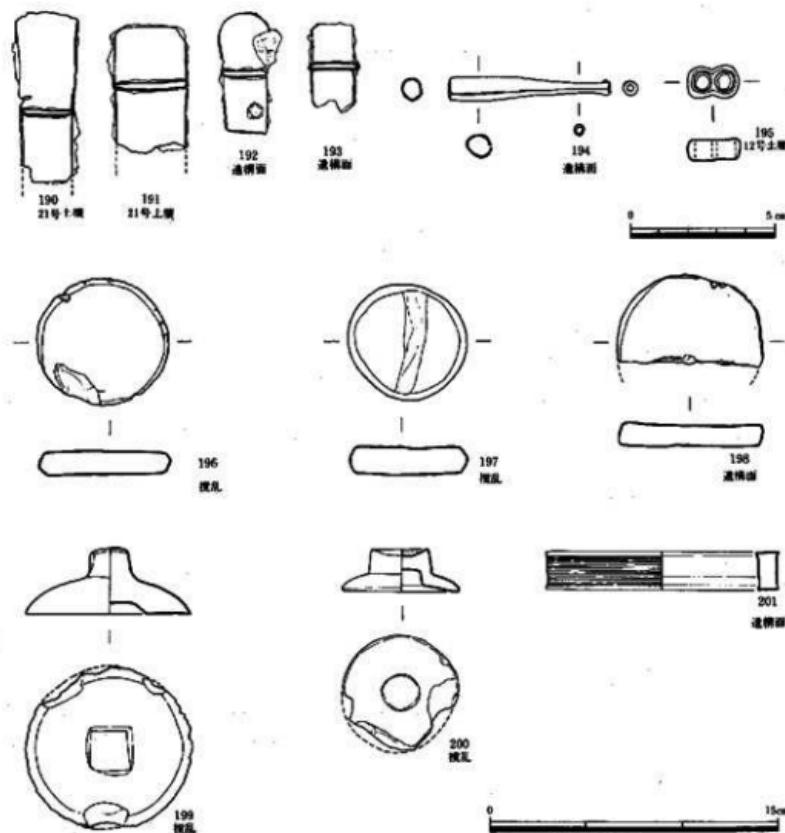
鉄片 (192, 193) 扁平な製品でどのような器形になるのか不明。1は一部を欠くが完形品で



第54圖 出土遺物(土製品)(縮尺5%)



第55図 出土遺物（石器）(縮尺½)



第56図 出土遺物(鉄器・近世陶器)(縮尺3/2・3/2)

第7表 第9次調査出土土錐針測表

番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点(番名)	番号	長さ(cm)	最大径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	出土地点(番名)
169	6.45	1.9	0.6	1.73	暗茶褐色砂層	176	7.2	1.9	0.6	21.1	包含層
170	7.2	2.0	0.6	22.3	包含層	177	6.4+0.6	1.9	0.7	20.0	Pit 99
171	6.0	1.25	0.4	8.2	+	178	3.7	1.15	0.4	4.1	Pit 116
172	5.2+0.8	1.75	0.65	12.9	暗灰褐色砂層	179	7.6	2.5	0.8	34.8	D-39
173	4.7	1.5	0.6	7.9	暗褐色砂層	180	4.5	1.75	—	16.9	包含層
174	6.2	2.8	0.9	30.7	暗茶褐色砂層	181	9.55	2.15	—	36.5	暗茶褐色砂層
175	6.9	1.95	0.6		侵蝕層						

ある。長方形を呈し、両端が若干丸味をもつ。2は先端を欠いている。長方形を呈しているが、一方の端部が半円状に作られている。192は長さ4.4cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm、193は現存長3.1cm、幅1.5～1.8cmを測る。

煙管（194） 吸口部分である。青銅製で、銅板を管状に巻いて作製する。長さは5.6cm、吸口部の径4mm、孔径2.1mm、羅字との接合部分では0.7cm、孔径6mmである。

近世陶器

蓋（199、200） いずれも攪乱より出土。199は底径8.4cm、器高3.4cm、200は底径6.0cm、器高2.2cmを測る。つまみは199は方柱状、200は円形である。いずれもヨコナデ調整で、灰褐色を呈する。胎土に砂粒を含む。

窯道具

ハマ（196～198） いずれも攪乱壙出土。196は径6.2cm、厚さ1.3cm、197は径5.6cm、厚さ1.5cm、198は径7.6cm、厚さ1.2cmを測る。

焼台（201） 輪形状で、最大径12.2cm、厚さ1.0～1.2cm、器高2.0cmを測る。外面はヨコ方向の条痕がある。

いずれも明治22年に開窯された高取焼の窯道具である。

4. 小 結

藤崎遺跡では弥生時代～古墳時代、及び奈良時代、鎌倉～室町時代の遺構・遺物が出土しているが、主たる遺構はやはり弥生時代～古墳時代前半の壺棺墓、土塚墓、方形周溝墓の墓地群である。当該調査区は藤崎遺跡の分布範囲外であり、稻塚川氾濫源近くの砂丘南西斜面に位置するところから、遺構は密ではないものと判断していた。遺構は中世を主体とするもので、弥生・古墳時代の遺構は非常に少く、且つ壺棺墓が1基も検出できないなど、これらの時代の生活範囲や墓域を決定する判断材料となり得る。又、従来、奈良時代以降の遺物は出土するものの、遺構としてまとまりのある状態は少く、今回の調査によって奈良時代以降の生活跡の所在が砂丘南側斜面に存在することが把握できたことは価値がある。以下に各遺構について若干の説明を加えたい。

I期は弥生時代後期の方形周溝遺構と、弥生時代終末期に相当する25号土塚である。この時期には藤崎遺跡64号壺棺墓と堅穴住居跡3軒がある。東側約800mの西新町遺跡では終末期（I・II）の堅穴住居跡が7軒検出されている。これらの住居跡は、砂丘上の立地のため遺存状態が悪い。平面形は長方形、又は隅丸方形を呈し、一辺の最大長4～5mを測るが、本来の住居跡平面形をとどめているとは思われない。25号土塚は境界地にあるため不整形を呈しているが、

堅穴住居跡の可能性もあり、当該地では4世紀～6世紀の住居跡の存在を含めて考えると、藤崎遺跡東側の7～10・11号住居跡とは別個に、終末期からこの南西斜面に集落が営まれたと考えたい。弥生時代中期の壇棺墓にみられる分村化は藤崎遺跡の集落にいくつかの単位があったことを示しており、終末期の集落においてもこれを示している。

方形周溝遺構は遺構各説で述べたように後期初頭の時期に比定できる。周溝状遺構は現在まで16遺跡24例がある。一般的に周溝状遺構には円形、椭円形、隅丸方形を呈し、弥生時代後期の落に存在する。最大長が²2.3～12.7mの間にあるが、3～5m前後に集中する。10mを超えるものは少く、それらは橢円形状が多い。又、地域においても筑後平野に集中してみられ、筑前の玄海灘沿革に少い特徴をもっている。福岡市内では比恵遺跡の1例、蒲田水ヶ元遺跡の2例が含まれており、更に付け加えるならば野方勧進原遺跡の例がある。²2例は弥生時代後期後半の集落であり、周溝状遺構は隅丸方形を呈し、コの字形に巡る。規模は外形が5.6～5.8m、台形部は1.8×3.1mである。弥生時代後期末の時期である。藤崎遺跡第3次調査の周溝状遺構は隅丸方形を呈し、規模の長さ約12m、周溝幅²は2.3～2.4m、台状部径約8mを測る。周溝状遺構の溝は1m未満のものが大部分を占め、又、台状部の長さも5m未満が多く、3m前後に集中するなど、当該地の周溝遺構とは規模に大きな相違がある。今回の調査地点の北側約120mには古墳時代初頭の方形周溝墓10基が検出されたが、外形や陸橋部の規模に当該地の例と大きな差はない。しかし、周溝幅は方形周溝墓の規模に比べて異常に大きい。方形周溝墓については、竹並10号墳が終末期にさかのぼると考えられているもの、從来、古墳時代初頭～5世紀初頃の所産と考えられており、弥生時代後期の周溝墓の例²はいまだ無い。しかし、前記の周溝状遺構には、当該周溝状遺構が規模や形状、又は弥生後期～古墳時代の墓地群に在るという立地を比較した場合一致する点は少くない。同様なことは比恵遺跡でもいえる。ここでは、昭和27年の調査によって方形の環溝遺構1基が検出されており、周辺に3基の土壙がある。内、2号土壙は古墳時代の墳墓として報告される。この環溝は北辺に陸橋をもち、一辺の外法が約10mで、内法は約9mである。弥生中期中頃以降の土器が出土している。この遺構も又、壇棺墓、土壙墓群上に立地し、周辺には那珂八幡古墳や博多1号墳、博多方形周溝墓群の存在を考えれば、藤崎遺跡同様の問題をかかえている。当該周溝状遺構に伴う主体部として可能性をもつ土壙は21号土壙と32号土壙がある。21号土壙は鉄片を出土したのみで他には遺物は無いが、平面形が隅丸長方形で、長さ約2.2mを測る。又、32号土壙は長橢円形を呈している。両者の覆土は黒褐色砂である。21号土壙は東側に帯状の黄褐色粘土が存在するが、この粘土が目貼りとも考えられるところから、木蓋土壙墓の可能性をもっている。木蓋土壙墓は石蓋土壙墓に先行するものであり、目貼りが明瞭に残るものはやはり弥生時代中期末～後期前半に存在する。よって、土壙の時期と周溝出土遺物の時期に大きな差はないと思われる所以、21号土壙（上壙墓）が周溝状遺構に伴う可能性は高い。周溝墓ではないが、弥生時代中期において特定家族墓と思われる墳丘をも

った要棺墓が、朝倉郡夜須町峯遺跡、福岡市橋渡遺跡、同板付田端遺跡で発見されており、平野の中心的な有力地域において既に特定家族の分離が行われていたとすれば、古墳時代初期には畿内政権と密接な関係にあった当遺跡が、立地上から更にさかのぼって畿内政権の影響を受けている可能性は充分にある。よって複数の主体部を有した方形周溝墓としての蓋然性について充分検討する余地はあると思われる。又、21号・32号土壙の他に弥生後期にさかのぼる土壙もあると考えられるが、遺構の重複が著しいことや搅乱のため明確にし得なかつたのは残念である。

周溝墓としての条件の他のひとつには、北側70mの第2地点一村上研究所敷地内では、方格規矩渦文鏡を副葬した箱式石棺が出土している。又、第1地点では同じく箱式石棺から仿製三角縁二神龍虎鏡と素環頭大刀が出土しており、これらの箱式石棺墓も方形周溝墓の主体部と考えられる。藤崎第2次調査では弥生時代と思われるV字形を呈した方形周溝状遺構が検出されている。これは外形が約20m、台状部長14.5m、周溝幅約2.5mを測り、幅が約2mの陸橋部は北東隅にある。この周溝状遺構は弥生時代中期中頃～後半の要棺墓を切っている。溝内からの遺物は全て弥生式土器片であり、古墳時代を示す土器は無い。主体部となる土壙は明確ではないが、幾つかの黒色砂土を含んだ落ち込みが存在したが確認するに至っていない。第1・2地点の箱式石棺はこの第2次調査検出の周溝状遺構とほぼ同一等高線上で西側に並んでいる。又、今回の周溝状遺構は第2地点の南側に位地し、方格規矩渦文鏡を副葬した箱式石棺は、藤崎第3次調査の方形周溝墓群よりやや古式の様相をもっていることから、砂丘北側の墓域に対して砂丘南側に方形周溝墓群が存在するとすれば、方形周溝墓群の初源にかかる古式墓を含んだグループが考えられる。とすれば当遺跡において、要棺墓としての集団墓から特定家族墓への移行が早期に行われ、その発展的結果として他地域にない三角縁神獸鏡を有した特定個人墓＝盟主墓である藤崎第6号方形周溝墓がつくられたとみることができる。今後の調査に期待したい。

I期は住居跡と土壙である。土壙では時期明確なるものは少い。住居跡は2号住居跡が1・3号住居跡を切っており、1号住居跡は4世紀初頭、2号住居跡は須恵器Ⅳ期の6世紀後半～7世紀初頭が考えられる。2号住居跡はかまどを有しているが、住居跡としては小型に入る。藤崎遺跡では初見であるが、東の西新遺跡では、西新Ⅲ・Ⅳ期の段階、すなわち古墳時代初頭にかまどを有していると報告されている。そのかまどは6世紀代のかまどと相違し、一辺の中央ではなく、一隅に設けており、焼土のみで粘土等の痕跡はないと云われる。造り付けのかまどについては整理された論があるが、これによれば県内においては塚堂遺跡が5世紀前半に、赤井手遺跡が5世紀中頃には出現しており、6世紀にはかなり広汎な分布を示している。早良平野においても有田遺跡、片江辻遺跡、淨泉寺遺跡、原遺跡、宮ノ前遺跡など分布が多い。有田遺跡は6世紀初頭から出現するが、片江辻遺跡は6世紀後半期に集中的に出現する。拠点集落と分村集落においても造り付けかまどを持った住居跡の出現時期は異なるのであろう。いず

れにしても早良平野では6世紀後半で出現する。西新遺跡例は5世紀前半以降のかまどとは住居跡内の位置や構造に相違があるので、同一集落又は、同一地域におけるかまど構造の変遷及び継続的使用例の確認の無い段階では異質な観を受ける。同時期での同様な資料が望まれる。かまどを持つ住居跡は早良平野では現地では、6世紀末～7世紀初頭には消滅し、代って掘立柱建物へと変るが、淨泉寺遺跡では6世紀後半にはその変遷がみとめられるといふ。^{註19}畿内では、5世紀後半には掘立柱建物への移行が認められるといわれ、北部九州でも少くとも6世紀後半には移行すると思われる。但し、成屋形遺跡や利白遺跡のように7世紀後半～8世紀迄継続されるものもあり、これらの集落は単に地域性だけでなく、各種生産に従事するという社会構造上や身分構造上の位置づけが必要であろう。

早良平野における造り付けかまどを有した遺跡は、その他に田島オゴモリ遺跡、飯盛谷遺跡、吉武高木遺跡、羽根戸遺跡を加えても10数遺跡にすぎず今後の資料を待ちたい。^{註20}

Ⅲ期は土壙や溝である。中世の包含層、いわゆる整地層からは古墳時代～中世の遺物を多量に出土した。整地層の年代の手懸りとしては、十筋皿・环がある。

土師皿はA類一口径8.0cm、器高0.8cm、底径6.4cm、B類一口径9.2～10.2cm、器高1.0～1.6cm、底径6.4cm、C類-(133, 134, 139, 140) 口径8.4～8.9cm、底径5.0～6.6cm、器高1.0～1.5cm、D類一口径7.5～7.6cm、器高1.0～1.6cm、底径4.0～4.2cmを測る。环はA類一小は口径13.0cm、器高2.0cm、底径9.0cm、大は口径14.0～15.0cm、器高2.5～3.4cm、底径9.8～10.2cm。B類は口径13.5～14.6cm、器高2.7～3.3cm、底径8.4～9.2cmを測る。太宰府史跡SK1203、SK1204(12世紀前～中頃)出土の皿の法量は口径9.0～9.6cm、器高0.9～1.6cm、环は口径15.0～16.6cmの間に分布する。SK601は13世紀中頃であるが皿の口径8.0～9.0cm、器高0.8～1.0cm、环の口径12.8～13.2cm、器高2.3～2.8cm、SK1805(13世紀前後)皿の口径8.2～9.2cm、器高0.9×1.1cm、环の口径13.6～14cm、器高2.4～3.0cm。SK225はヘラ切り底と糸切り底が共存しており、法量は皿の口径9.0～10.0cm、器高1～1.3cm、环は口径14.6～15.3cm、器高2.4～3.0cmの間に分布している。土師皿は12世紀前半で口径9.0～10.0cmを測り、13世紀の段階では口径が8.0～9.0cmの間に減少していく傾向があるので、総体的にみた場合、包含層出土の土師器・皿は132が12世紀後半に求められるとしても、A・B類はSK1085の時期で13世紀前後、C類はSK601の時期で13世紀中頃の年代が求められる。A類が古式、C類が最も新しいところであろう。Ⅲ・D類は太宰府史跡SK1200出土の土師皿と形態、及び法量に差が無ないので、ほぼ14世紀前半の段階と考えられよう。これらの土器は包含層(第4層)上面より出土したもので、整地層形成の時期にかかるわる上器ではない。环A・B類は太宰府史跡SK1085と器形・法量的に合致する。A類は小型化しており、若干後出するものと思われる。C類は太宰府史跡SK601と法量・器形ともに合致する。环C類は遺構面(第4層直上)出土であり、包含層形成以降の遺物である。环A・B類は13世紀前後、环C類は13世紀中頃が考えられ、ⅢA・B・C類の時期

に合致するので、包含層形成の年代が13世紀初頭～前半中頃に行われたことを示している。土師器には13世紀以前のものも含まれるが、これらの土器は有田遺跡第32次調査の井戸一括遺物と器形・法量が一致するものがある。須恵土器、瓦質土器、白磁、青磁を伴うもので、特に青磁は同安窯系を主体としている。この時期はSK1085より器形が大きく、12世紀前半～中頃のSK1204に比べて小型化しているところから、12世紀後半～末の段階が考えられる。これらを参考にして、各々の遺構の時期についても大宰府編年に対照させてみたい。

SK1085-1号・7号土壙5号溝

有田遺跡第32次調査（12世紀後半～末）井戸-17号・18号・39土壙・2号・4号溝

中世遺構は整地層形成時に作られたもので12世紀末～13世紀前半と考えられる。又、時期幅を考えれば約20～30cmを測る包含層の形成が厳密には一時期的ではないことを示している。

註1 横田賛次郎、森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 1978

註2 福岡市教育委員会「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第80集 1982

註3 太宰府市教育委員会「大宰府糞坑跡」太宰府市教育委員会 1983

註4 小郡市教育委員会「畠まとめ生糞時代の周辺状況について」『井上北内原遺跡』小郡市文化財調査報告書第20集 1984

註5 福岡市教育委員会「比志遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第94集 1983

註6 福岡市教育委員会「野方惣造原遺跡の調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集 1981

註7 竹並遺跡調査会「竹並遺跡」 1979

註8 福岡市教育委員会 1985年3月～6月発掘調査

註9 福岡市教育委員会 1985年7月～9月発掘調査

註10 夜須町教育委員会 1985年発掘調査 西日本新聞

註11 福岡市教育委員会 1984年発掘調査 下村智氏ご教示

註12 中山平次郎「銅鉢・銅剣の新資料」考古学雑誌第7巻7号 1917

註13 福岡市教育委員会「高遠鉄道関係埋蔵文化財調査報告書」 1982 福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集

註14 西谷正「加耶地域と北部九州」「大宰府古文化論叢」上巻 1983 吉川弘文館

註15 福岡県教育委員会「塚堂遺跡」浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集 1983

註16 春日市教育委員会「赤井手遺跡－福岡県春日市大字小倉所在遺跡の調査」春日市文化財調査報告書第6集 1980

註17 福岡市教育委員会「有田・小田部第1～6集」 1980, 1982～1985

註18 福岡市教育委員会「片江辻遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集 1977

註19 福岡市教育委員会「淨泉寺遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第99集 1983

註20 亀井明徳「成屋形遺跡古代住居址発掘調査報告」 1970

註21 福岡市教育委員会「和白遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集 1971

註22 福岡市教育委員会昭和59～60年度発掘調査

註23 福岡市教育委員会 田中寿夫氏ご教示

註24 福岡市教育委員会「第32次調査」「有田・小田部第4集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983

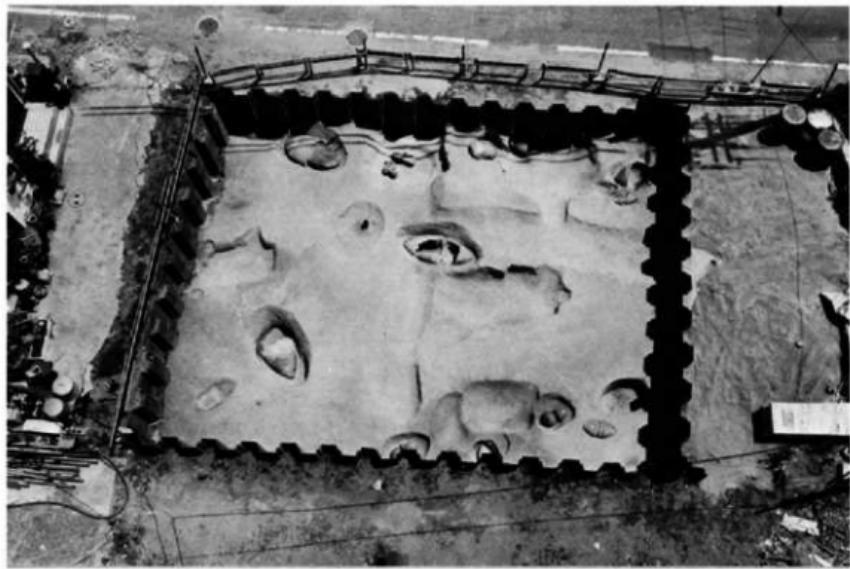
図 版



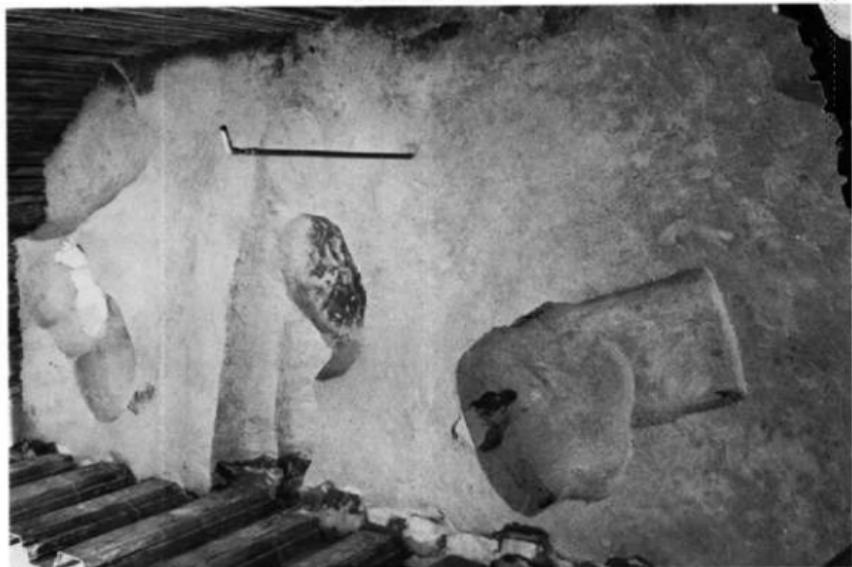
藤崎道路周辺航空写真（昭和55年11月撮影、1/50,000） 1 藤崎道路 2 西新町道路



(1) 第7次調査区遠景(北から)



(2) 調査区全景(西から)



(1) 調査区南側全景(西から)



(2) 調査区東側豪棺墓出土状況(南から)



(1) 1 分類瓶底(北から)



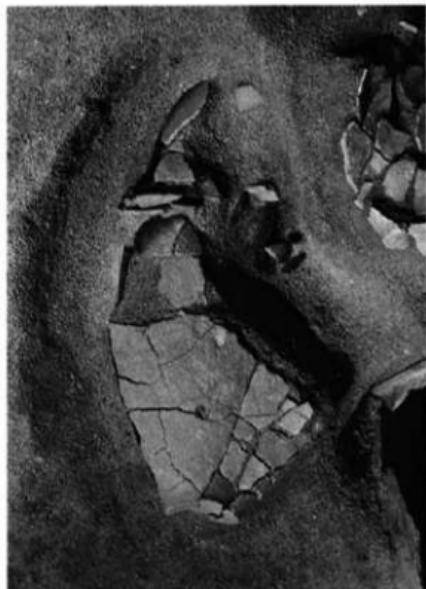
(2) 3 分類瓶底(西から)



(3) 4・5・6 分類瓶底(西から)



(4) 6 分類瓶底(東から)



(1) 5号破片(東から)



(2) 5号破片(東から)



(3) 7号破片(東から)



(4) 9号破片(北から)



(1) 8・10号墳棺蓋(内から)



(2) 8号墳人骨出土状況



(3) 12号墳棺蓋(内から)



(4) 12号墳人骨出土状況



(1) 11号漆器相模(東から)

(2) 11号漆棺人骨出土状況(東から)



(3) 13号漆器相模(東から)



(4) 13号漆器相模(東から)



(1) 12号数鉢塚(奥から)



(2) 15号数鉢塚(奥から)



(3) 16号数鉢塚(奥から)



(4) 17号数鉢塚(奥から)



(1) 15・18・19号甕棺墓(東から)



(2) 18号甕棺墓(東から)



(3) 19号甕棺墓(東から)



(1) 一合土壺(押から)



(2) 3合土壺(押から)



(3) 4合土壺(押から)



(4) 6合土壺(押から)



(1) 烧けた土器(陶片)



(2) 烧けた木(木炭)



(3) 烧けた土器(陶片)



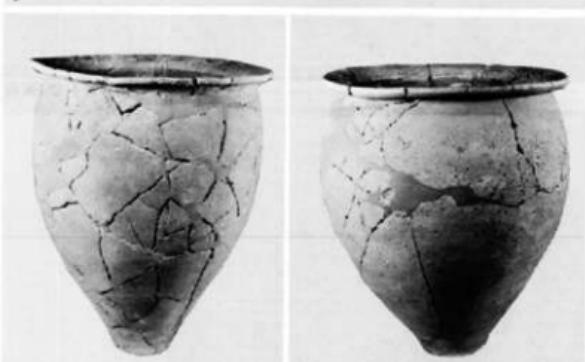
1



3



2



4



5

2. 1号甕棺

3. 4号甕棺

1. 2号甕棺

4. 5号甕棺

5. 6号甕棺



1



2



3



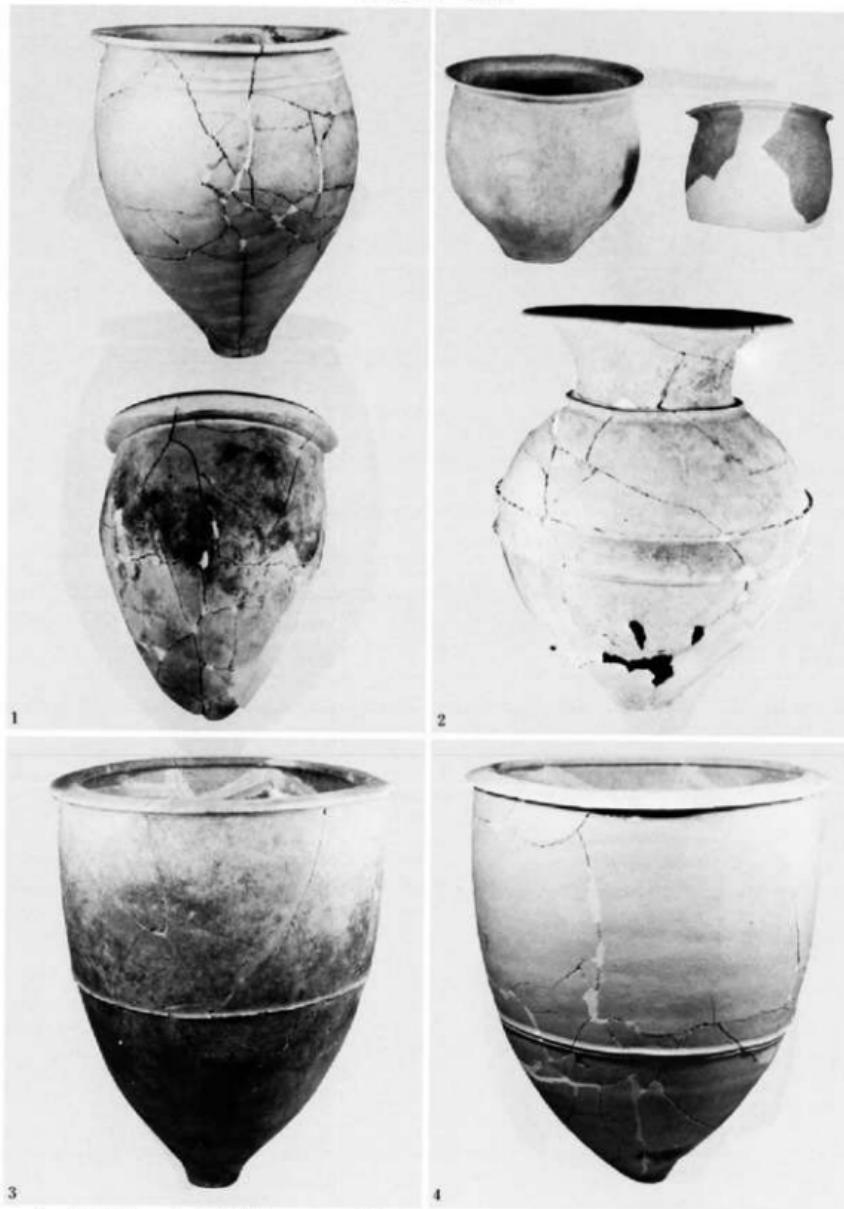
4

1. 7号甕棺

2. 8号甕棺

3. 10号上甕

4. 10号下甕



1. 9号甕棺

2. 13号甕棺

3. 11号上腹

4. 11号下腹



1. 12号上甕 2. 12号下甕 3. 14号甕棺 4. 15号甕棺



1



2



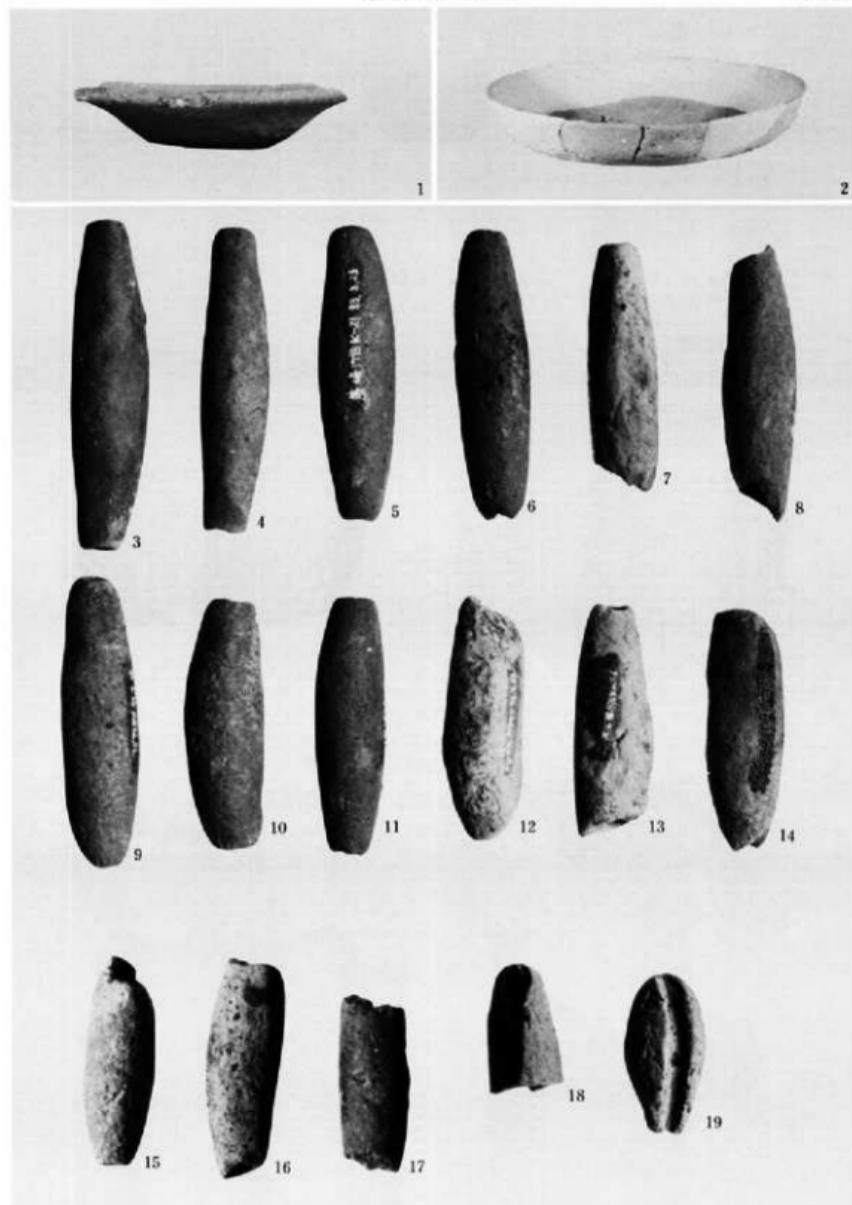
4

1. 16号甕棺

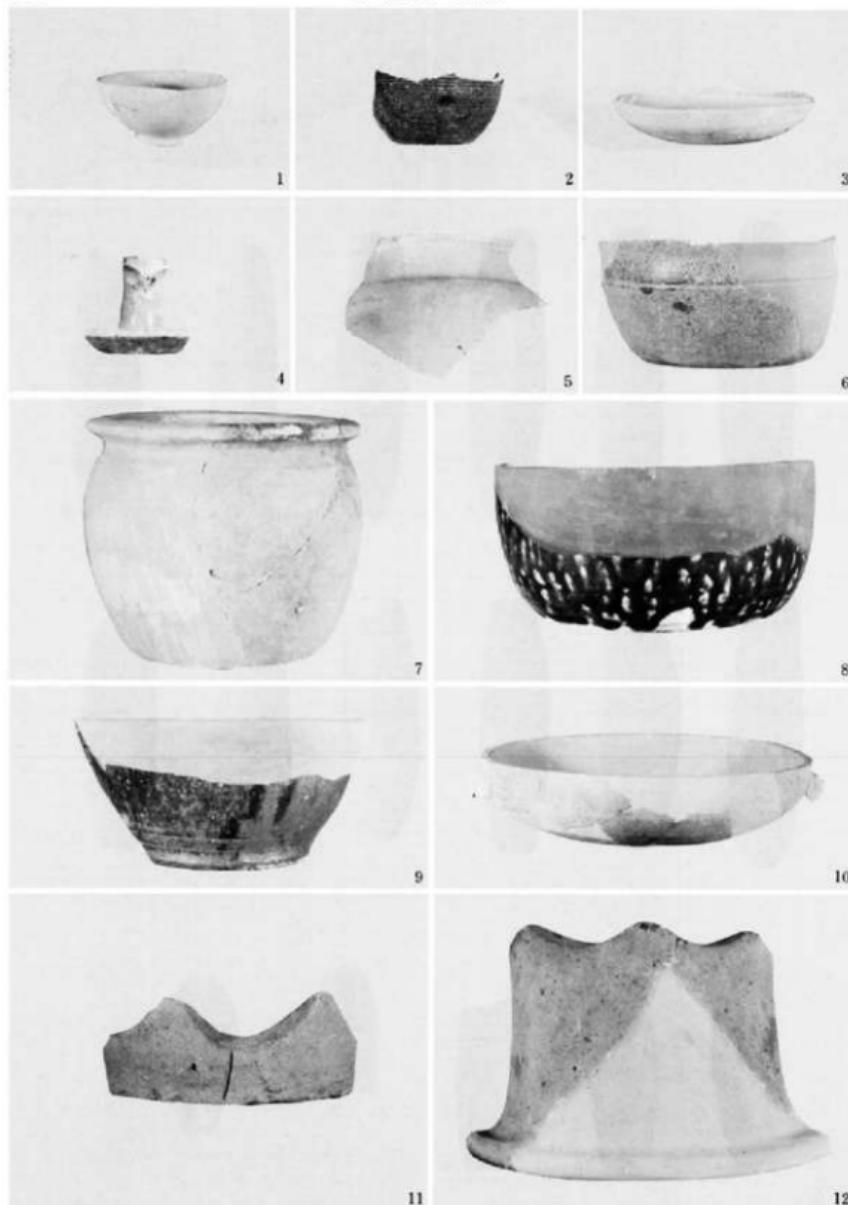
2. 17号甕棺

3. 19号甕棺

4. 18号甕棺



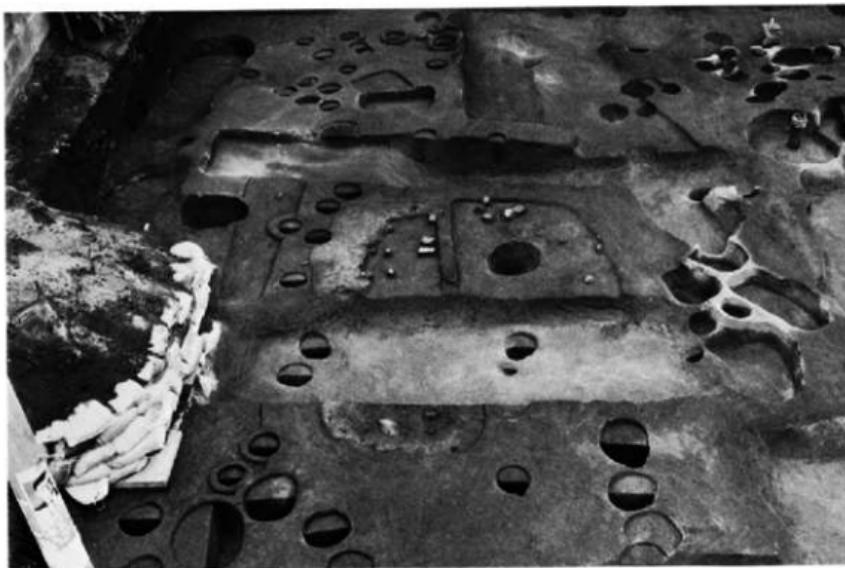
包含層、擾乱出土遺物



擾乱出土遺物(縮尺:1/3)



(1) 第9次調査区第1面全景(北から)



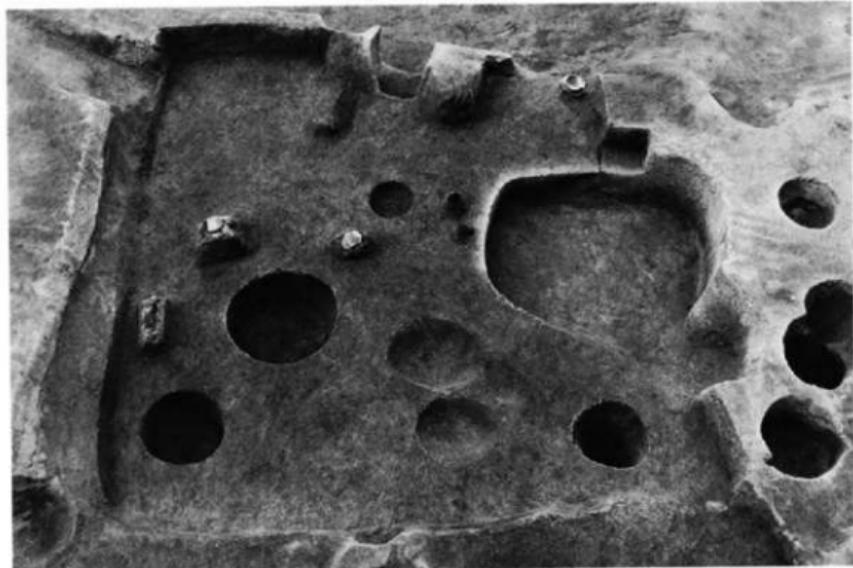
(2) 調査区東側(北から)



(1) 調査区第2面全景(北から)



(2) 1号住居跡(東から)



(1) 2号住居跡(南から)



(2) 3号住居跡(西から)



(1) 1号住居跡遺物出土状況(東から)



(2) 2号住居跡遺物出土状況(東から)



(3) 1号土器(南から)



(4) 2号土器(東から)



(1) 3号土壤(表面から)



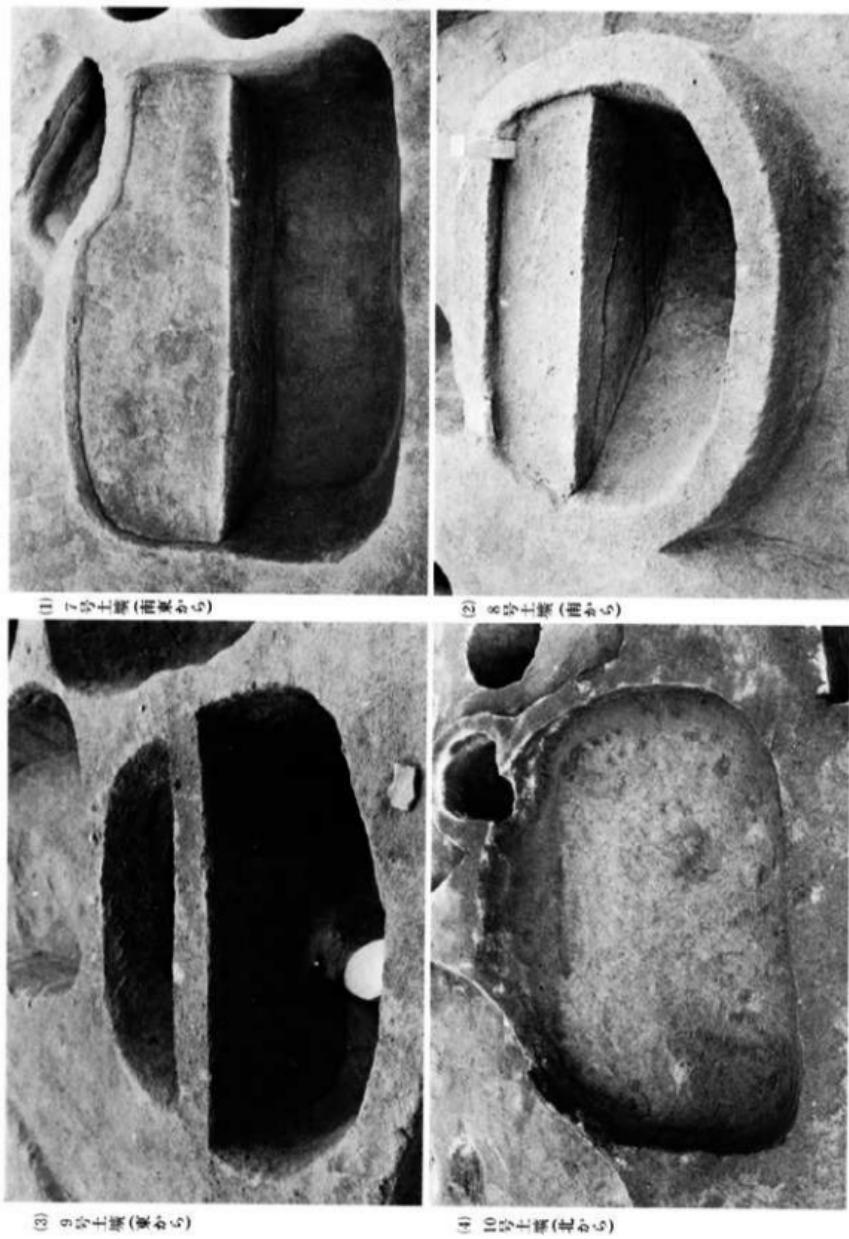
(2) 3号土壤抜き出土状況(表面から)

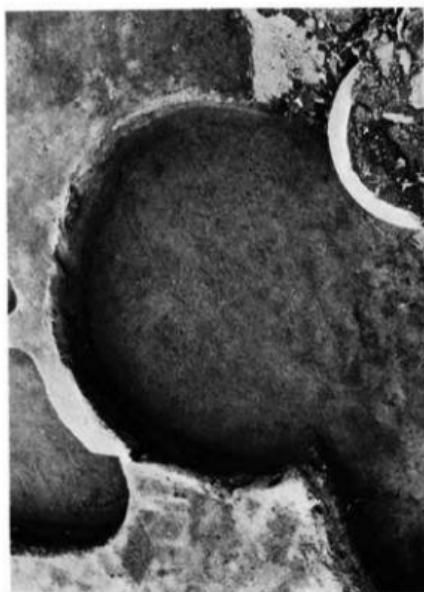


(3) 4号土壤(表面から)

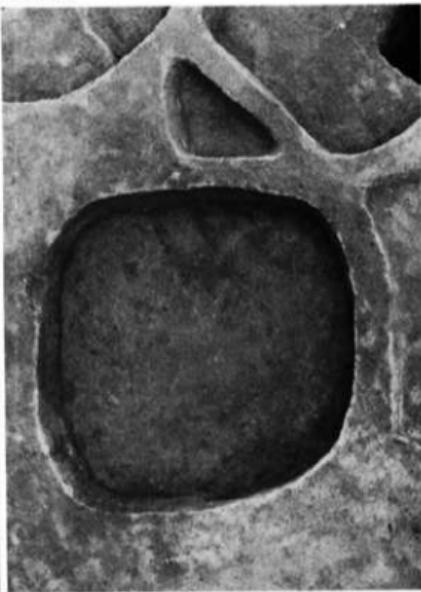


(4) 5号土壤(表面から)





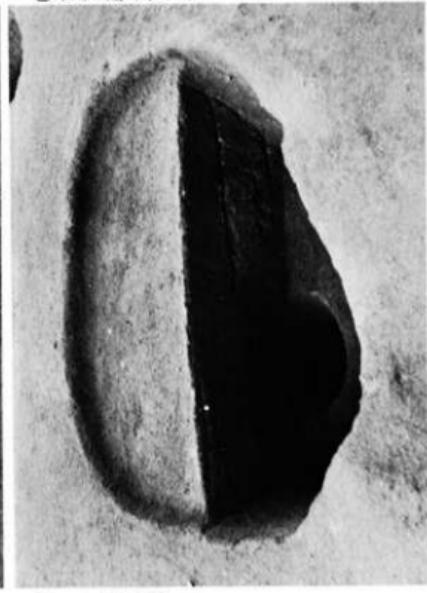
(1) 11号土類(岩面)



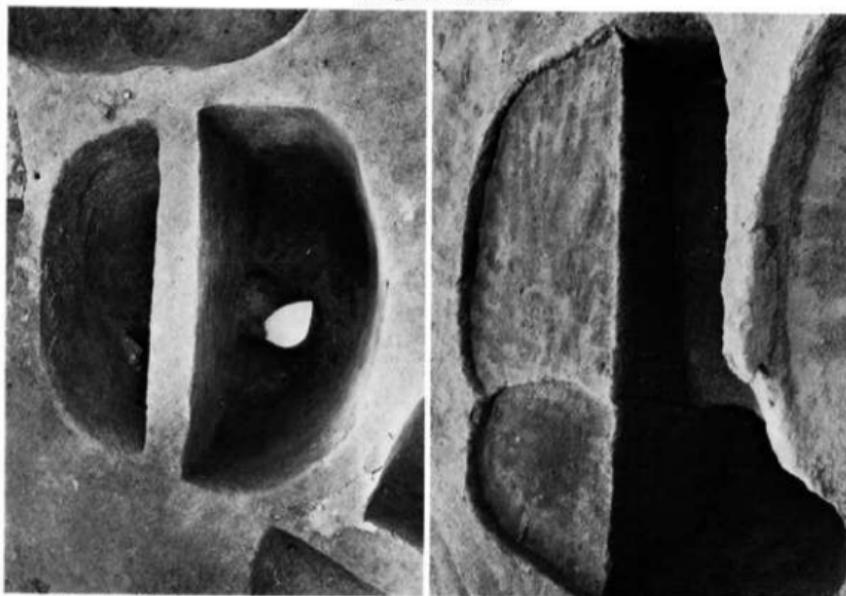
(2) 12号土類(岩面)



(3) 13号土類(岩面)



(4) 14号土類(岩面)



(1) 15号土樣(南東から)

(2) 17号土樣(東から)



(3) 17号土坑完成状態(雨から)



(4) 17号土坑遺物撤去状況



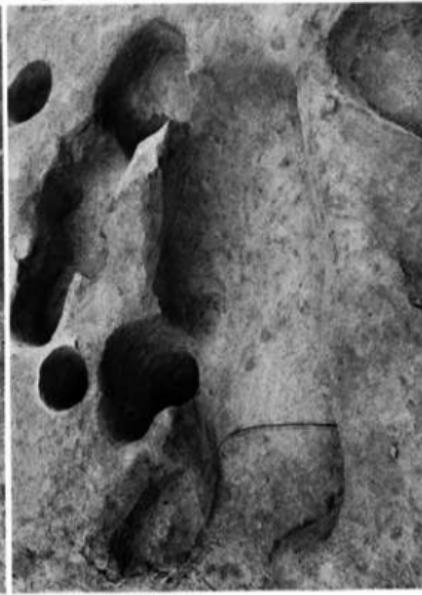
(1) 16号土樣(東から)



(2) 18号土樣(南西から)



(3) 19号土樣(東から)



(4) 20号土樣(東から)



(1) 22号土器(東から)



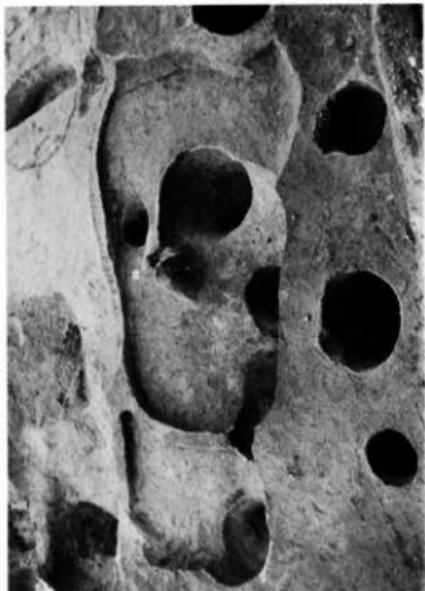
(2) 23号土器(東から)



(3) 24号土器(北から)



(4) 25号土器(東から-2)



(1) 26号土器(裏面)



(2) 28号土器(裏面)



(3) 35号土器(裏面)



(4) 35号土器遺物出土状況



(1) 34号土壙(南東から)



(2) 37号土壙(東から)



(3) 37号土壙出土状況



(4) 37号土壙元掘出面(東から)



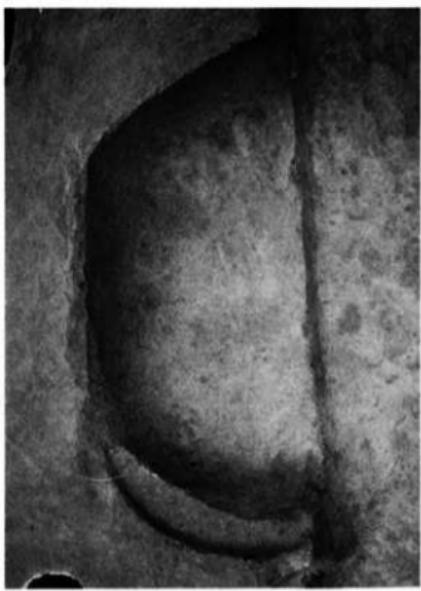
(1) 38号土壠(表面から)



(2) 38号土壠出土状況



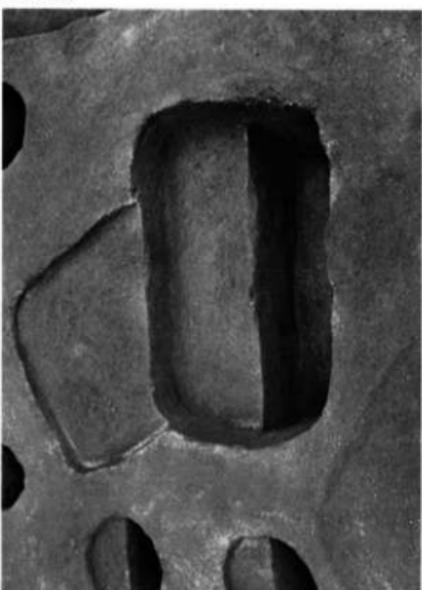
(3) 38号土壠土質状態



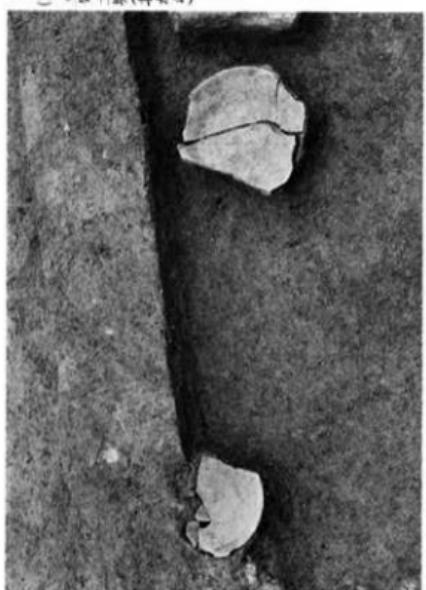
(4) 38号土壠穴掘れ状態(表面から)



(1) 4号土器(瓦かく)



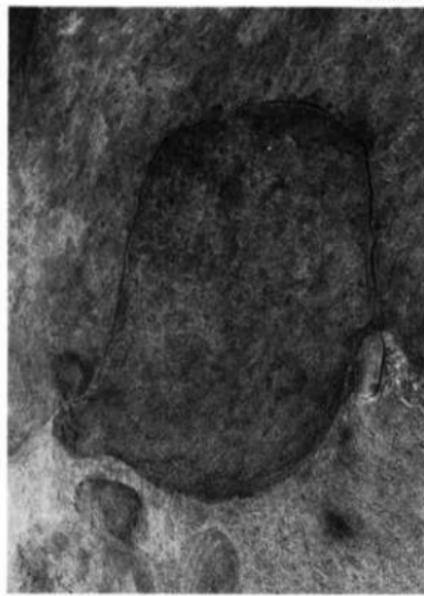
(2) 4号土器(瓦かく)



(3) 39号土器土器出土状況



(4) 39号土器(土器)



(1) 15号土壙(北から)



(2) 16号土壙(東から)



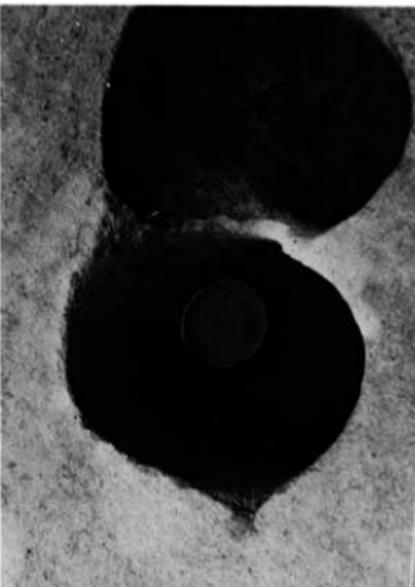
(3) 17号土壙(西北から)



(4) 47号土壙遺物出土状況



(1) 52号土壙(深鉢跡)(東から)



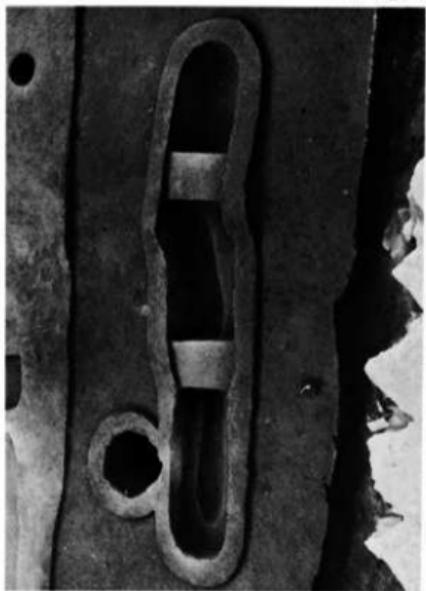
(2) Pit 20 土壙(深鉢)出土状況



(3) Pit 87 土壙(深鉢)出土状況



(4) Pit 88 土壙(深鉢)出土状況



(1) 1号溝(北から)



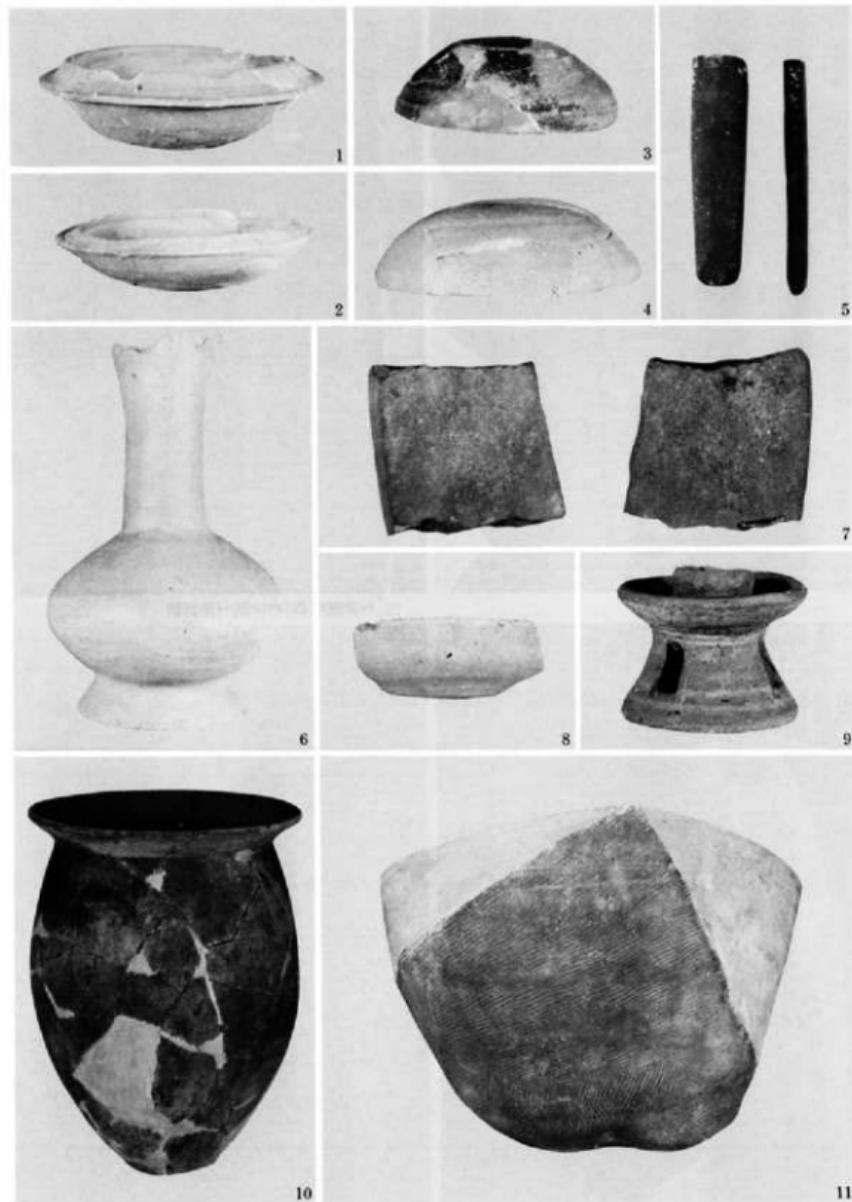
(2) 3号溝(方形開溝面)土質状態



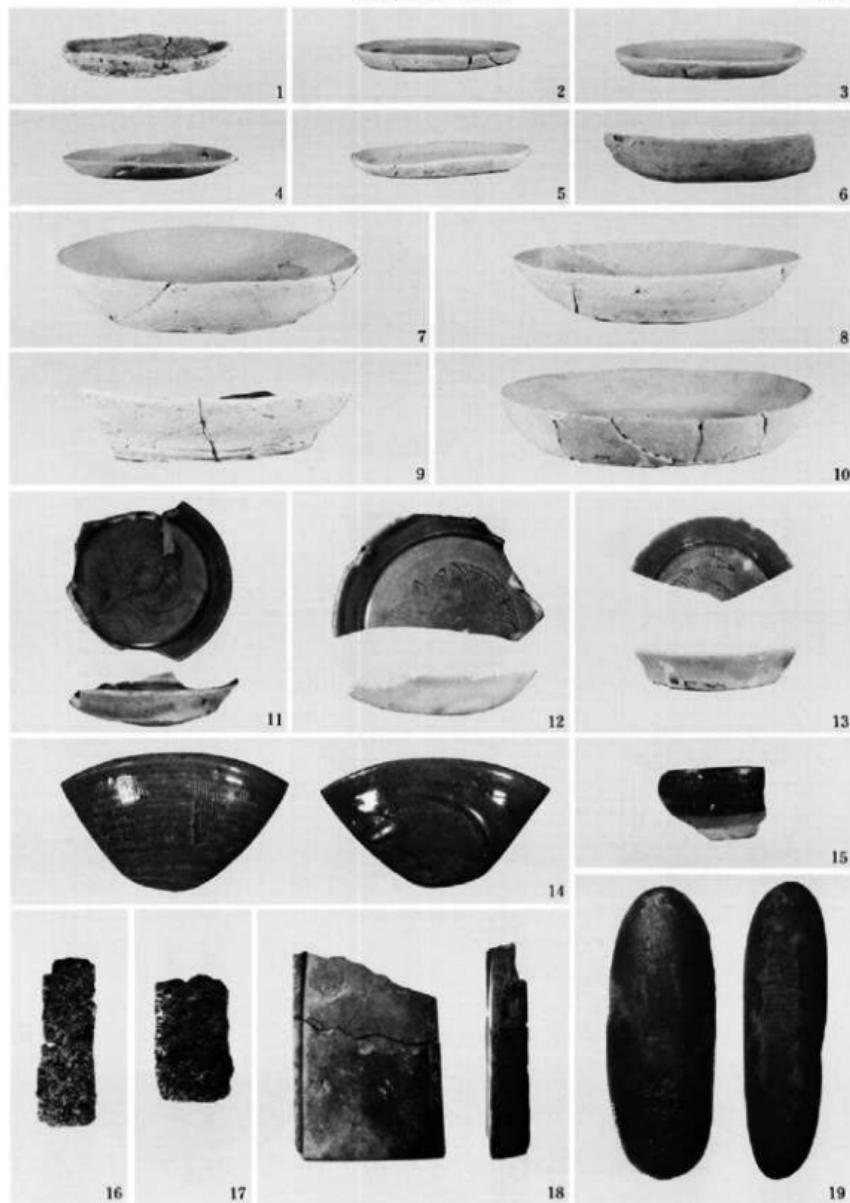
(3) 2号溝及び3号溝土質状態



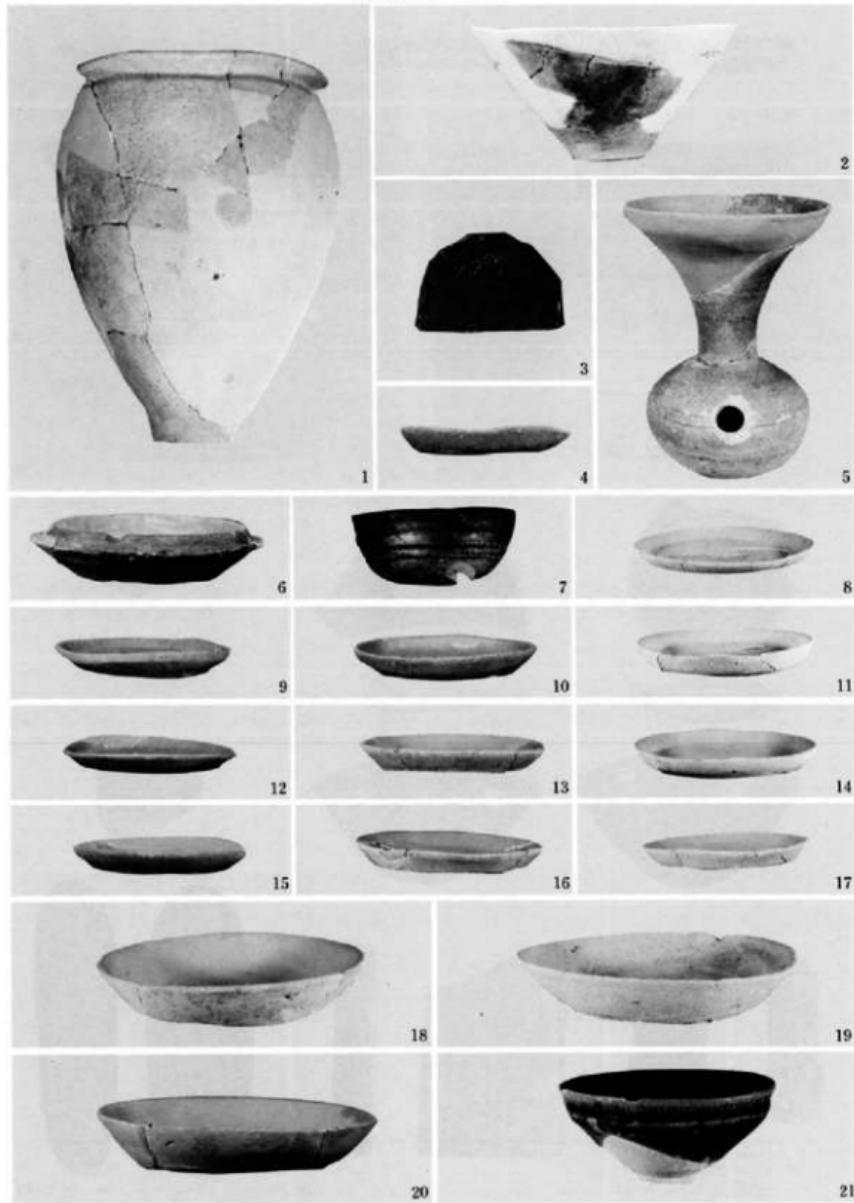
(4) 2号溝出土状況



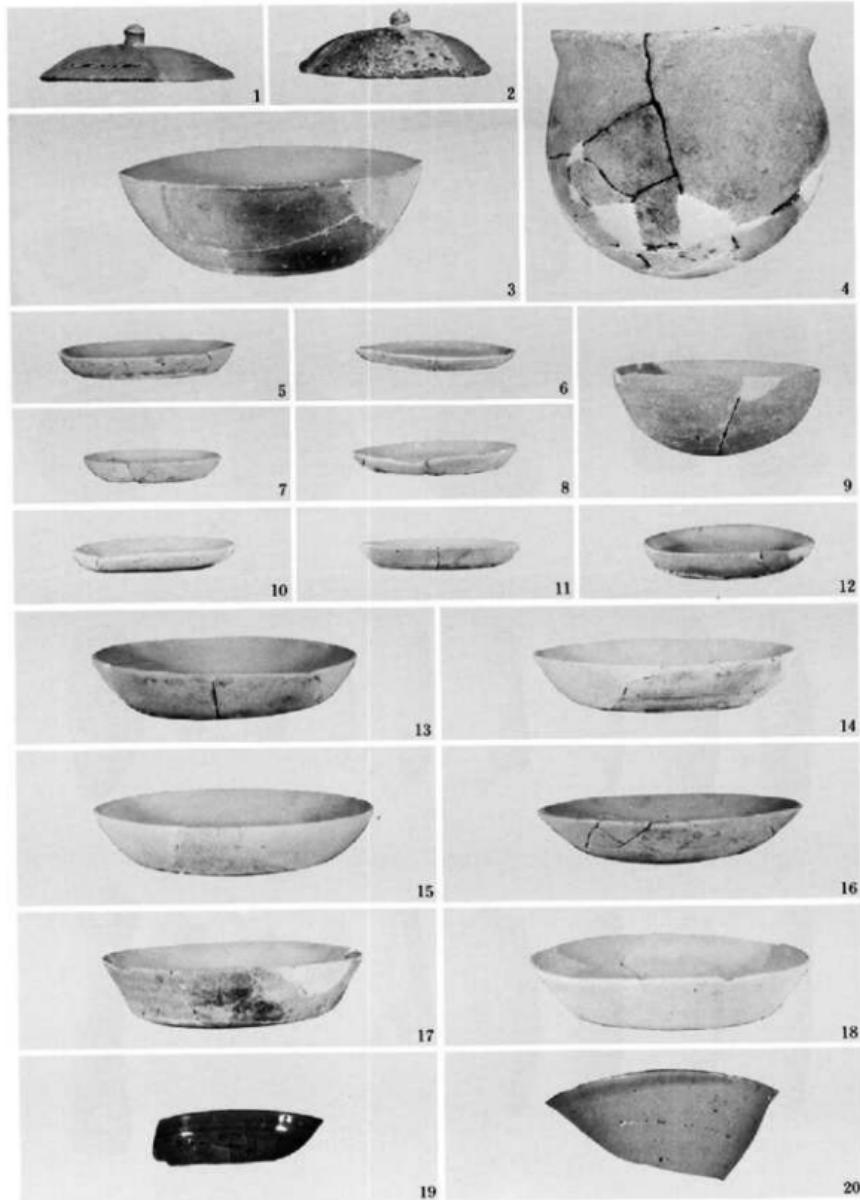
出土遺物(1～7は住居跡、8～11は土壤) 縮尺: 10は1/4、11は1/5、他は1/3)



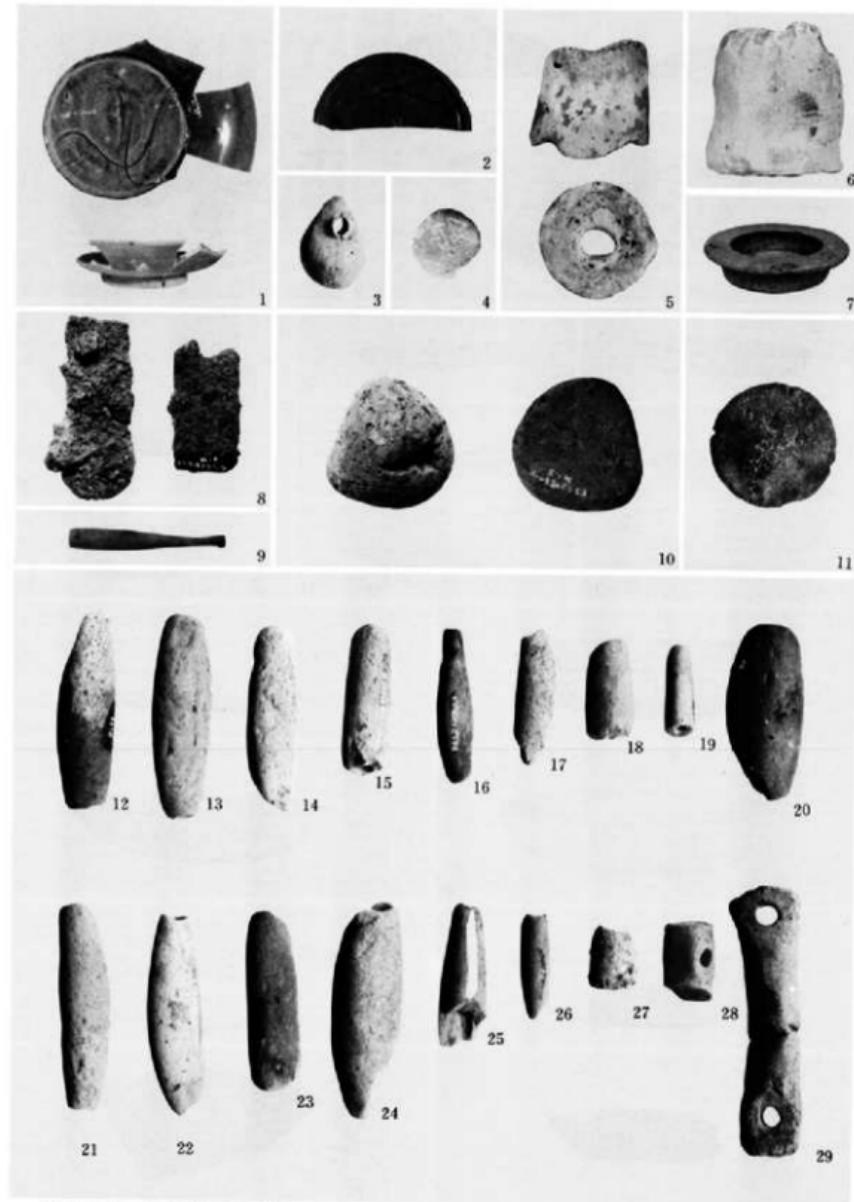
土壤出土遺物(縮尺 1/3, 17は1/2)



出土遺物(1・2は方形周溝出土、3・5は2号溝出土、4は4号溝出土、他はpit出土 縮尺:1/3)



出土遺物(1・2・5~7・13~17・20は造構面、他は包含層、縮尺:1/3)



出土遺物(1-11は造構面、包含層、12-29は土錐縮尺:1-11は1/2、12-29は約1/2)

付 論

1. 九州大学文学部考古学研究室・九州大学教養部
玉泉館収蔵の藤崎、西新町遺跡周辺の遺物
2. 「福岡市藤崎遺跡第7・11次調査出土弥生時代
人骨」

付論 1 「九州大学文学部考古学研究室、九州大学教養部玉泉館収蔵の 藤崎・西新町遺跡周辺の遺物」

九州大学文学部考古学研究室

宮井善朗

現在、九州大学文学部考古学研究室、および教養部玉泉館には、福岡市早良区藤崎遺跡・西新町遺跡周辺で採集された遺物が収蔵・保管されている。本稿では、以下の遺物について報告を行う。報告順は、弥生時代前期の遺物より年代順に、また、出土地点は、福岡市教育委員会編「藤崎遺跡」(1982) 第4図に示された地点名に據る。

- 1 1930(昭和5)年 藤崎遺跡第2地点出土土器 (考古学研究室蔵)
- 2 1925(大正14)年 藤崎遺跡第4地点及びその周辺で採集された土器 (玉泉館蔵)
- 3 1917(大正6)年 藤崎遺跡第2地点出土方格渦文鏡 (考古学研究室蔵)
- 4 藤崎遺跡第3地点出土土器 (玉泉館蔵)
- 5 修猷館高校プール敷地内出土土器 (玉泉館蔵)

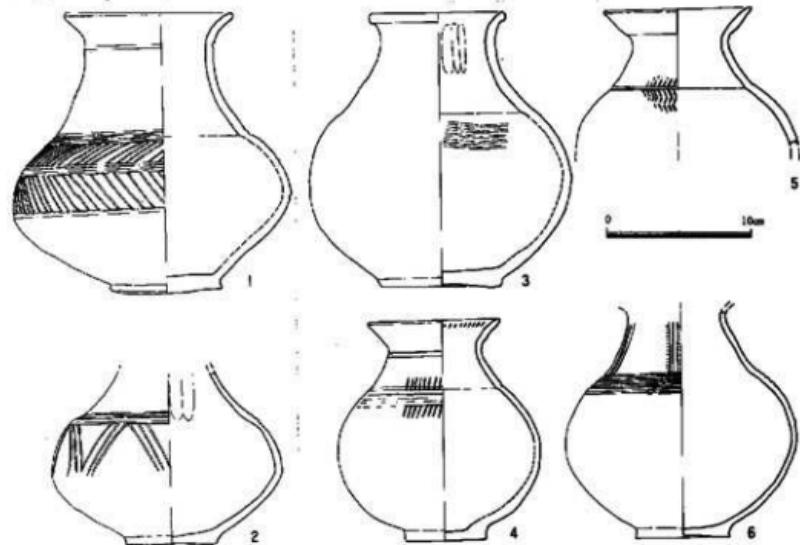
1. 1930(昭和5)年、藤崎遺跡第2地点出土土器 (第1図、図版1)

1930年7月24日、現藤崎1丁目1番地(村上氏宅内)で地下掘工事中に発見された。直ちに鏡山氏、永倉松男氏が調査に訪れ、1931年『考古学』誌上に報文が掲載されている。その後1953年に鏡山氏が訂正追補を行っている。発見位置は村上氏宅敷地の東北隅で、東側は猿田彦神社、北側は第8地点に接する。発見されたのは壺棺墓・箱式石棺墓等で、鏡山・永倉氏が到着した時には既に取り上げられていたという。壺棺は6~7基出土し、そのうちの1基より臼歯が出土したとのことである。いずれも合口式の壺棺で、主軸を東西にそって埋置されていた。地表から2~3尺の砂質の腐蝕土層があり、その下が砂層で、壺棺は腐蝕土の下面で上蓋の底部を検出したという。

鏡山氏によれば、*壺棺に副葬された*土器は7点である。が、1957年に整理を行われた小田富士雄氏は、7点に紛失1点を加えて8点としている。現在考古学研究室に保管されているのは6点であるが、その中には小田氏文献に見えぬものもある。まず現存の6点について説明を加え、その後、各文献に掲げられた実測図との対応を試み、出土個数及び遺構の性格を検討したい。

1~6はすべて壺形土器である。1は藤崎遺跡出土上器中では最も著名な土器である。円板貼付状の底部は安定が良くない。頭部は扁球形を呈し、頸部はゆるやかにすぼまり、口縁部は大きく外反する。口縁部と頭部の境付近に1条の沈線が施される。また頭部の付け根に3条、肩部に2条、頭部中位に1条の沈線をめぐらし、沈線間に短い直線をひき、有輪羽状文を描く。外面及び口縁部の内側はミガキ、内面と底部はナデ調整される。暗黄褐色を呈し、胎土に

は精良な粘土を用いており、細砂を若干含む程度である。器高19.6cm、口縁部径11.6cm、最大径は胴部中位で20.1cmを測る。2は口縁部を欠く。上げ底気味の底部に扁球形の胴部がつき、頸部はゆるやかにすぼまる。頸部と胴部の境に3条の沈線をめぐらし、胴部上半に複線山形文を配する。外面はミガキ、内面はナデ調整で仕上げられている。茶褐色を呈し、胎土には精良な粘土を用いている。最大径は胴部中位にあり、15.8cmを測る。3は、上げ底気味の底部に球形の胴部がつき、なだらかに頸部に移り、頸部と胴部の境は不明瞭である。外面は横方向のミガキ調整で仕上げられ、胴部内面には条痕がみられる。最大径は胴部中位にあり18.1cmを測る。器高19.1cm、口縁部は一部欠損しているが、復原径9.4cmを測る。4は、円板貼付状の底部をもち、胴部は球形に近い。頸部はゆるやかにすぼまり、口縁部が大きく外反する。頸部と胴部の境に沈線を1条めぐらす。口縁部と頸部の境に2条の横線、胴部沈線下に4条の横線と、その直下及び沈線直上に短斜線文を赤色顔料で描く。口縁部内面にも短斜線文をめぐらす。外面は横方向のミガキ、内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整される。胎土には精良な粘土を用い、暗褐色を呈する。器高15.2cm、口縁部径9.1cm、最大径は胴部中位で14.0cmを測る。5は胴部下半を欠くが、球形に近い胴部と考えられる。頸部はゆるやかにすぼまり、口縁部は強く外反する。頸部の付け根に沈線を一条めぐらす。口縁部と頸部の境は、棒状工具をおしつけてめぐらした明瞭な段がめぐり、一部不明瞭な沈線状となっている。黒色顔料で描かれた羽状文が部分的に



第1図 藤崎遺跡出土土器（縮尺×2）

認められる。無軸の羽状文である可能性が強い。外面から口縁部内面までをミガキ、内面はナデ調整されている。胎土中には金雲母が多く含み、黄褐色を呈する。口縁部径10.2cmを測る。6は口縁部を欠く。球形に近い胴部に上げ底気味の底部がつく。頸部はゆるやかにすぼまる。胴上半部に5条の沈線をめぐらす。赤色顔料で描かれた彩文が頭部に若干残存している。3条の縦線を1単位として、頸部周囲に5単位を配していると考えられる。その中には短横線を左右に施しているものもある。また沈線内にも一部赤色顔料が観察され、本来は沈線内にも彩色していたと考えられる。外面は横方向のミガキ、内面はナデ調整である。胎土中には金雲母が多く含み、黄褐色を呈する。最大径は胴部中位にあり16.1cmを測る。

以上の6点が現在考古学研究室に収蔵されている土器であるが、ここで、藤崎遺跡の当該遺物について書かれた各文献の実測図と実物、また実測図同士の対応を測り、同一個体を抽出し、出土個数について考えてみたい。（第1表）

ここで対応が不明なものは、鏡山・永倉文献第5図7・8、森本文献第2図4の土器である。このうち前二者は鏡山氏も言うように明らかに後世の上器である。今これを除き、弥生時代前期の墓地に伴って出土した土器の個数を考えると、不確実な対応を認めた場合10個となる。しかし第1図-5の土器や森本文献第2図4の上器のように疑問のある土器もあるため、一応8個以上と理解しておきたい。これらの土器は形態上3類に分けられる。(1)夜臼式に属する土器で、3がこれに当たる。(2)板付式土器で、4, 5, 6が含まれる。胴部はほぼ球形で、沈線は横線に用いられる程度で、文様の主体は彩文である。(3)扁球形の胴部で、頸部が比較的長いもので、1, 2が含まれる。文様は沈線で施される。(2)と比べて口縁部、頸部、胴部の境が明瞭でなく、夜臼式的な特徴も有している。いずれも弥生時代前期板付I式～II式の古段階に相当し、藤崎¹期に属する。これらの土器は、斐格墓の副葬品と言られてきたが、果してそうであろうか。藤崎遺跡では、他の該期の墓地は、第8地点東壁の夜臼式の人壺を転用した斐格

第1表 藤崎出土器実測図対応表

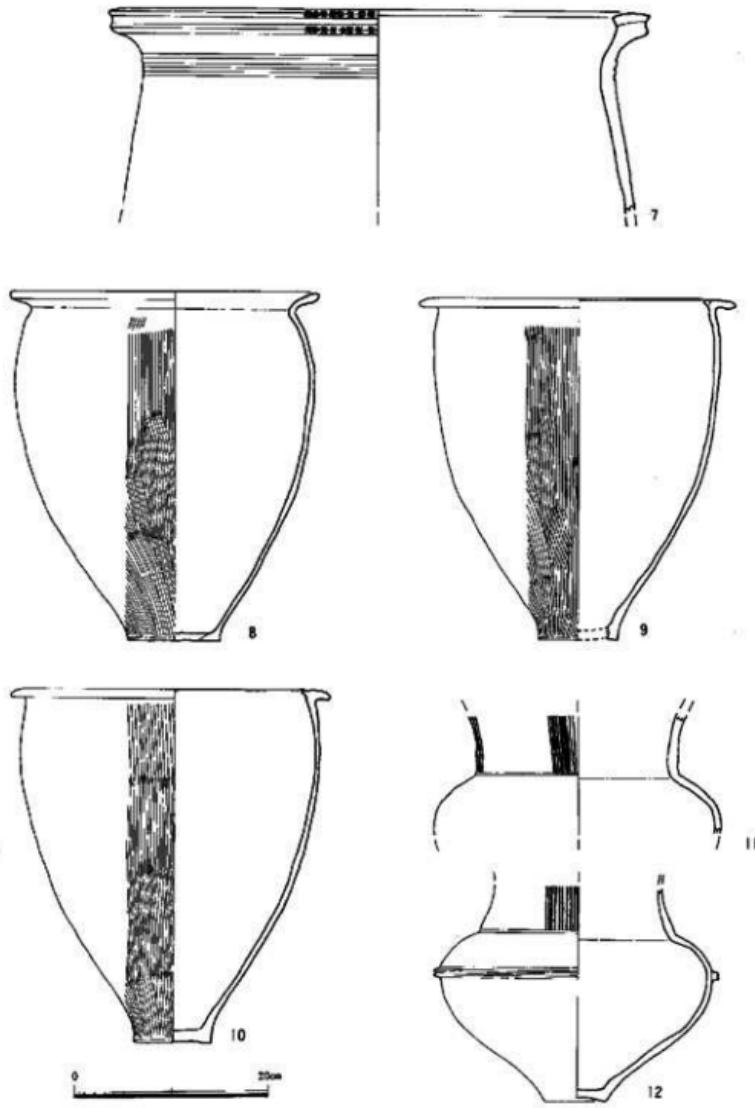
第1回 No.	鏡山・永倉 第5図1～7	森本 第2図1～4	鏡山 第5図	小林 第4図1～7	森田 2 4 7	文献名
1	1	1		1	2 4 7	鏡山誠・永倉恆男「筑前藤崎における弥生式遺跡」 『考古学』2巻 1931
2	2	2		3		森本六朗「筑前藤崎の弥生式土器」『考古学』5 巻1号 1934
3	4			7	4 5	鏡山誠「斐格墓考」『史源』第55編 1953
4	5			2	5 7	小田富士雄「長門下関周辺の弥生式土器」1957
5						森貞次郎「日本原始美術」 1964
6			四版5	4		
	3	3				
	6			5	4 6	
				6	4 7	

墓があるのみで、詳細は不明であるが、鏡山・永倉文献や、森本文献に図示された藤崎遺跡の
墓は板付Ⅱ式と考えられるもので、藤崎Ⅰ期に属する。Ⅰ期に併行する時期の北部九州の墓
制は、石棺墓・木棺墓・土壙墓が主流であり、本例も、それに準じて考えたい。藤崎Ⅰ期とⅡ
期の墓域は重複しており、Ⅰ期の石棺墓・土壙墓が破壊された後、その副葬品が、Ⅱ期の甕棺
の近くで発見され、甕棺の副葬品に見誤られたということは、ありうることである。

2. 1925(大正14)年、藤崎遺跡第4地点及びその周辺で採集された土器 (第2図、区 版2、3)

玉泉館所蔵の藤崎、西新町周辺の遺物のうちの多くは、1925(大正14)年1月から2月にかけての採集品である。採集地点の記されたものとしては、西新町刑務所前道路出土と記された土器が3点ある。出土地点の正確な位置は今日では不明であるが、文字通り刑務所前の道路とすれば、現在の水道局西営業所・県立勤労青少年文化センターの南側、及び、藤崎郵便局の北側を結ぶ線ということになるが、現在までの調査例から見ると、第2図-7のような金海式甕棺は202号線以北には発見されておらず、また第4地点の調査でも、調査区の南半からの出土が多い。^{註4}以上のことから、刑務所前道路とは、藤崎交差点付近から第8地点付近までの道路部分であると考えられる。ただし、他の2個の甕は中期のもので、第3地点の知見と矛盾はない。この2個は、金海式甕棺とは採集日が異り、同一地点とは限らない。

7(図版2~4)は弥生時代前期末、金海式甕棺の口縁部破片である。玉泉館の遺物台帳には1924年1月、玉泉大梁氏採集とある。頭部はゆるやかに外反し、口縁部上面に、粘土帶を貼付して肥厚させている。口唇部の上下にハケメ原体もしくは貝殻で、刻み目を施す。頭部には、ヘラ状工具を下から押しあてて施文し、沈線を3条めぐらせる。復原口径56cmを測る。胎土中には、多量の金雲母片や石英等の砂粒を含み、黄褐色を呈し、焼成は良好である。8(図版2-2)は、甕形土器である。ほぼ完形であるが、未接合の部分を一部図上復原した。器高36.1cm、口縁部径31.6cmを測る。口縁部は強く屈曲する「く」の字口縁である。胴は張っているが、口縁部径を上まわらない。底部は安定した平底である。口縁部はヨコナデ。胴部外面は縦方向のハケメ、内面はナデ調整される。胎土中には砂粒を多く含み、赤褐色を呈し、焼成はよい。この土器は田崎博之氏の分類に従えば、C系譜に属し、その中でもC₁型式に含まれる。底部は田崎氏の言うe手法で作られている。9(図版2-1)は、全体の2/3ほどを欠損している。口縁部はやや外傾気味に折り返して、内面に粘土帶を貼付して、鋸先口縁に仕上げている。胴部はあまり張らず、底部は欠損しているが、接合部付近で欠損したと考えられ、e手法でつくられたものと考えられる。外面は縦方向のハケメ、内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整される。胎土中には砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈し、焼成はよい。田崎分類のB系譜で、B₂、もしくはB₃に属するが、口縁部がわずかに外傾し、最高部が口縁部内側端部にあることからB₃の範



第2図 藤崎遺跡出土土器(縮尺1/6)

瞬で考えておく。器高35.6cm、口径32.5cmを測る。8は、須歎Ⅰ式新段階、9は須歎Ⅱ式古段階に属し、いずれも小児用櫛棺に転用されたものであろう。

その他、西新町出土とのみ記された弥生式土器が数点、玉泉館に収蔵されている。いずれも1924年2月に玉泉氏が採集したものである。旧町名では西新町は、現在の藤崎地域まで含めており、藤崎遺跡または、西新町遺跡の出土である。10は、鋤先口縁を呈する壺である。田崎分類のB₃式に属する。外面は縦方向のハケメ、内面はナデ調整される。胎土中には、角閃石をわずかに含んでいる。黄褐色を呈し、焼成は良い。器高36.5cm、口径32.8cmを測る。11(図版3-1)は、頸部が朝顔状に大きく外反し、肩の張る広口壺である。頸部から肩部にかけての破片である。外面と頸部内面には丹塗磨研され、頸部内面には約10本を一単位とする粗雑な暗文が施される。頸部の付け根は、ヘラ状工具を一周させて、シャープな段を形成する。胎土中には、金雲母や細かい砂粒を若干含み、焼成はよい。かなり厚手のつくりである。12(図版3-2)も広口壺で、口縁部を欠く。同一個体である頸部破片があり、図上復原した。上げ底気味の底部で、胴部は肩が張り、最大径の位置に突帯を1条めぐらす。頸部は下半で一担すぼまるが、大きく外反する。頸部には粗い暗文が遺存しており、本来頸部全面に施されていたものであろう。外面は丹塗研磨で、胴部上半は横方向、下半は縦方向に施される。頸部内面にも丹塗研磨が施される。胴部内面はハケメ調整のちナデ仕上げる。11、12のような広口壺は、藤崎遺跡K12、17、96、西新町遺跡K11、13、26等で櫛棺に転用されており、本例もそれに準ずるものとして理解されよう。田崎編年の須歎Ⅱ式古段階に属する。

3. 1917(大正6)年、藤崎遺跡第2地点出土の方格渦文鏡(第3図、図版4)

第1図の土器と同じ現村上氏宅内から発見された。箱式石棺の副葬品である。中山平次郎氏によると、発見地は付近の水田より約1間高い所である。箱式石棺は「地下一二尺許の所に平石を以て囲んだ細長き箱様の構作物(長さ一間許、幅一端に於て二尺許り、他端に於て一尺許り)を偶然掘り當て」たものであり、鏡は、石棺内の土を取り除く際に、鋤先にかかるて発見された。鏡は面径9.1cm方格渦文鏡である。斜縁を呈す鋸齒文縁である。L字、V字を欠き、方形格より出たT字文の左右から藤手状の渦文が外巻きに配される。乳はない。柄口隆康氏によれば、類例10例が挙げられており、日本では、長崎県上県郡上対馬町古里塔の首遺跡4号石棺墓^{註7}北九州市馬場山遺跡5号石棺墓^{註8}から出土している。

4. 藤崎刑務所内出土土器(図版3-3、4)

この遺物の観察及び編年の位置付けについては、西新町遺跡の報告書に実測図とともに、詳細に述べられている。それによると、两者とも弥生時代終末の西新町Ⅱ式土器である。藤崎遺跡や西新町遺跡では、本例のような土器は、櫛棺に転用された例は稀で、ほとんど住居跡等の

生活遺構からの出土である。本例も日常土器であり、生活遺構からの出土であろう。出土地点は藤崎遺跡第3地点である。弥生時代終末(西新町Ⅰ、Ⅲ式期)の藤崎遺跡の住居跡は、第4地点M地区・第6地点東北隅で検出されているが、数としては、西新町遺跡と比べて非常に少い。しかし、目的的にはあれ、生活遺構とそれに伴う遺物が発見されていることは、藤崎遺跡に方形周溝墓が営まれる前段階に、規模はともかく、広い範囲に住居が営まれたことを示唆している。

5. 修猷館高校プール敷地出土土器（第4図、図版1、3）

修猷館高校は西新町遺跡の範囲内に含まれる。プールは学校敷地の東北隅にある。構内では西約150mの体育館建設時にも遺物が採集されており、この付近まで集落が広がっていたようである。台帳に発見年の記載はないが、1928年のプール建設時の出土であろう。13、14はとともに飯蛸壺である。13(図版3-5)は、砲弾型を呈し、外面ともナデ調整され、凹凸が多い。口縁下に1孔を穿つ。穿孔は外側から上向きに穿れたものである。胎土中には砂粒を多く含ん



第3図 藤崎遺跡第2地点出土方格溝文鏡（縮尺3分の1）

でいる。14(図版3-6)は卵形に近い形状を呈する。内外面ともナデ調整されるが、外側はハケメをナデ消している。胎土中には金雲母や細い砂粒を若干含む。口縁下の穿孔は、外側から下向きに穿たれている。

和田晴吉氏の飯蛸壺の分類によると、両者ともコップ形で丸底のA類に属する。西新町遺跡では、同類の飯蛸壺がD地区6号、8号、13号、E地区2号・F地区2号の各住居跡か

ら出土している。飯蛸壺は、大阪湾沿岸で弥生時代前期から用いられ、博多湾沿岸では弥生時代終末～古墳時代初頭頃から用いられた漁撈具である。田崎博之氏は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての西新町、藤崎の両遺跡を「集落としての西新町、墓地としての藤崎」と位置付け、西新町遺跡の経済的基盤を、漁撈と海上交易に求めている。本例もそうした背景の中で理解できるものである。

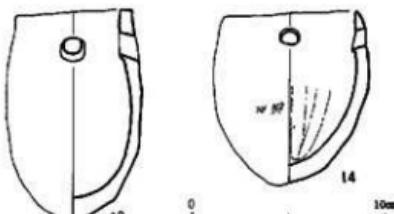
出典

小 結

以上 九州大学文学部考古学研究室、教養部玉泉館収蔵の遺物について述べてきたが、ここでまとめとして、藤崎遺跡の概略について述べてみたい。

藤崎遺跡はⅠ期からⅩ期に時期区分され、Ⅰ～Ⅲ期が弥生時代前期、Ⅳ～Ⅶ期が中期、Ⅷ期は後期初頭、Ⅸ期は終末である。Ⅹ期とⅪ期の間の断絶を境に大きく二期に区分でき、その性格は互いに大きく異っている。まずⅠ～Ⅱ期は墓地の時期である。前期初頭(Ⅰ期)より墓地の造営が始まり、該期の墓地は、石棺墓、土塚墓であったと考えられる。第1図-1～6はその副葬品である。墓域は第2地点、第8地点及び猿田彦神社境内にはほぼ限定されよう。以後規模を広げつつ、Ⅲ期まで墓地が営まれる。第4地点周辺で採集された図2-7～12は、いずれも甕棺墓に用いられたと考えられ、7はⅢ期、8～12はⅥ～Ⅶ期に属する。また弥生時代中期(Ⅴ～Ⅶ期)には北側の旧刑務所内(第3地点)、東側の西新町にも墓地が営まれる。即ちⅠ～Ⅱ期では、藤崎遺跡を核として北側・東側への拡大、進出という形で遺跡が広がるが、そのすべてが墓地である。従って該期の集落の様相、生業については不明な点が多い。後背湿地を耕作地とし、その付近に住居を営んだとするなら、現猿田彦神社付近から藤崎交差点南にかけての高高地等が候補地となろうが、未だ該期の生活遺構・遺物については、検討すべき点が多く、今後の課題となるであろう。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての藤崎遺跡については、東接する西新町遺跡とあわせて、集落・墓地・生業の様相が、ある程度把握できる。まず、後期初頭以来断続していた



藤崎・西新町に、弥生時代終末（西新町Ⅰ・Ⅱ式期・藤崎Ⅰ期）に再び遺跡が築かれる。この時期には、藤崎・西新町ともに広く集落が営まれる。この時期の墓地は、第2地点の箱式石棺墓周辺に求められよう。第3図の方格渦文鏡を副葬していた箱式石棺墓は該期のものであろう。次の段階（西新町Ⅲ・Ⅳ式期）に入って、藤崎遺跡では方形周溝墓が営まれるようになり、藤崎遺跡は再び墓地としての性格が強まる。これに対して、西新町では継続して集落が営まれ、その範囲は、第4図-13、14の飯蛸壺や、修猷館高校体育館敷地内出土土器が示すように、修猷館構内全面に広がっていたと思われる。この集落の生業としては漁撈があげられる。西新町・藤崎両遺跡からは、飯蛸壺、土鍤、石鍤等の漁撈具が若干出土している。同様な立地で、漁撈具を多數出土した福岡県糸島郡志摩町御床松原遺跡では、弥生時代前期から古墳時代前期にかけて、連繩と集落が形成される。漁撈具としては多種多量の土鍤・石鍤をはじめ鉄製・骨角製の漁具を多量に有しているが、藤崎・西新町で多く見られる飯蛸壺がなく、質的に異った様相を示している。これは漁撈対象の差異にもよるであろうが、それ以上に、飯蛸壺が畿内系の土器であり、該期の藤崎・西新町遺跡にこの他にも多量の外来系土器、とくに畿内系、山陰系土器が流入することを考えると、藤崎・西新町への該期の集落は、漁撈に加えて、他地域との海上交易が重要な生業であり、他地域との密接な交流の中で、その強い影響をうけつつ形成されていった集落であろう。

本稿は福岡市教育委員会井沢洋一、九州大学考古学研究室田崎博之両氏の助言を得て、同研究室の宮井善朗が執筆、編集を行ったものである。また、岡崎敬、横山浩一、西谷正各先生方をはじめ九州大学考古学研究室の方々、同教養部図書館手塚恒子氏、福岡市教育委員会の方々には、多くの教示と協力を賜った。末尾ながら記して感謝致します。

註1 福岡市教育委員会『藤崎遺跡』 1982

註2 福岡市教育委員会『藤崎遺跡』 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ 1981

註3 橋口達也氏は、木棺墓としている。「日本における稻作の開始と発展」『石崎・曲り田遺跡Ⅲ』 1985

註4 註2文献

註5 田崎博之「須恵式土器の再検討」『史測』122号 1985

註6 中山平太郎「古式支那鐵鑄造（二）」『考古学雑誌』9巻3号 1921

註7 碓山達雄『古鏡』 1979 ただし佐野はすべて渦文が円巻きであり、外巻きのものは本例のみである。

註8 長崎県教育委員会、九州大学考古学研究室「対馬」 1973

註9 北九州市教育文化事業団『馬場山遺跡』 1980

註10 福岡市教育委員会『西新町遺跡』 高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 1982

註11 福岡県教育委員会『西新町遺跡』 1985

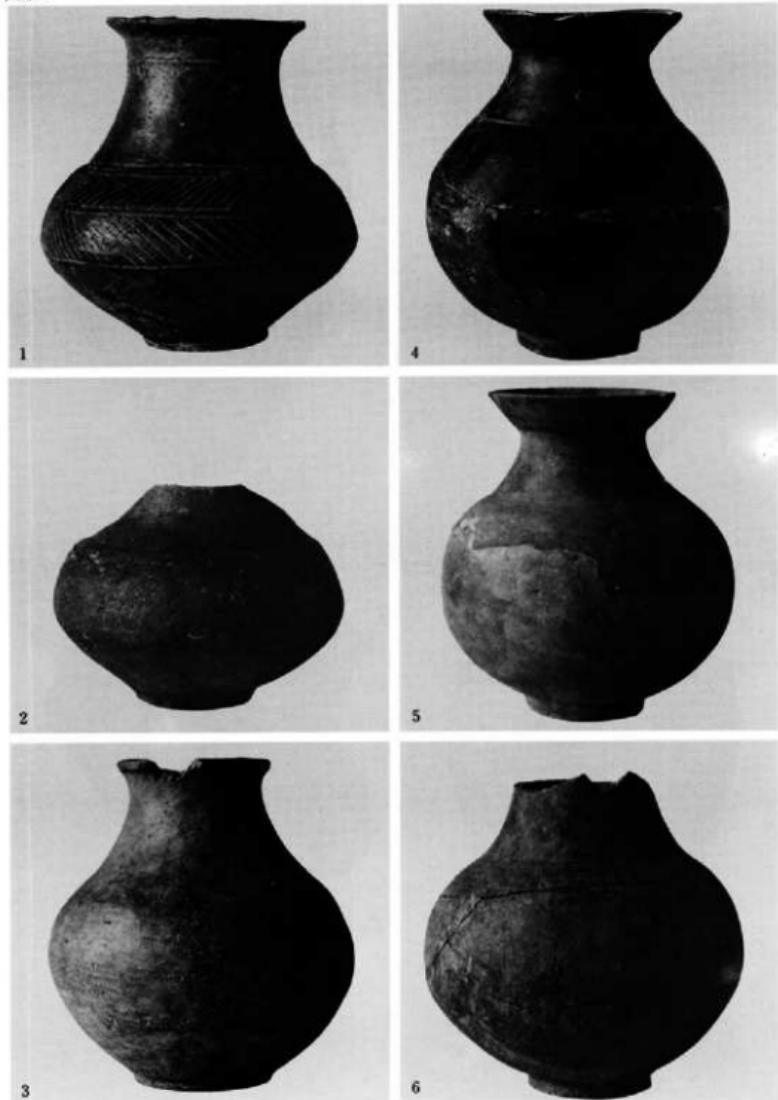
註12 本項については、修猷館高校卒業生の岩本陽泥、山田元樹氏（現九州大学文学部考古学研究室）、東千草氏（同朝鮮史学研究室）の教示を得た。記して感謝します。

註13 和田清喜「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』 1982

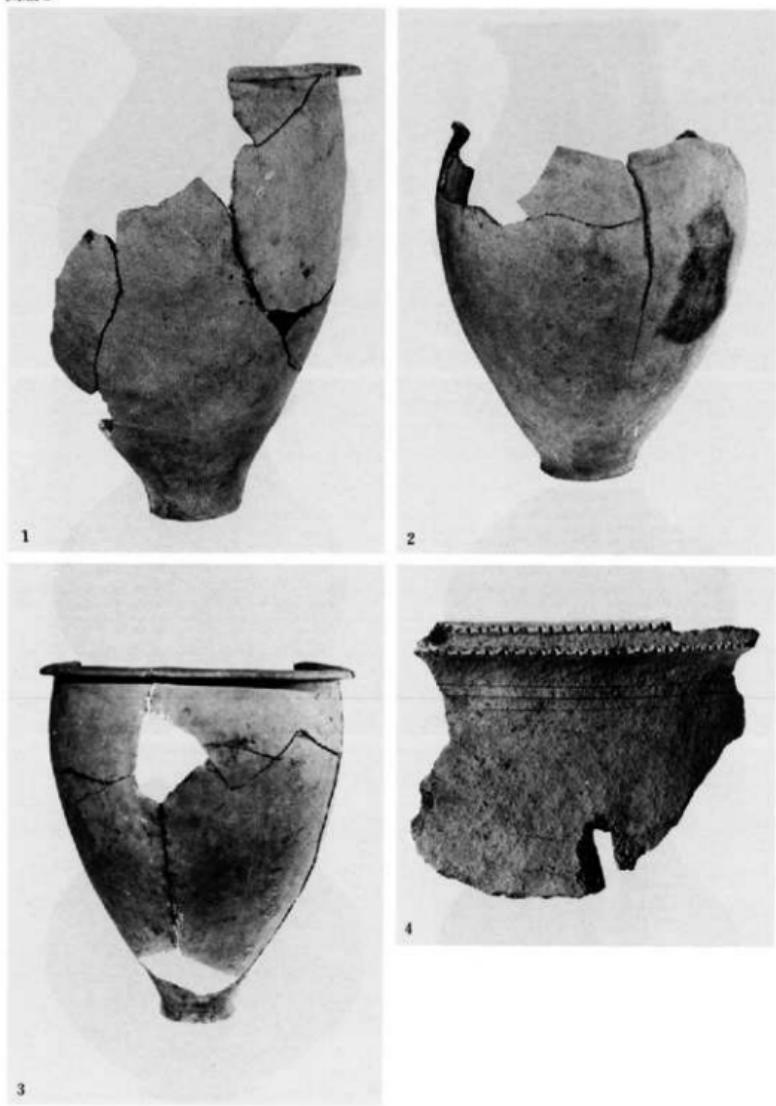
註14 田崎博之「古墳時代初期の筑前地方」『史測』120号 1983

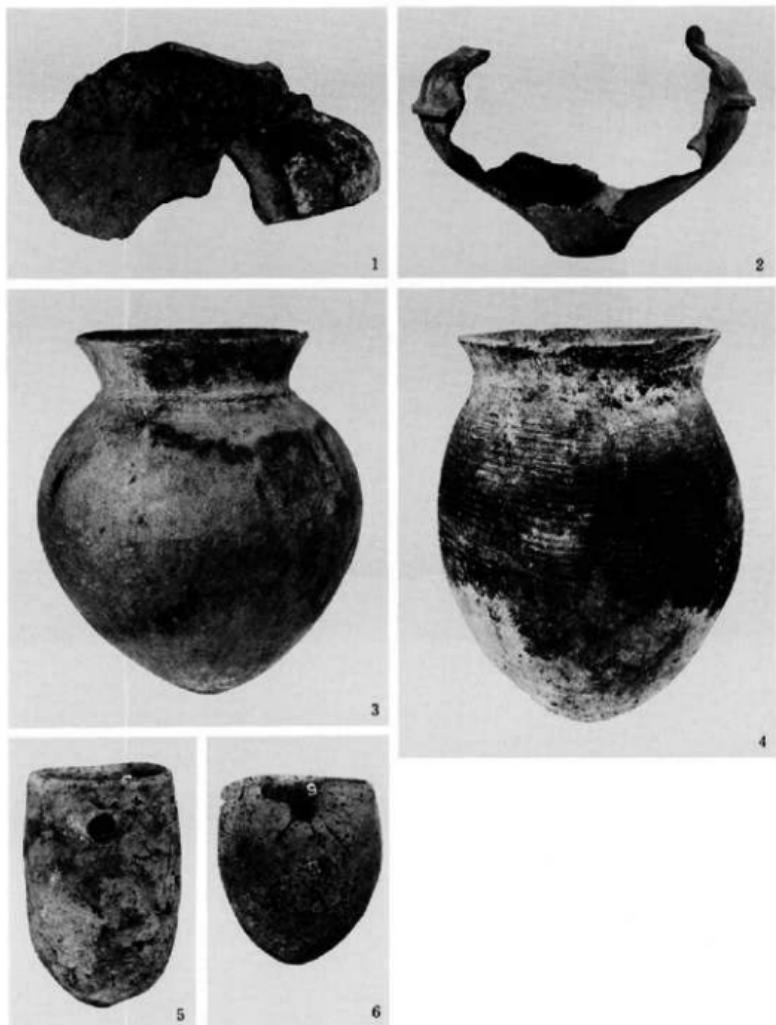
註15 志摩町教育委員会『御床松原遺跡』 1985

圖版 1

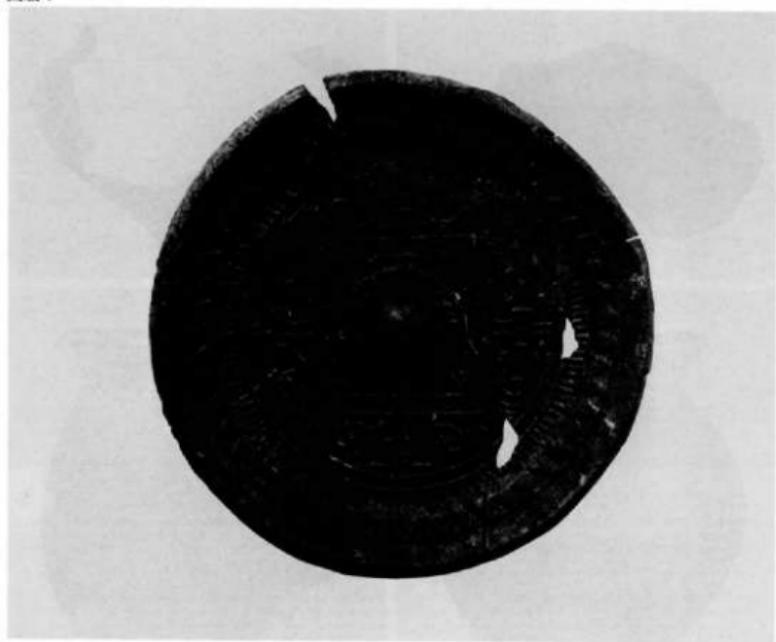


圖版 2





图版 4



付論2 「福岡市藤崎遺跡第7・11次調査出土 弥生時代人骨」

九州大学医学部解剖学第2講座

中橋孝博、永井昌文

藤崎遺跡は福岡市西城の藤崎一帯に広がる古砂丘上に営まれた遺跡で、古く1912年に箱式石棺が発見されて以来、現在にいたるまで十数次に亘る発掘調査が重ねられてきた。この間、弥生時代から中世にまで及ぶ遺物・遺構が発見され、1977~78年の地下鉄工事に伴う調査では、主に甕棺から20体近くの弥生人骨も出土している。これらの人骨資料に関しては既に永井(1981)が報告しているが、その後、第7次(1983)、第11次(1985)の調査に際し、新たに4体の弥生人骨が出土した。いずれも保存状態が不良で、残念ながら詳細な人類学的検討は不可能であったが、以下に不十分ながらその知り得たところを報告しておく。

A 第7次調査出土人骨

福岡市早良区藤崎1丁目における1983年度の調査において、いずれも接口式甕棺中より見出された人骨である。

〔1〕7-8号人骨(弥生時代中期後葉)

右大腿骨の骨幹上部片の他は、細片を残して消失している。

(性別・年齢)

右大腿骨片の観察所見から、恐らくは成人に達しているものと推察されるが、正確な年齢は不明である。また、推定周径が約82mmを示し、一応、成人として考えるならば、この値は同じ福岡市内の甕棺人骨である金隈弥生人の女性平均値(右:80.7、左:81.6mm、中橋他1985)に近い。また、金隈人骨の計測値をもとにした筆者らの性判定法(Nakahashi and Nagai)を適用した結果からも女性であることが示唆された。

(人骨形質)

保存不良のため、表中に示したように、身長その他、いずれも不明である。ただ、大腿骨の断面形状に、いわゆる柱状性が認められない点だけを記しておく。

〔2〕7-11号人骨(弥生時代中期前葉)

頭蓋片としては、右頭頂骨の他、前頭骨、左頭頂骨の各小片と、上顎、右大臼歯2本が遺存

している。又、四肢骨では、左右大腿骨の骨幹部と、脛骨、腓骨の各小片が見出せる。

(性別・年齢) 左右大顎骨の観察、計測所見から男性とみなされる。また、歯の咬耗が弱く、観察し得る頭蓋主縫合が開離している点から、比較的若い成年人骨と考えられる。

(人骨形質) わずかに右人顎骨において、骨体中央部矢状径32mm、横径28mm、周径94mmの計測値を得た。これらの値はいずれも金隈弥生人男性の平均値（それぞれ、30.1mm, 27.1mm, 90.3mm）を上回っており、かなり屈強な男性であったことを窺わせる。また、断面示数も114.3と、津雲繩文人の平均値（114.6：右、19例。清野他1928）に近く、いわゆる柱状大腿骨となっている。

[3] 7-12号人骨（弥生時代中期中葉）

頭蓋では冠部、及び顔面の一部と、下顎骨左半部が遺存している。その他、上腕骨、及び前腕骨の一部が認められる。

(性別・年齢) 保存不良のため不明確ではあるが、頭蓋の計測値、及び各筋付着部の観察所見から、女性である可能性が強い。また、歯の咬耗度や縫合が開離していることから、成年人骨と考えられる。

(人骨形質) 計測値としては、頭蓋最大長173mm、最大幅135mm、最小前頭幅93mmの3値のみを得た。いずれも金隈弥生人女性の平均値（それぞれ、176.8mm, 138.3mm, 93.7mm）を幾分下回っているが、頭長幅示数は78.0（中頭型 mesokran）で、金隈弥生人（78.0）に一致する。

また、遺存している部分でみると、抜歯の痕跡は認められない。一応、歯式を以下に示しておく。

M ₁	M ₂	M ₃	○	○	○	○	/	/	○	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	
/	M ₁	/	/	/	/	/	○	○	○	○	C	○	P ₂	M ₁	M ₂	×

(○：歯槽開放 ×：歯槽閉鎖 /：欠損 ●：遊離歯)

B 第11次調査出土人骨（11-3号）

福岡市早良区高取2丁目における1985年度の調査において、やはり接口式のK-3号甕棺から見出された人骨である。甕棺の編年から、弥生時代後期初頭の人骨と考えられている。

遺存部位として、頭蓋冠の一部と、左右大腿骨、脛骨の骨幹部が存在するが、他は全て消失している。

(性別・年齢) 頭蓋骨の乳様突起部、及び、大顎骨の計測、観察所見から男性とみなされ、縫合の癒合がかなり進行している点から、既に然年に達した人骨と考えられる。

(人骨形質) 左右大腿骨の骨体矢状径はともに約31mm、横径は28mm、周径は約91~2mmで、いずれも金隈弥生人男性の平均値を少し上回っている。又、断面示数は110.7となり、全体的に筋

発達の良好な男性であったことを窺わせる。

以上、藤崎遺跡の第7、11次調査によって計4体（男性2体、女性2体）の弥生中～後期人骨が出土したが、保存不良のためその形質を十分には探り得なかった。ただ、わずかながら得られた計測値でみる限りにおいて、金隈等、これまで報告されている北部九州出土の弥生人骨との間に、特に目立った差異は見出しづらい。すなわち、7-12号人骨の頭型が中頭型(78.0)に属する点、2体の男性人骨（7-11号、11-3号）の大腿骨がいずれも頑丈な骨体をもつ点、あるいは、7-12号人骨に風習的抜歯の痕跡が認められない点も、従来報告されている当地方の斐宿人骨と、その傾向を同じくするものである。なお、男性の大腿骨にやや柱状性が認められたが、わずかに1～2体での所見であり、近隣の金隈弥生でも、断面示数が139.3～83.9（右）の間で広い変異を示すことを考えると、これをもって直ちに津雲等の縄文人の形質に結びつける訳にはいかない。ただ、当遺跡がかつての海岸部に立地している点を考慮すると、四肢を始めとした人骨形質に、そうした生活環境に関連した、内陸部の弥生人とは幾分異った特徴があらわれることも考えられるので、今後、当遺跡からより保存良好な人骨が出土して、上記問題点が検討できる日を期待したい。

（末筆ながら、当人骨を研究する機会をうけて下さった、福岡市教育委員会の諸先生、諸士に深謝いたします。）

藤崎遺跡第7・11次調査出土人骨

△：保存不良 ▲：部分的保存

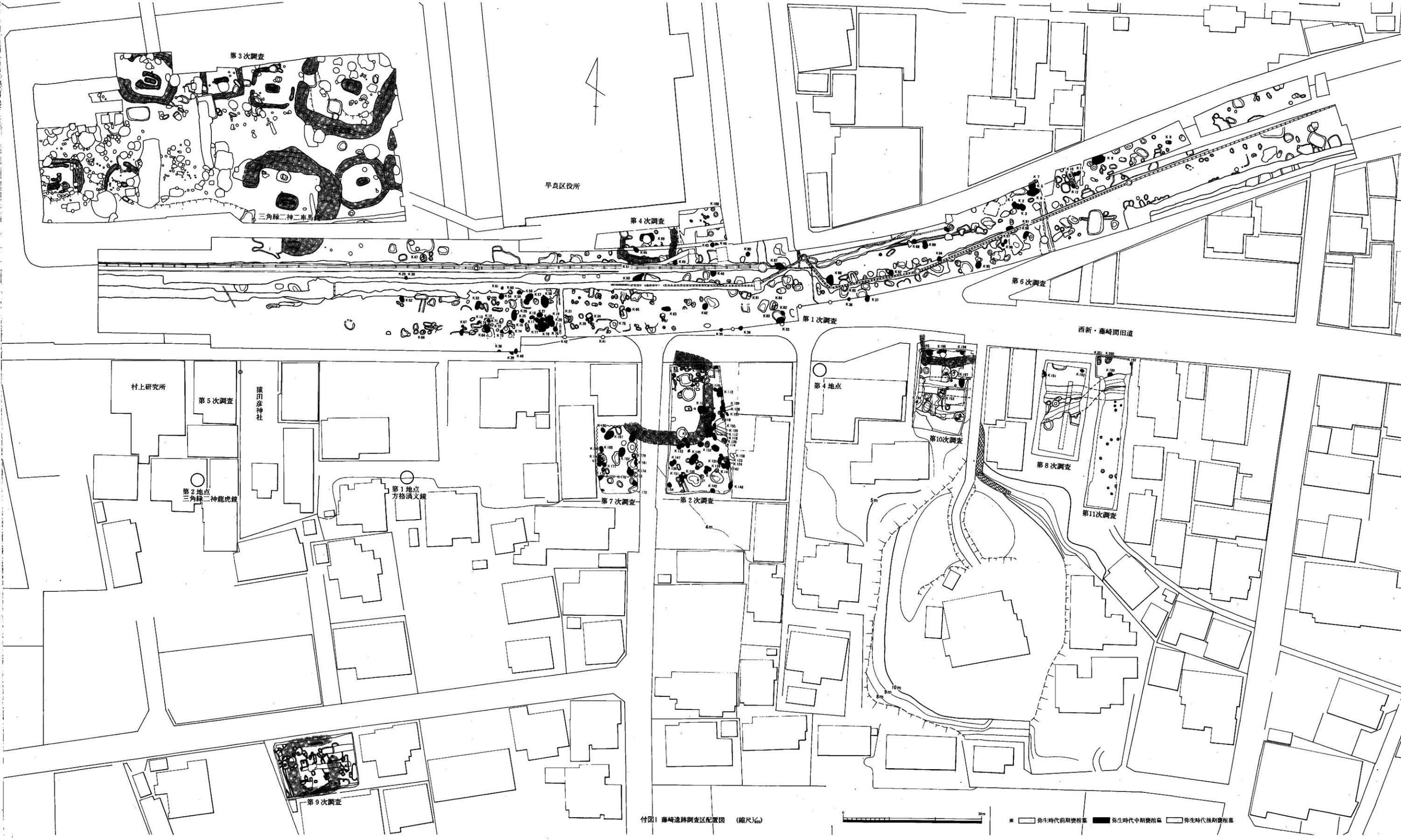
入骨番号	発掘年次	時代	性	年齢	保存状態	標識交換	身長	性別	備考
7-8	第7次(1983)	弥生中期後葉	(♀)	成年(?)	▲	不明	不明	不明	
7-11	*	弥生中期前葉	♂	成年	▲	仰臥人形葬(?)	*	不明	
7-12	*	弥生中期中葉	♀	成年	△	仰臥人形葬(?)	*	無	
11-3	第11次(1985)	弥生後期初期	♂	老年	▲	不明(?)	*	不明	頭蓋幅示数78.0

文献

永井昌文（1981）「山七人骨の鑑定」福岡高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ、藤崎遺跡、福岡市教育委員会

中橋孝博、土肥直美、永井昌文（1985）「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」金隈遺跡、福岡市教育委員会

Nakahashi,T.and M.Nagai 「Sex assessment of fragmentary skeletal remains」(In Preparation)
清野謙次、平井隆（1928）「津雲貝塚人骨の人類学的研究、第4部、下肢骨の研究」人類誌、



付図1 畠崎遺跡調査区配置図 (縮尺 $1/400$)

藤崎遺跡Ⅲ

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第137集

1986年(昭和61年) 3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-7-23

印刷 福博綜合印刷株式会社

